T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT 建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT Society of Architectural Design Education
巻号 / vol.	031
発行日 / Pub. date	2007, 6
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

本館1F-東工大出版物
華 : ka
20070000 31
大岡山 20091106 00014802 (2009)

東京工業大学
21.11.06
附属図書館

ka 華 31

annual 2007

design journal
department of architecture and building engineering

Tokyo Institute of Technology

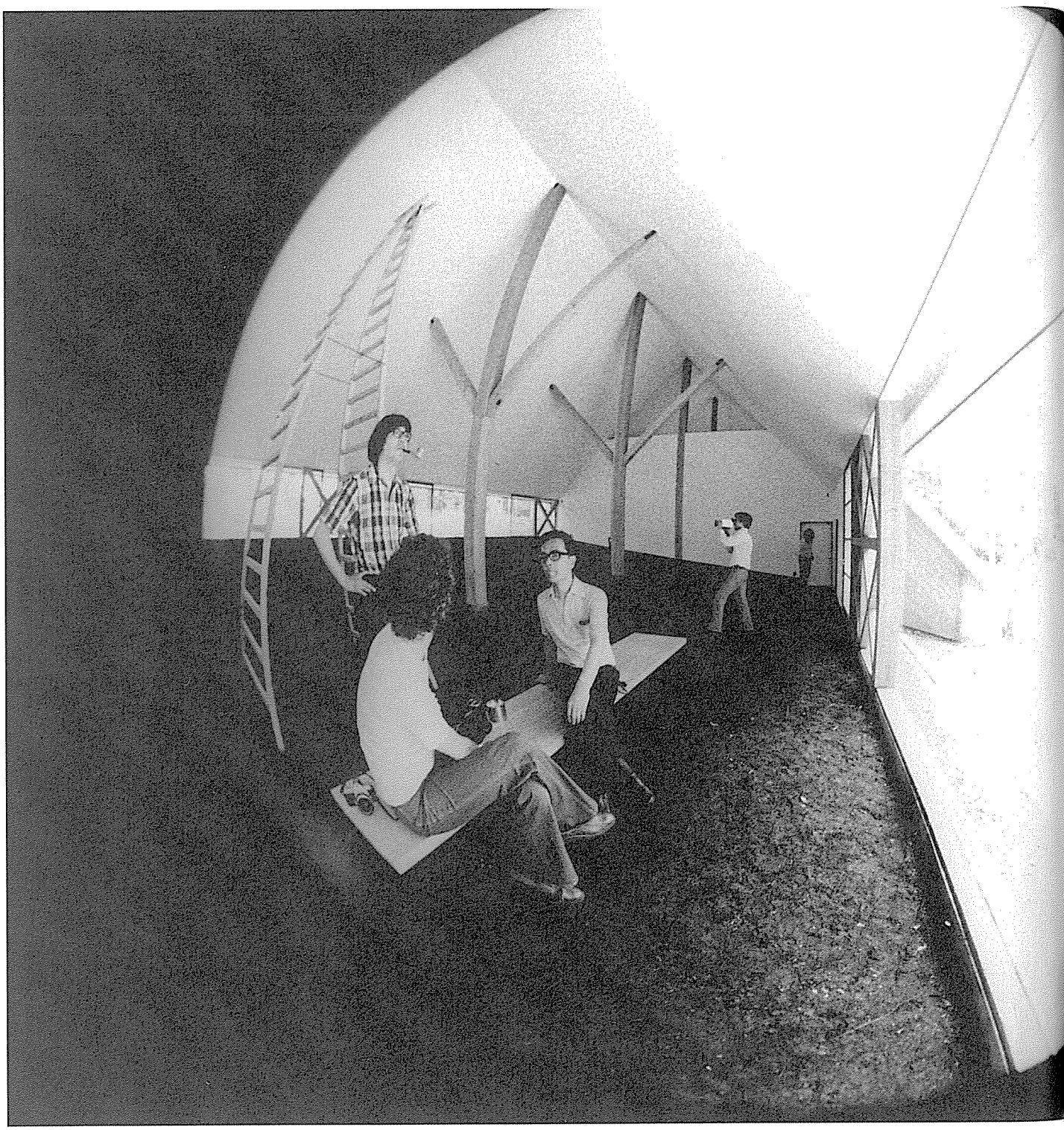


巻頭：篠原一男

Headline: Kazuo Shinohara

華『ka』 2007年 年間号
[巻頭記事] 多木浩二インタビュー：篠原一男を憶う
(インタビュアー：坂本一成)
エッセー：篠原さんの思い出(平井 聖)
[東京工業大学 2006年度 卒業設計・修士制作]
[卒業設計合同公開講評会 東工大×藝大×東大]
[建築学科 建築設計製図]
[大学院建築デザインコース 建築意匠設計]
[大学院建築デザインコース ワークショップ]
同済大学学生会館、築地中央卸売市場
[ミュース・投稿]
大橋晃朗の家具展(安森亮雄)、萬来舎写真展(吉田紗織)
世界の建築教育：
インド都市建築大学(立川玲香)、中東工科大学(沖村徹也)
他
[Information]

東京工業大学
21.11.06
附属図書館



谷川さんの住宅／1974年

巻頭記事：篠原一男

Headline: Kazuo Shinohara

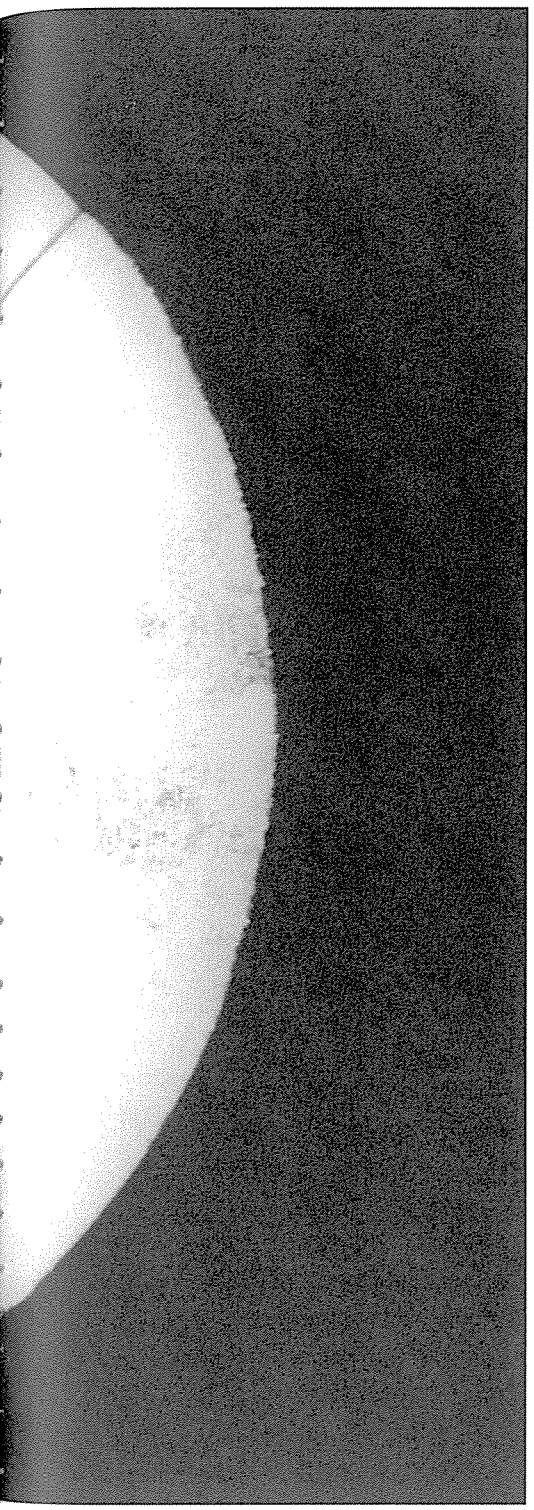
多木浩二インタビュー：篠原一男を憶う

Interview with Koji Taki: Remembering Kazuo Shinohara

インタビュアー：坂本一成［教授］
Interviewer: Kazunari SAKAMOTO (Professor, Tokyo Institute of Technology)

多木浩二　Koji TAKI
1928年、兵庫県に生まれる。
東京大学文学部美学科卒業。元千葉大学教授。
専攻は芸術学・哲学。
建築・現代美術・舞台芸術などの批評活動を行いつつ、
18世紀末から現代までの政治、社会、芸術、文化等の相関を通じて
歴史哲学への問いに関心を集中している。
◉主な著作
『生きられた家』（田畑書店、1976年）
『「もの」の詩学』（岩波書店、1984年）
『シジフォスの笑い――アンセルム・キーファーの芸術』（岩波書店、1997年）
『建築・夢の軌跡』（青土社、1998年）
『雑学者の夢』（岩波書店、2004年）
『進歩とカタストロフィ――モダニズム 夢の百年』（青土社、2005年）ほか多数

以下は、2006年12月12日に
緑が丘1号館坂本研究室にて行われたインタビューによる（敬称略）。
写真：多木浩二　担当：安森亮雄（編集部）、大内祥子D3・本橋良介D2（学生編集委員）





最初の出会い

坂本　これまで多くの人によって篠原一男論がなされてきました。その中の多くはオマージュと思われるものです。今日は篠原先生から友人として最も信頼されていた多木さんにお話をしていただくことで、単にオマージュではないお話を、つまり篠原一男の建築が何であったのか、その建築によってどのような意味を獲得したのかを、明らかにしていただければと思います。

多木　どのような人物であったかもでしょうね。

坂本　そうですね。まず多木さんと篠原一男の出会いについてですが、1964年の展覧会（「デパートのなかに建った2つの家」朝日新聞社主催、小田急百貨店）がきっかけですね。その展覧会について多木さんが書かれた『Glass & Architecture』の文章を読んで、篠原先生が手紙を送ったと聞いております。

多木　はい、それはそのとおりでした。多分、幸運な出会いだったんでしょうね。私は彼に出会わなければ、その後、いまのように建築に深入りすることもなかったでしょうし、知的な問題としては扱ってもその創造にまでは立ち入らなかったでしょう。はっきり別の道をあるいたでしょうね。その方が哲学者としてはよかったかもしれないのですから、今にして思えば一概に幸運とはいえません。

その展覧会評は（T）というイニシアルだけしか署名しなかったし、まさかご本人の反応があるなど考えてもいませんでした。知己の間柄ではなかったのですしね。その展覧会には、賛助出品している芸術家、詩人たちがいましたから、そのなかの誰かから聞き出したのでしょうね。その文章は展覧会の印象と、ちょうど64年に紀伊国屋新書として『住宅建築』が出版されたばかりでしたから両方の感想が入り交じっています。

『住宅建築』は新鮮な本でした。そこからは建築について学ぶというだけでなく、建築家というものについて教えられることが大きかったと思います。いや特にこの建築家の心性、感情の動き、飛躍する想像力、途方もない自信について学んだのです。言説を辿っていますとおそろしく切れ味がいいし、着想が飛躍するとともに、思いがけない面をもつ大胆な建築家だということが心に残りました。私の文章は短いし、建築評論というより軽いエッセイでしかなかったのですが、篠原さんが早速反応して下さったのに驚きました。いまでも覚えているのは、『住宅建築』にはなかなか見事なアフォリズム――たとえば住宅は大きけれ大きいほどいい――があり、同時になんというナルシシズムだろうか、とも思いましたし、どこまでいっても自分のことばかりです。そのことも書きました。ナルシシストであることは、やがて最初の『作品集』を出すときに、本の題名が「篠原一男」だというので、またまたナルシシストだな、と思いました。それは彼の著作であって、他人の論文は決して乗せませんでした。

面白かったのは彼が病理学的空間も作っていいのだ、と言い

21.11.06



白の家／1966年

切っていることでした。この人は本当は暗黒を抱えているのか、それともポーズなのか、分からなかったのですが、ずっと後になってから精神分析をしてみたい、人物のではなく作品の、ですが、そんなことを思いました。

いうまでもありませんが、彼が百貨店で試みたことは、住宅という、施主にとってはひっそりと私的なものを、パブリックなところへ持ち出すことで、どんなに小さくてもあくまで普遍的であるという主張というか、思想というか、姿勢というか、独自なものを感じさせました。住宅は美的表現として自立しうるのだ、と主張していたのです。『住宅建築』とならんでじつに爽やかな印象でした。そういう意味では『住宅建築』を貫いている思想と繋がっていました。

その手紙がきて、電話で逢う日をきめ青山であいましたが、篠原さんもぎりぎりまだ30代で、若々しかったですね。珍しく雪が降っていたのを覚えています。40年以上前のことになりますね。

篠原一男を見る／考える とはどんなことだったか

坂本　その後交流が続いていく訳ですが、多木さんは、篠原一男の建築の意味を本人の理解を越えて見いだしていたと言えるかもしれませんし、また大変おこがましい言い方になりますが、多木さん自身も篠原一男によって建築の意味を見いだしたのではないかと思われるところがあります。事実、篠原一男の建築の実物を最も多く見ているのは多木さんではないでしょうか。その過程で篠原論も書かれてきました。

多木　数多く見ているのは、個人住宅ですから、私のように親しい人間は完成時に見ることができたからです。住宅は施主が住んでしまうとなかなか見る機会がないものです。珍しいこともありました。「鈴庄さんの家」は篠原さんの家族と一緒にいきました。まだお子さんたちが小さいときでした。篠原さんの家庭を垣間みました。この安定した境地はあとでは感じなくなります。沢山作品を見ている点では、私は恵まれています。そうでないと書けないですからね。

それから「篠原さん以上に」その意味を見いだしていたと言われましたが、ちょっとニュアンスが違います。多少補足しないと誤解を招きます。実際は「篠原さん以上」というより、建築家でない私には、建築家とはちがった意味を建築に見いだしていたということです。それは不思議ではありません。篠原さんにかぎらず、建築家自身が考えていることと私が見ようとするものとはちがいますが、このずれは当然だと思っています。むしろ考えていないことを見いだそうと努力しました。篠原さんの作品をとおして建築の意味を見つけていたというのは、その通りで、その後試行錯誤しながら建築について考えるきっかけには違いありません。

坂本　今日はその篠原建築について語っていただくわけですが、そもそも多木さんにとって建築は、広範な関心のなかのごく一部です。40冊近くある著書のうち建築について書かれたのはごく一部ですね。建築について一冊に纏めているのは『建築・夢の軌跡』（1998年）ぐらいで、その他『ことばのない思考』（1972年）と『進歩とカタストロフィ』（2005年）で一部含ま

れています。もちろん『生きられた家』(1976年)が別にありますが。

多木　建築はお前の一部でしかないじゃないかと言われることは多いのです。それは私が建築家ではないし、書きたいことが無限にあるわけですから、建築に無関係な主題について盛んに書いているのは当然です。でもそんなことは建築の本質を考える上で妨げにはなりません。

建築が関心の一部だというのは正確ではありません。それは一部ではないのです。哲学的、人文学的な思考というのは、具体的なあらゆるものを関心の対象にします。哲学の学説そのものはある意味で専門領域ですが、そもそも哲学とは世のさまざまな領域を横断し、具体的なもので思考を試し、そこからなにかを発見するものです。私は建築を「人間の生」が空間的に具象化したものと考えていましたから、建築という空間はたんなる一部分の関心ではなく、なにを考えるにしても常に関連しています。私はおそかれはやかれ具体的に建築に関心をもつことになったでしょうが、篠原さんと出会わなければ、いまのような深い関係はもたなかったでしょうね。ただし私のなかで、自分で重要だと思っているいくつかの本は、いまのところ残念ながら建築論ではありません。

いま『生きられた家』の話が出ましたが、この本は自分にとって重要な本のひとつですが、あれは建築論ではありません。建築論に接していると思われているかもしれません。基本的には人間の住む世界の現象学的な考察です。最初に活字になったきっかけは篠山紀信の写真ですが、それは長年考えてきたことをたまたま書いただけで、本当のきっかけは60年代後半に友人と一緒に読んだ、ハイデッガーの『BAUEN, WOHNEN, DENKEN』です。だから言語の問題も、身体も、象徴的コスモロジーの問題も、さらには消費社会まで論じています。それを篠原さんは酷評しましたが、彼には建築を創造することだけを考えている建築家であるから当然で、私はそれとは関係ないことを問題にしていたのです。彼はその根本的な食い違いは理解しなかったのです。というより建築評論家になってほしい人間があのような本をかくのは間違いだと思っていたのでしょう。

坂本　多木さんの哲学、思想、そして人文科学、社会学、美術、写真等の様々なジャンルに対する関心のなかで、出会いのきっかけとなった展覧会を見てどんな感想をもたれたのか、大変興味があります。そこでまず、篠原一男の建築に興味をもった理由からお話いただけますか。

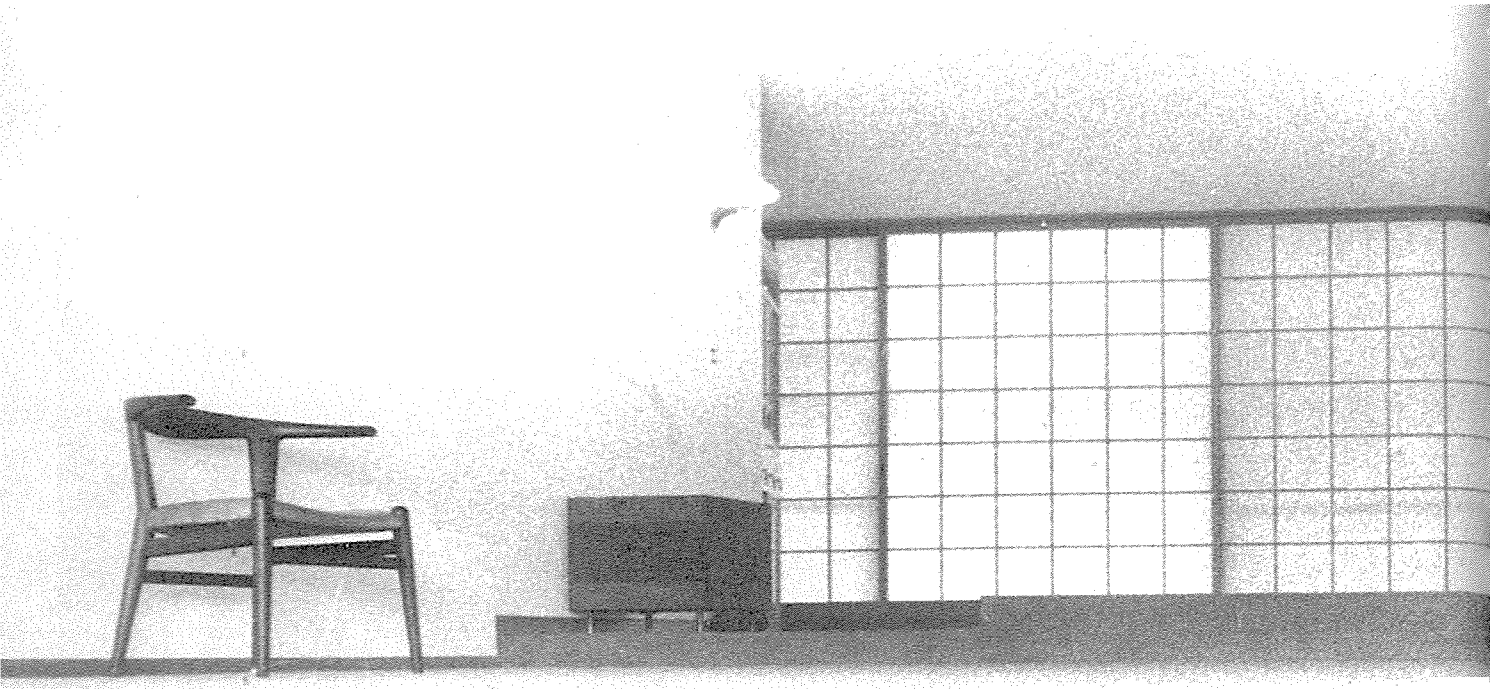
多木　そのデパートの展覧会のころ、私はまだ建築についてほとんどなにも知らなかったのですが、哲学や社会学、なによりも芸術についてはそれなりに経験をつんでいました。したがってその展覧会の作品は芸術として受け取っていたのです。それが建築としてどういう意味を持つのかは深くは考えなかったと思います。私にはそれを考えるほどの蓄積もなく、思考力もなく、そこで知覚しえたものだけから考えていました。認識していたのは、ある種の空間の感覚的な質ですね。物質でもあれば、形式でもあるなにかを感じ取っていました。思いがけないほど情感にみちたウェットな空間でした。それに私は好感を抱き、私にとっては理解しやすいものでした。いまから思い出すと、「きのこ椅子」が印象に残っています。オブジェだったから記憶しやすかったのでしょう。

私は芸術という無用なものの価値に慣れすぎていたので、機能のある建築を、自分の認識のどこに定位させればいいのか、まごまごしていました。この展覧会でも部屋の機能があるので最初は戸惑いました。

付き合いはじめてから篠原さんも、私が建築に不慣れだということはご存知でした。篠原さんも、私が建築の批評家になればいいと期待しながら、とくに人文系であることに不安を感じていたのでしょうね。知り合ってすぐの頃から、図面のトレースをしたり、模型をつくったりすればいいよ、と図面を貸してくれたりしましてね。彼は新しい批評家の登場の手助けをさかんにしてくださって、親切さには有り難い気がしましたが、そんなに手を貸してくれたのは、彼としても自分の作品をまともに扱ってくれる評論家がほしかったのでしょうね。私はまだ建築評論など書く気はなかったので、それは熱心にしなかったで



花山南の家／1968年



鈴庄さんの家／1968年

す。素材として表象を扱うことはあるとしても、心のなかでは社会科学か歴史かが、やがて自分の本領になるとは思っていました。いまはそうなっていますが、そうなってしまえば、かえって建築でも写真でも自由に書けるのです。

人間の非合理性を蘇らせる

多木　とはいえ60年代をつうじて、しだいに私は建築に興味を持ち始めますが、そのきっかけは2人の建築家を知ったことが挙げられます。

一人目が篠原一男です。展覧会の頃は、私はまだ建築と本気で取り組む気持ちはありませんでした。ここで話すべきではないでしょうが、その後の自分の思想にとって重要になる哲学的な勉強を始めていましたが、それは自分だけの問題ですからだれにも言いませんでした。雑多な仕事をしながら、本格的にはじめていました。ちょうどそのころ、篠原さんにお会いしたのです。『異端の空間』をお読みいただければ、どこかほかからやってきたことが察知される筈です、同時にゆっくりとですが、彼の建築をいくつか見るようになりました。「久我山の家その2」（1958年）、「茅ヶ崎の家」（1960年）、「狛江の家」（1960年）、「土間の家」（1963年）、このあたりの作品に興味をもちました。特に「狛江の家」の和紙の壁紙や「土間の家」の土間などに触覚的なものを感じたりしているうちに、これまでの建築家とは違うことをやろうとしている、と認識するようになって行きました。篠原一男の文章も読み、のめり込みはじめたのです。人文系の私には非常に入りやすいことが幸いしたのでしょう。篠原さんをとおしていつのまにか建築に接近していました。

二人目は磯崎新です。特に「N邸」（1964年）のような初期の作品の理論的な部分が魅力的でした。この住宅は、効果は感覚的でしたが、むしろそれを生み出す仕掛けを彼は明かしていました。私が知的な操作による建築というものに巡り会った最初の経験でした。篠原さんより私に近いと思いました。やがて大分に県立図書館ができて、その構成に非常に関心をもちました。この二人によって建築に係わりをもったというのは、かなり特異なことかもしれません。五万といる建築家のうちの二人ですから、ずいぶん狭いですね。だから建築については結局、長い間、芸術的なアプローチしかできなかったし、それが私の限界になりました。それなら芸術家について書いたほうがいいと思いました。ですから2冊あるモノグラムはどちらも芸術家（バーネット・ニューマンとアンゼルム・キーファー）です。

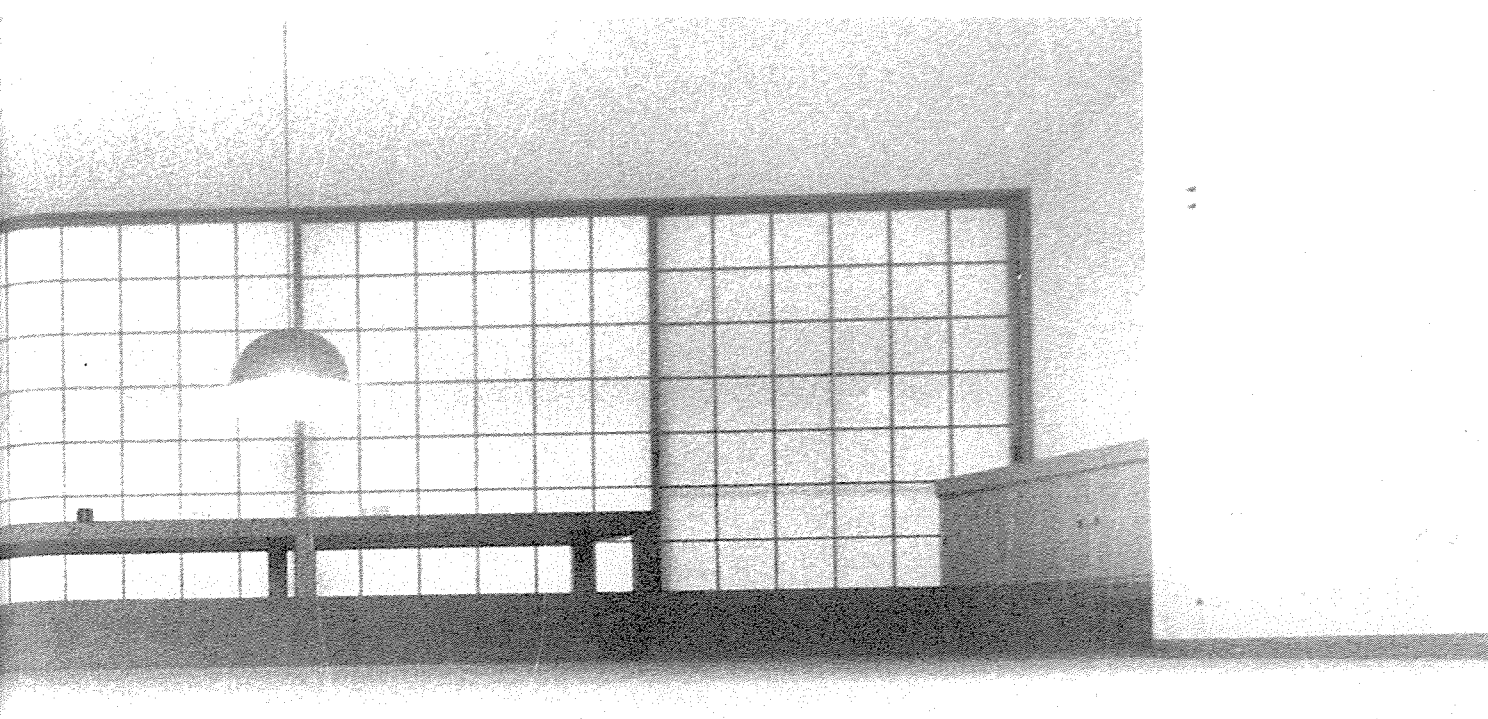
それ以前の、漠然と知識として知っていた建築家の作品は、社会的な目的を果たす機能をもつものとしての建築であり、モダンの延長でした。それに対して篠原一男の建築は、ある意味で「図々しい建築」だと思いました。衝動と直観なのです。社会なんてどうでもいい、感性からたちあがってくる空間を表現できればそれでいい、何かを感じさせるものなら作っていい、という考え方なのです。これは近代を引き受けた人々には言えなかったことでした。真の革新者でした。新しい建築、新しい空間の登場だったのです。これが私が建築に入っていくきっかけになりました。

それまでの建築が人間の合理性を基盤にしていたとすれば、篠原一男の建築は人間の非合理性を蘇らせたのです。これは本で習ってきた人間には初めての経験だったのです。私のような人文系の人間には容易に受け入れることができるものでした。だから後で述べるように、彼の作品の非合理性は精神分析のような分析をする必要があります。それまで建築というものは理解できても、なかなか折り合いをつけられないものだったのですが、あの展覧会は、建築でも自分の思考を展開できるかもしれないと思うきっかけになりました。それであの展覧会について書くことにしたのです。建築を自分の問題として、つまり美的な空間として、思考の空間として考えられるようになったのです。

近代建築に対する異端

坂本　多木さんの『新建築』の最初の論文『異端の空間＝篠原一男論』（1968年）の冒頭では、当時の合理主義に基づく象徴的造形の建築に対して、ヒューマニズムの建築として篠原一男を評価していたと記憶しています。これはとても印象的でした。

多木　ヒューマニズムといったかどうか。「異端」と言ったの



は、近代建築の「正統」に対して、ということでした。当時、この「異端」という言葉に反論した人もいました。ひょっとすると篠原さんもそうだったかもしれません。いわゆる近代建築との関係においてであるということを考慮しないと「異端」という言葉が異常に聞こえたかもしれません。その意味では篠原さんの位相を言い当てている筈でした。外在的な認識にもとづく丹下健三に対して、篠原一男の建築は内面から立ち上がったと言えると思いました。ヒューマニズムという広い言葉がいいかどうかはともかく、具体的な生を問題にし、美しいものに共感しうる人間性を問題にしたと思います。これは合理主義からは導けない領域です。「白の家」にはいったときのあの衝撃は住宅というより宗教建築にはいったときのようなものでした。まっ白い壁のまえに象徴的な一本の木柱が立っています。否応なくこの壁に正対しなければなりませんでした。ちょっとしたエピソードですが、二階に天井裏をみる小さな窓があって、そこから天井に隠れた柱の上部の構造を見せてもらったことが、のちの構成分析にいたる発端でした。

坂本　展覧会をご覧になっての作品の印象と、会った本人の印象はどうでしたか? その頃の多木さんの認識の立場を含めてお聞きしたいと思います。

多木　展覧会はさっきも言いましたが、情感に溢れながら、すみずみまで精密に押さえられていました。同時に随分大胆な人だな、と感じていましたが、会ってみるとその繊細さと大胆さは感じられました。しかしその頃の篠原さんは意外にも謙虚でした。新しいものを作っているという自負はあったが、自分の建築が先端であるのかどうかはわからない、という謙虚な態度があったと思います。後年に感じるような、威圧的な態度は微塵もなかったのです。もちろん私に対して威圧的であったことはありませんでしたが、外国人からどうして作品はいいのに人物は不愉快なんだろう、と聞かれたことはあります。ただ奇妙に思っていたのは、(これは建築家の常なのかもしれないが)雑誌に発表する時に自分について書く筆者まできめてしまうことでした。ですから必然的にオマージュになるので、私はほとんど書かなくなります。

磯崎さんはレトリカルで構造的で知的に理解できるものでした。それに口八丁手八丁のオーガナイザーでした。でも篠原一男にはたんに知的理解ではすまない、言葉にできないものを感じていました。直観するしかないものです。彼自身の言葉でもそれは語られないものでした。ともかく私には、当時「住宅は芸術である」という主張は、私なりに理解できるものでした。

先日、大橋晃朗展(「タッチストン　大橋晃朗の家具展」ギャラリー・間、2006年9月～11月)のあとで若者と話した際、いまの建築にもまだ言葉にできないものがある、というような話になりました。その時、いまの若い人もそういう言葉にならないものについて考えることがあるんだと知って、なかなか面白かった。まさにそういう言葉にならないものを、篠原一男の建築に感じたということです。

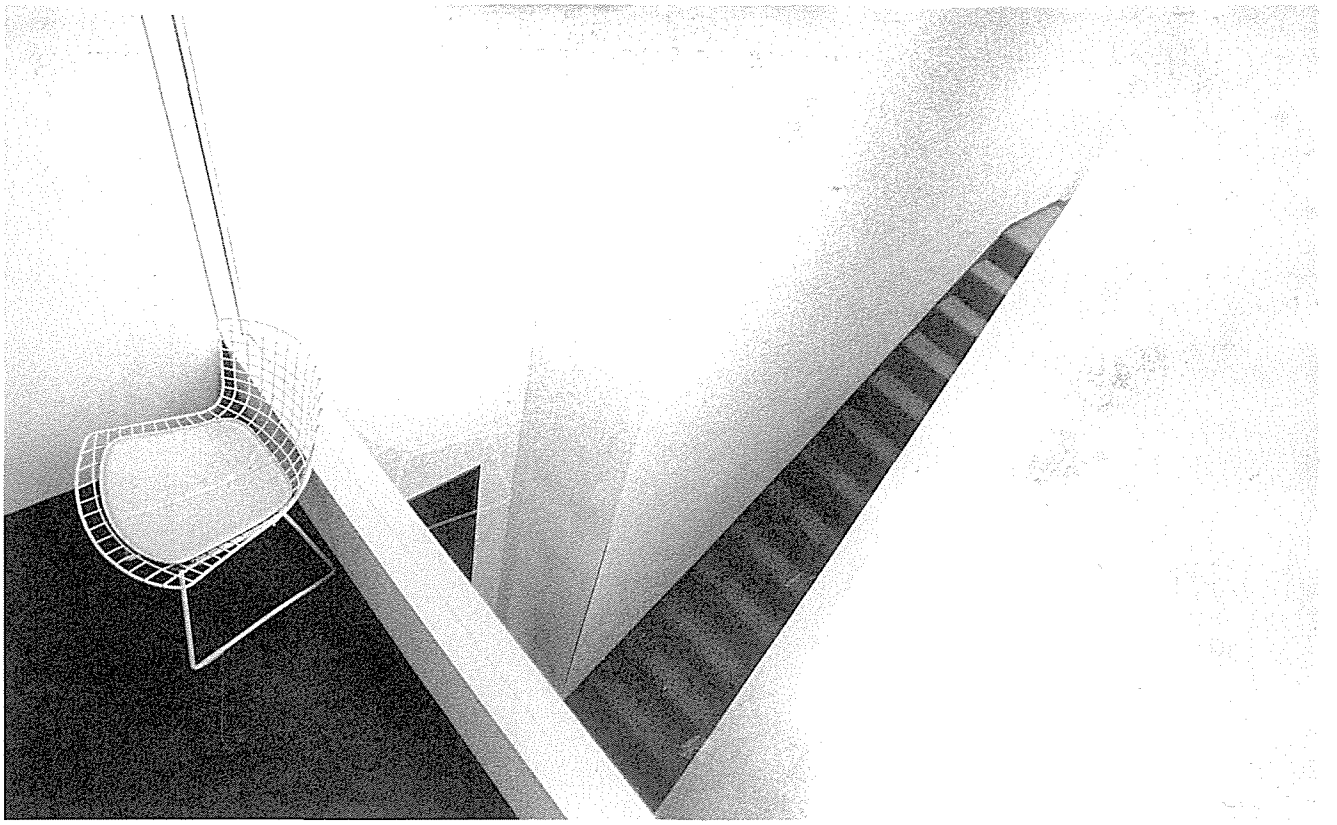
ただそうは言っても、建築は合理性ないしは論理性をもたなければならない。思考を正当化するためには手法(構成された構造)が必要です。「白の家」(1966年)でそれがはっきりわかりました。こうして芸術的直観と建築的論理とがむすびつきました。

坂本　その「白の家」に続いて、続々と傑作が生まれることになります。「山城さんの家」(1967年)、「鈴庄さんの家」(1968年)、「未完の家」(1970年)、「篠さんの家」(1970年)、「直方体の森」(1971年)、「成城の住宅」(1973年)、「谷川さんの住宅」(1974年)等の作品を経て、「上原通り住宅」(1976年)に至る期間は最もエキサイティングな時期ですね。

多木　次々と作品が展開されて充実しています。そんな時代の彼を見ていたのは非常に刺激的な経験でした。70年代の篠原さんは、創造的なエネルギーに満ちていました。

「意味的分析」から「構成分析」へ

坂本　『Perspecta』(イエール大学、1983年)の多木論文(その後『建築・夢の軌跡』に収録)では、それらの手法、レトリックについて書かれていますね。私は、多木さんは最初のうちは「意味の問題を書かれていた」と受け取っています。そうしたことは『生きられた家』で現象学的に、またその後構造



同相の谷／1971年

主義的な、そして記号論的なアプローチから『デザイン』誌や『SD』誌で、また『「もの」の詩学』でも書かれていましたね。

多木　それはもう少し分節されています。全体の印象からそれとなく語ることにくらべて、建築を読むこと、意味するものを言語化するのは厄介なことです。ひとつは「白の家」のように、直接的に感受できるものを言語にすることですが、なんらかの比喩を使っています。「白」の意味からして象徴的な読みをする以外にはありません。この比喩の使い方でいい解釈と悪い解釈という差異が生じます。だが象徴論的解読です。

もうひとつは象徴というより、まだよく分からない意味が生成する発生期のモデルをつくってみることです。これを生成的な読みと言っています。意味論にはこの両方がありますが、篠原さんがどう思って設計したかはほんとうは分からなくても、こうした建築の読みはありえます。いろいろ読みを心がけた結果、意味の生成を考えるようになっていました。じつは「意味の生成」は建築から考えたことではなく、さっき言いましたが60年代～70年代の思考、言語における象徴や比喩について考えるうちに辿り着いていたことでした。そんなときにたまたま篠原さんにも変化がありました。この差異は「白の家」と「上原通りの住宅」とをくらべるとはっきりします。前者は象徴的であり、スタティックであり、後者は意味生成論的でダイナミックになっていました。

坂本　私には意味的分析と構成分析の2つの側面で見られていたように思えるのですが。60年代中頃から70年代半ばまでは、篠原一男の建築をその哲学も含めて総合的に捉えようとしていた。その後80年代から、手法を通して構成の構造をより前面にして捉えようとした。私はその2つの側面から篠原一男を見ていたのではないかと思いますが。

多木　それは重なりあっていました。いま構成分析といわれましたが、それは象徴論とともに意味の分析の過程で出て来たものでした。むしろ現象学的な探求をしていた私にとっては、芸術的な空間か日常的な空間かという分節の方を意識していたかもしれません。

確かなもの／不確かなもの

坂本　篠原一男にとっては芸術に特化していた訳ですね。そのことが後に多木さんとの考えの違いとしてでてきたのだろうと思います。70年代以降は多木さんは篠原一男の作品についてほとんど書いていないのですが、それは篠原一男が芸術的な方向に走っていったことと関連していますか?『四人のデザイナーとの対話』(1975年）では、「確かなるもの」と「不確かなるもの」の相違が議論されていますが、関連があるような気がします。その辺りについてお聞かせください。

多木　さっきもいいましたが彼は書く人間を自分で決めていました。私には書くチャンスがありませんでした。70年代以降、篠原さんについてほとんど書いていないのは事実ですが、彼が芸術に向かったので興味を失ったのでもなんでもないのです。むしろ70年代に篠原さんが変貌し、同時にこれまで達成していた境界をこえて先に進んでいくのを、深い関心をもって眺めていました。彼自身、私が彼の70年代の変化をサポートしていることは知っていました。病気になられて入院される前夜に、そのことを感謝しているという電話をもらいました。

その時期は建築以外のことを書いていましたし、私は建築のジャーナリズムは苦手で、こちらから積極的なアプローチはあまりしなかったのです。書いていないというのは、ただそれだけのことです。

しかしなぜか篠原さんから写真を頼まれるのです。ところが60年代末のprovokeなど写真についてのいろいろな活動の苦い結果、私は70年代に入るころには、もう写真は撮らない、写真をみること、それについて書くことに止めようと決めて

いたので頼まれることが苦痛でした。結局、断りきれないまま「谷川さんの住宅」、「上原通りの住宅」まで撮っています。写真を撮るか、撮らないかは、私自身の問題ですが、その辺は思いやりはなかったですね。なぜ写真をとらせようとしたのか、今もって分かりません。彼には写真が分かりませんでしたからね。

それから確かなもの、不確かなものということを問題にしたのは、あの対談よりもう少し前のことだったんです。その点に関する篠原さんと私のあいだに決定的な意見の違いがあったのです。私はこの世には確かなものなど存在しないと考えていました。むしろ「確からしい」ことを「確か」だと考えてしまうことに反対でしたが、これは言語論や現象学の問題でもあったのです。じつは1970年に『まずたしからしさの世界をすてよ』という本を何人かと共同で出していましたが、篠原さんはそんな本はご存じないでしょうし、それを私のペシミズムだと捉えていました。見当違いでした、篠原さんは「確かなもの」があるという立場でした。これはものを作る人と、言葉だけの人間との違いかどうか、あまりはっきりしていません。彼は自分の建築＝芸術という思想が確かなものだと考えていたのでしょうし、私は人間の根拠のような問題でしたから、意見の違いを追求しようとはしませんでした。それは視点が違っているので論争にはなりませんでした。ただ私はペシミズムとは思っていなかったのです。現象学は確からしく見えるものをとりあえず判断しないで置いておく訳です。確実な根拠などないところでわれわれの思想は築かれる、と思っていました。ようするに今から振り返ってみると、篠原さんと私のあいだは、コミュニケーションが非常に不完全だったのですね。

坂本　たとえば「上原通りの住宅」は最高傑作だと私は思いますが、そのことは確かな世界を認識している結果だとは思えません。面白いけれどよく分からない。なかなかうまく説明できないところもあって、多木さんに質問したいところです。

多木　私も「上原通りの住宅」は一番いいと思います。しかしそれは完結した良さではないのです。さっきからの言葉でいうと、意味生成的な面白さです。構成的には、1階から2階への柱を床で切るところ、キャンチレバー、ボールトと矩形の対比に特徴がありますね。これらによって限定された意味ではなく、意味が無限に増殖し派生してくる世界がつくられています。「上原通りの住宅」はいろいろな理解の方法があるでしょうが、私はさっき言った意味の生成と関連した理解をしています。70年代に入ると芸術も含めて思想的なゲームが自分のなかで著しく変わっていった結果、象徴論的な読みから、生成論的な読みに変わっていったのです。これはある程度、私の知的自伝『雑学者の夢』に書いてあります。ですから篠原さんが芸術に向かうこととは関係ありません。もともと芸術だったのですから。

『四人のデザイナーとの対話』の最後で、私はドゥルーズの「機械」という言葉を出しました。このとき、篠原一男は初めて「機械」という概念に触れたんです。そんなことは言いませんがね。機械、マシーンというのは意味を生産する装置です。それはドライな仕組みです。でもその言葉に飛びついたことは、彼のなかでさまざまな要素の関係の中で意味が生産されていく。これが「上原通りの住宅」の「野生の機械」という用語の発端でした。実際に篠原さんがなにを考えていたのか、よくは分かりませんが、私の理解ではそうなります。

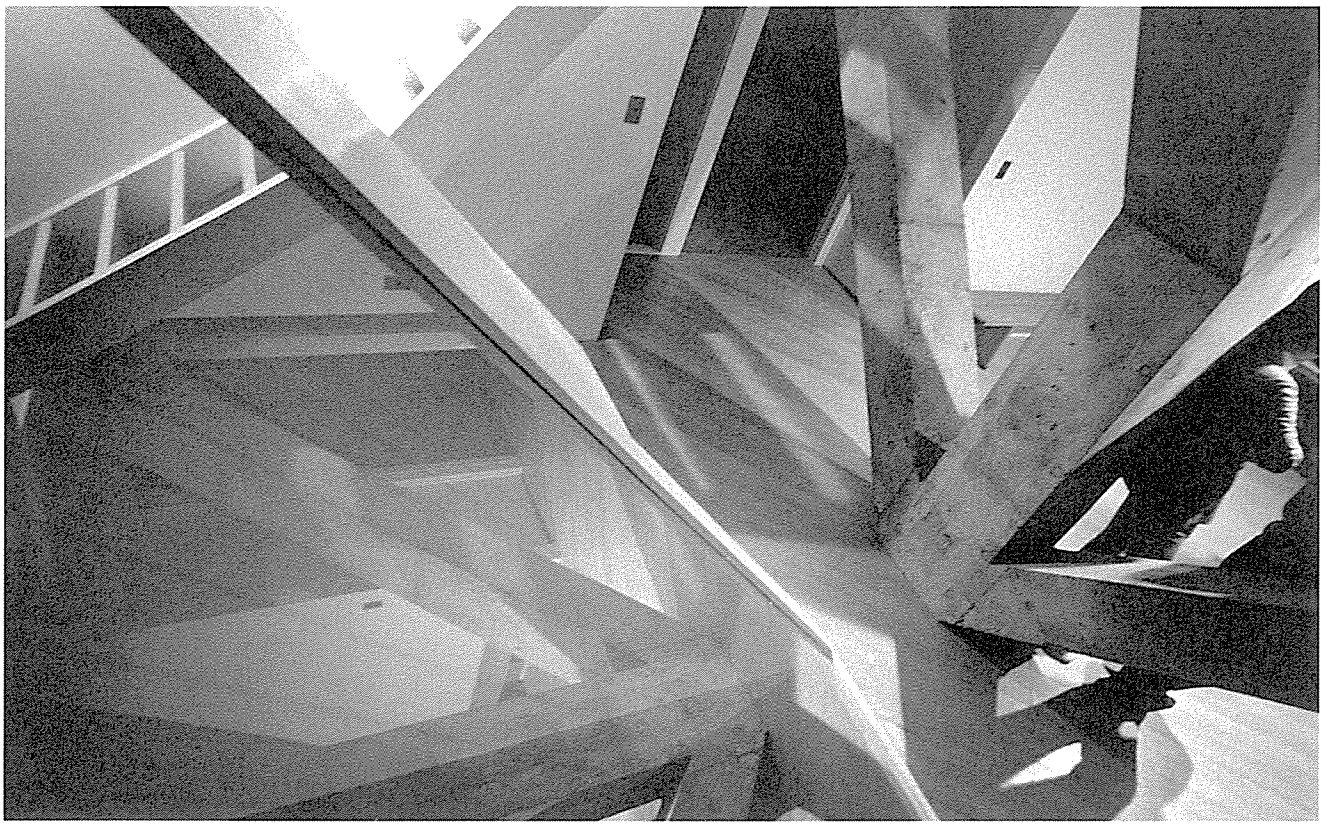
フォルマリズムの変遷

坂本　それでは「上原通りの住宅」以降に話題を移したいと思います。「ハウス イン ヨコハマ」(1985年)、「東京工業大学百年記念館」(1987年)までの作品は「上原通りの住宅」の延長のように思えます。「東京工業大学百年記念館」はそのなかで最高のもの、「ハウス イン ヨコハマ」では純粋な幾何学のフォルマリズムの極致に達したと言えるのではないでしょうか。フォルマリズムと言うと一般的には生命力のない怠惰な印象を与えますが、この2つは力強い。単なるフォルマリズムではなく生き生きとしている、と思えるものがあります。

多木　おっしゃる通りですね。篠原さんのフォルマリズムについては、まさしく生命的な力を生み出すことが特徴でした。これはずっと初期のころに遡っておく必要があります。「花山南の家」(1968年)に写真を撮りに行った際、夜、二人でおしゃべりをしたんですが、彼は「人間のもつべき精神の形式化が建築の役割だ」と言っていました。なにしろ随分前のことなので、これは言葉使いから言ってひょっとすると、私の言葉だったかもしれません。とにかくそれはお互いにフォルマリズムの理解には到達しました。見えていない精神に形を与え、形式化するのが建築である、と。これは少なくとも篠原さんの場合のフォルマリズムの本質です。私の当時のフォルマリズム理解でもありました。

そういう意味では「東京工業大学百年記念館」は「上原通りの住宅」のフォルマリズムの延長上にあると思います。それは異質な形がぶつかり合うという意味においてです。ただスケールが大きくなりましたからそれだけダイナミックになりました。「ハウス イン ヨコハマ」のフォルマリズムは、純粋な幾何学を直接感じさせるものでした。ここまで想像力のなかで使われると、幾何学は美しいものです。これらはさすが、と思いました。

その後の作品はあまり興味がもてませんでした。なにかもうひとつ意味が掴めなかったのです。なんのためなのか、よく分かりませんでした。「ハネギ・コンプレックス」(1988年)、「花山の病院」(1988年)、「K2ビルディング」(1990年)、「熊本北警察署」(1990年)等を見ていると、それまでの方法が次第にマニエリスティックに反復されていく過程にあったと思います。「ユーラリール・ホテル 計画」(1990-92年)も「横浜



上原通りの住宅／1976年

国際客船ターミナル 設計競技案」（1995年）も幾何学のマニエリスムだと思います。

こうして眺めてくると、結局、70年代が黄金時代でした。それは創造力が次々と発展的に発揮されるという意味においてです。この時代の意味生成を書くには，坂本さんが構成的な分析といわれた『Perspecta』の論文での方法になっていくのです。あの論文では、「白の家」から「上原通りの住宅」までを、分析してみましたら、本当にひとつずつ、展開させられて、最後には（さっきからの言葉を使えば）象徴論的から生成論的という，全体の秩序の反転にまでたどり着くのですね。これはどうして私自身の変貌と重なるのか、驚きであると同時に、よく続いたものだな、と思いました。ちょっと余談になりますが、ある段階から次の段階へと進む際に、非常に慎重でした、これはやってもいいが、あれはもう少し待とうなどというのを聞いています。

篠原一男が考えたこと／考えなかったこと

坂本　ここまで時系列に沿って話していただきました。総括的に話を伺いたいと思います。いままでのお話と重なるかもしれませんが、結局、篠原一男の世界観はどういうものだったとお考えですか?

多木　ひとことで言うと、篠原さんは、世界を変えようとは思っていなかったでしょう。そうではなくて建築を変えようと思っていました。その結果、建築を観るものの精神を変えようとしていたのでしょう。社会や都市に対して建築が何かできるという幻想は一切ありませんでした。社会や都市についてはイメージをもっていました。

混沌とした世界のエネルギーは、不思議なことに早くから感じ取っていました。思い出しますが、若い時、高いビルの喫茶店から、なんとも醜い都市を見ながら、それをやがて建築家たちが賞賛する日がきてもおかしくないという話を交わしました。そんな力、あるいはエネルギーを感じ取って、それをある時期以降、隠喩として捉え「野生」というわけです。その力を建築に投影しました。「上原通りの住宅」が典型的でした。

私がもっとも驚くのは、彼の「直観」なのです。決して分析的ではなく、社会も都市も「直観」によって受けとめられていました。「白の家」で、思わず息をのんだのは、彼の「直観」の見いだした世界を感じとったからです。私のような人文学と社会学のあいだにいるものは、もちろん自分の直観も信じますがそれ以上に人間を超えた力をなんとか分析しようと思います。どんな事象についても具体性と同時にそういう思想的野心なしにはなかったのです。篠原さんはそうではなかったですね。ですから極論すれば、社会や世界にとっての建築を目指していたのではなく、作品至上主義だったといえるのです。

坂本　都市や街並に対する関心ではなく、人間が持つべき精神のあり方に関わったということですね。集団に対する興味を持たなかった。

多木　ええ、まったくなかったですね。たださっきも言いましたが、集団の力については直観していました。『生きられた家』は日常性を扱っています。篠原一男にとっては「日常性」というのは凡庸なやからのものであって、建築にとって価値は無いと言って、私を批判しました。だが「日常性」は存在の鍵です。建築はそんな野蛮なことはしませんが、人間から日常性を剥ぎ取ると、存在は崩壊します。哲学は凡庸なやからを分析するものです。

しかしそうは言っても、「この建築はいいな」と思うとき、いまでも私のなかに「精神に形を与える建築」という感覚は生き続けているんです。それは建築という形式の言語でないと語れない意味を感じ取らせることと同義です。言葉では言い表せない空間の質があって、建築がこれからも生き続けるならそこ

しかないというところです。建築を使わないと実現できない精神があるということです。それと同時に精神的な意味は建築では見えにくくなります。それを読み取るのが，私の仕事になるのです。

坂本　その後、篠原一男の言説にはアフォリズム的な言葉がどんどん増えてきます。建築の言葉で説明できない部分ですね。

多木　もうひとつ重要なことがあります。それは無意識の欲動です。私は結局やっていないのですが、いつかやらねばと思っているのが、篠原一男の作品の精神分析です。『Perspecta』の文章は形式論に徹していますが、無意識の欲動を前提にしています。ただそれも見えやすいもの、つまりこれらの建築には内的な対立によって力が生じているのです。そこまでは容易ですが、その先は無理です。それは芸術論的な言説でならば、「白の家」は精神的、宗教的であるけれど、同時にエロス的、性的と言ってもいい官能性が漂っている、といえば済むでしょう。性的なエネルギーと聖なる精神を統合して芸術になる。それに形を与え、形式化することで建築になるということですが、いまはそれに対しては不十分です。

坂本　エロス、性的なものは、「日本浮世絵博物館」（1982年）の家具や、「東京工業大学百年記念館」や「ハウス イン ヨコハマ」などには直接的にあらわれていますね。

多木　何か得体の知らないものに形を与え、それを建築にするには合理性が必要で、そのために手法やレトリックがでてきた。この関係をみるのが重要だと思います。

坂本　その合理性とは幾何学のことですか?

多木　そうです。「白の家」にはプラトン的な幾何学があり、「上原通りの住宅」にはプラトニックな幾何学からの距離がある。その両方が続いているのです。

変化する社会のなかで、表象できないものを表象できるものにするのが芸術であり、建築である。思考できないものを思考にしていく、作る瞬間には「永遠性」といっていいようなものを目指す。これをできたのは篠原一男ぐらいではないでしょうか。小さな個人がつくる完璧な不変性です。

坂本　最後に、我々はどのように篠原一男の建築を見て、これからどう考えていくべきとお考えですか?

多木　篠原一男の建築と人間の精神の関係を見極め、それを歴史の現在における人間の世界と照合させてみることです。彼は社会や都市はまともには考えなかったのですが、彼ほど精神と形式についてシビアに考えた建築家はいなかったということです。そこからいきいきした解放された生命が溢れ出るような読み方をしてみることです。じつは精神分析というのもこのような方法です。さらに重要なのは、彼が考え得なかった世界も問うてみることです。われわれはみな、意識的に生きているつもりですが、ほんとうは考え得ないなにかによって、形成されているかもしれません。私もある時期から、篠原さんが考え得なかったのはなにかを考えてきました。その答えはこれからですが、私はそれを歴史の現在という言葉であらわしてきましたが、それは究極的に私たちを動かしている歴史的社会の力を発見することです。そのような分析をしてみる価値は充分あります。60～70年ころに彼を動かしていたものです。それは当時、社会だの都市だのを問題にしていた人びとよりも、ずっと深い歴史かもしれません。

篠原一男先生は、平成18年7月15日にご逝去されました（享年81歳）。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

The independent scholar and critic, Koji Taki, is interviewed by Professor Kazunari Sakamoto of Titech, both men close friends and associates of the late Kazuo Shinohara. Rather than a simple homage, they talk about the nature of Shinohara's oeuvre and his personality. Taki recalls that had he not met KS, he would never have come to consider architecture in such depth in his own thought and writing. Their first meeting took place as a result of an exhibition "Two Houses Built in a Department Store" (sponsored by *Asahi Shinbun* at Odakyu Department Store) in 1964. In his text "Glass and Architecture" Taki wrote about both Shinohara's participation in the show and his *Jutaku-kenchiku* published in the same year. Taki perceived the book as self-exploratory from beginning to end, an authorial text devoted to Shinohara himself.

"What interested me was the assertion of a so-to-speak psychopathological space. I, in turn, wondered if the man had any dark mental problems, or whether this was a mere gesture, but afterwards I started to think that it would be interesting to perform a mental analysis of his works, *not* his personality. What he sought in the exhibition was to transpose the privacy of a house, unique domain of the client, into a more public realm. I felt his unique insistence on the universality of houses, even a very small dwelling. In other words, he insisted on the house as an entirely independent expression of beauty. That was a bracing impression, reinforcing that of his recent book on residential architecture.

"Since was no architect, I tried to find what [KS] had not found out for himself. In the process I discovered the meaning of architecture, in general, through Shinohara' s work. His houses gave me the necessary hints to think about architecture for a very long time afterwards.

"You mentioned "*Ikirareta Ie*", one of my more influential books, but it was not a work of architectural theory. You might imagine it as being related to architecture, but basically it was a phenomenological analysis concerning the world in which we ourselves live. The initial impetus had been a certain photograph taken by Kishin Shinoyama, but my real motivation was Martin Heidegger's "*Bauen, Wohnen, Denken*", which I first read in the late 60s. So I discussed language, the body, symbolic cosmology and consumer society. Shinohara strongly criticized it, but that was natural since he was a practicing architect. I discussed issues that had evolved out of his interests, but he did not understand that fundamental gap. Or rather, he must have thought that the sort of architectural critic he wished for would scarcely write a book of that kind.

"I did not know much about architecture when I first saw the exhibition but thought a good deal about philosophy, sociology, and especially art. So I inevitably regarded the works in that exhibition as 'art' that manifested a certain sensuous, spatial quality. I was able to discover something both physical and formal… an unexpectedly mental, raw space…. Shinohara gave me lots of advice, suggesting that I trace drawings, or build models. He probably wanted to make me into be a critic who could discuss his works fairly. But I had no wish for this, so I did not take this advice. I was looking forward instead to pursuing a career in the social sciences or history.

"While conventional architecture at that time was based on rational principles, I would say that Shinohara's revival of irrationality, the initial experience I retained of his work, was easy to accept for a person like me accustomed to books and literature. That was the reason I wrote my exhibition text. From that time onward, I was able to start to think about architecture in my own terms, as a space of beauty, above all as a space of thought.

"[KS] hardly thought deeply about society or the city as such, but no other architect thought about human spirit and form more seriously than he…. Moreover, when I started to think about what Shinohara could not think, I did not, and have still not yet found the answer, but I have been trying to express it as a certain 'presence of history'. That is, [KS] dwelt upon the historical momentum of society forcing us to the critical level…. That was the extraordinary power of Shinohara in the 1960s and 70s [from his *House in White* to *House in Uehara*]. Such is necessarily a deeper story than that of people who were merely struggling to adjust to [postwar] society and the new city at that time."

篠原さんの思い出
Memories of Mr. Shinohara

平井 聖［名誉教授、1952年卒］
Kiyoshi HIRAI (Emeritus Professor and Col. Eng. '52)


1960年卒業アルバムの清家先生との写真（提供：平井聖）

教授が定年退官したとき、記念事業が計画されるのが常ですが、その代表は計画系ならその中で一番年上の後輩が勤めるのが慣わしでした。篠原さんのときは、私がその役を務めました。篠原さんは1953年の卒業ですから、私のほうが1年先輩に当たります。そのため、退官後に篠原さんに会うと、先輩に記念事業の代表をやってもらったのは、後にも先にも私だけ、とよく言っていました。篠原さんの学年は旧制度最後でしたので、人数が多く年齢も多様でした。私より年下は2人だけ。ほとんどが年上で、篠原さんもその一人でした。

卒業して助手として残った篠原さんとは、1年違いということもあって、大学内で親しくしてきました。しかし、篠原さんは基礎教育系の図学の所属で、建築の学生の卒業研究は受け持っていましたが、建築学科で講義をすることはありませんでしたから、建築学科の先生方や学生との付き合いはほとんどありませんでした。図学なら毎年決められたとおり説明し、演習をさせればいい。その他の時間は全て設計に使えるということで、建築学科に戻ってくるように勧めても全く動こうとしませんでした。それが、清家先生定年後改めて頼んだとき、二つ返事で戻ってくれたのです。設計製図の基本的な組み立てや、いくつもの講義に正面から取り組まないだろう、まして面倒な学科事務など引き受けないだろうという周囲の予想を裏切り、研究室からは優秀な卒業生を輩出し、学科主任まで引き受けたことはご存知の通りです。建築に戻りたくないといっていたのに、どうしてそんなに変わったのか尋ねたことがあります。10年も20年もやるのなら無理だけれど、数年ということなら息切れしないでやれるだろうと思ったという答えでした。

谷口先生、清家先生と設計の先生方は、代々学内に作品を残されました。篠原さんにもと考えて、100年記念事業の際に記念館の設計を頼みました。根回しはすべて建設委員長の私が引き受け、設計に専念してもらいました。場所の選定をはじめ、設計を蔵前工業会の募金会、大学の施設部、文部省の施設関係部局などに説明する席などに出てもらうと衝突しかねなかったからです。

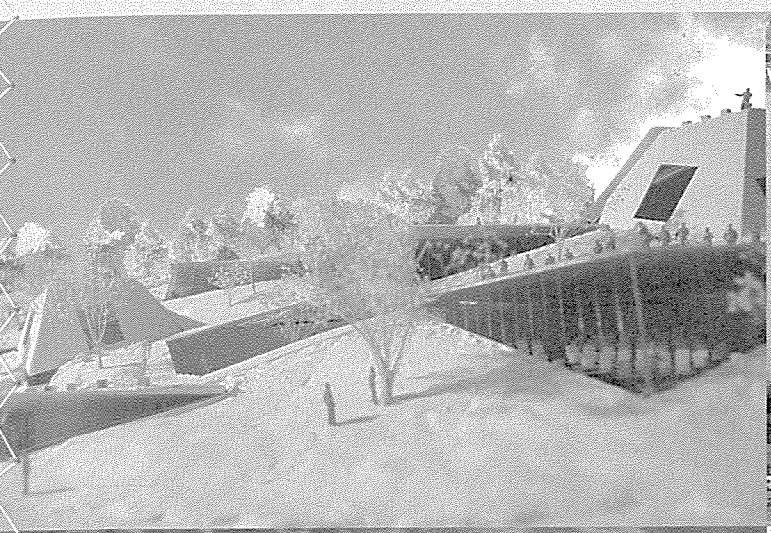
設計を頼んだとき、私から篠原さんに注文したのは、大学に寄付するとメンテナンスの費用がほとんど無いので、錆びたり腐食したりしてもペンキの塗り替えも、部材の取替えも出来ないから、素材のまま使いペンキなどを塗らないこと、電球が切れたままというのはみっともないので、電気器具はすべて電球に手が届くところに付け、脚立など何の道具も必要としないことの2つでした。南側の大扉を白くしたいということでここだけペンキ塗りになりましたが、そのほかは全て注文どおりになっています。しかし、本当はもっと色が付けたかったのかもしれません。色があったほうがいいのではと当時の工学部長から注文があったとき、翌朝にはアルミ板の壁面をピンクや紫にした模型が出来ていました。その色にびっくりした工学部長が注文を取り下げましたので、事なきを得ました。

文部省からは、デザインにクレームがつきました。周囲の環境にマッチしない、周囲を入れた透視図をもってこいということでした。どうしても描いてくれませんので、私が鳥瞰のアイソメ図を描きました。施設部長がその図をもって文部省内を説得して回ったということでした。その文部省も、竣工式での高等教育局長の祝辞では、科学技術の殿堂に相応しいデザインという評価になっていました。幸いに、施設部長が大変好意的でした。施設部から顔合わせに設計側と懇親会を開こうと申し入れがあったときのことです。飲み会の提案に篠原さんはワインパーティと応じたのでお流れになり、構造を担当してくださっていた木村俊彦先生が見かねてバーベキューパーティを開いてくださり、救われました。そのほかにも木村先生にはお世話になっています。国所有の敷地内に建てる寄付建物ということですから区には設計通知ですむはずだったのですが、設計者が篠原さんでは受け付けてくれないというのです。これを聞いて木村先生が届けの上での設計者をかって出てくださいました。その結果、設計通知はことなく受け付けられたのです。したがって、百年記念館の公式の設計者は「木村俊彦」です。

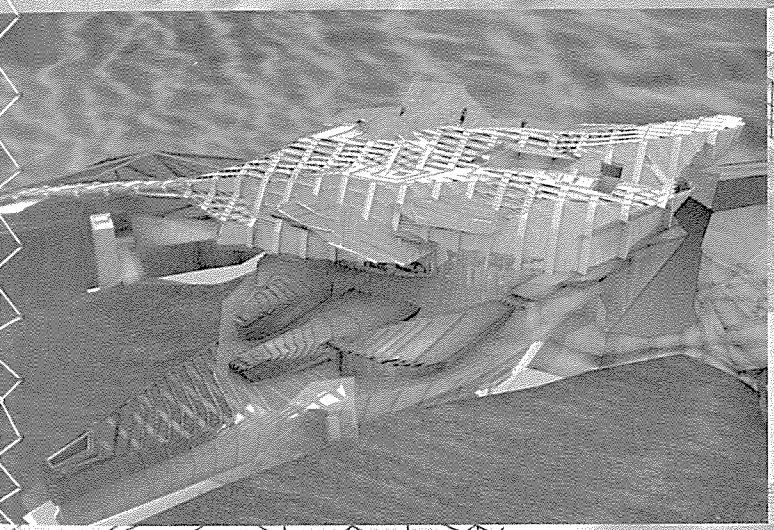
百年記念館が無かったなら、熊本の北警察署もその後のいくつもの作品も無かったのではないかと思うと、走り回った甲斐があったと思います。途中はらはらしたのはしょっちゅうでしたが、苦労したという印象は全くありません。篠原さんとはそういう関係だったのだと思います。最後の頃、一度ゆっくり話がしたいねと言われていたのですが、私が忙しくて果たせませんでした。どんな話がしたかったのか、心残りです。

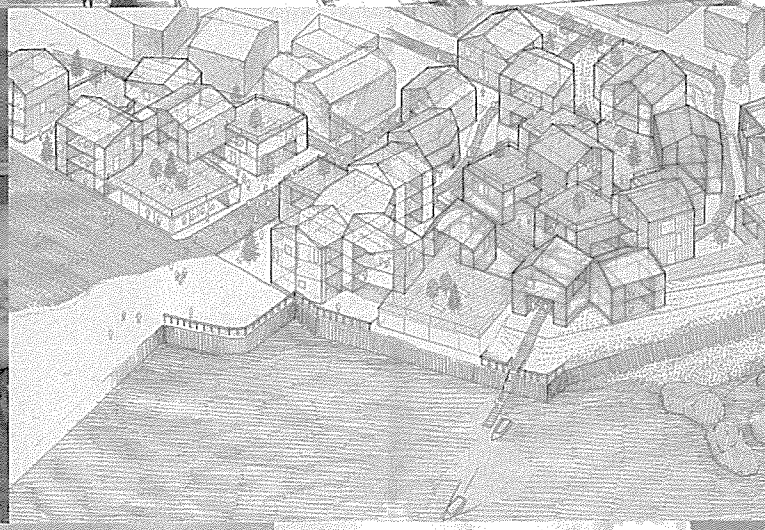
2006年度 卒業設計・修士制作

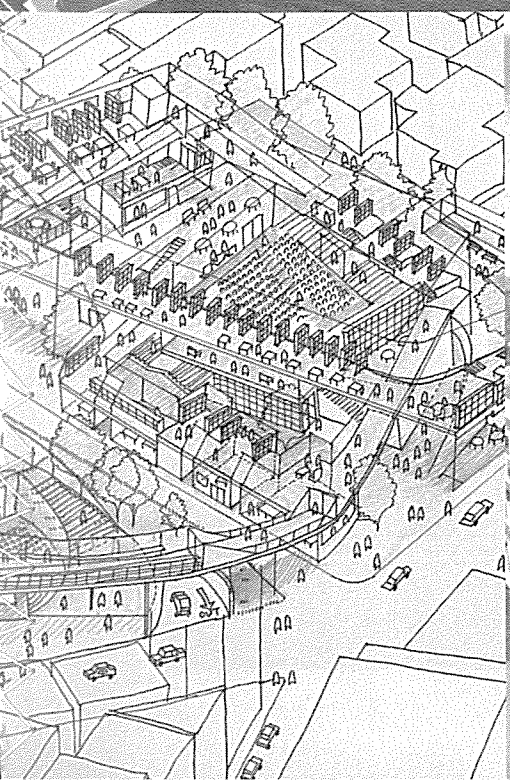
Undergraduate Diploma and Master's Design Project 2006

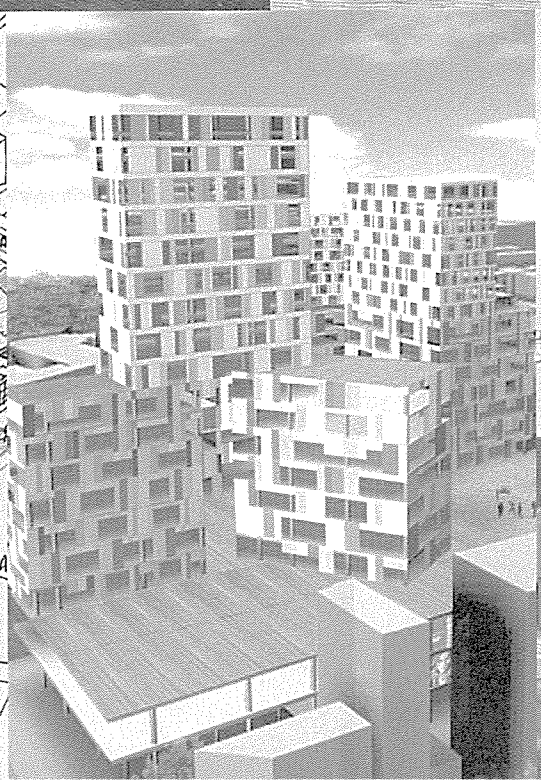














2006年度卒業設計 大岡山建築賞・銀賞
O-okayama Architectural Prize (Silver)
Diploma Project 2006

道に入り込む所作
act into the path

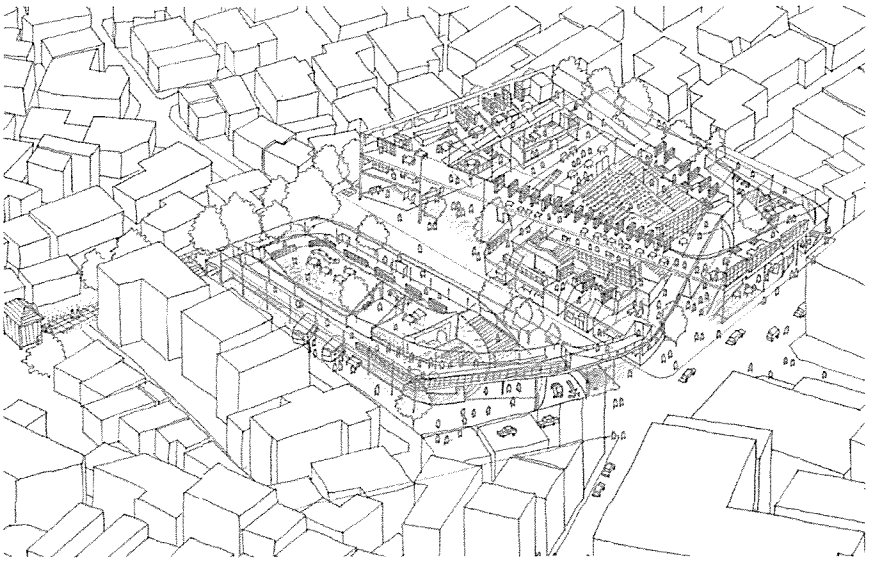
五十嵐麻美
Asami IGARASHI



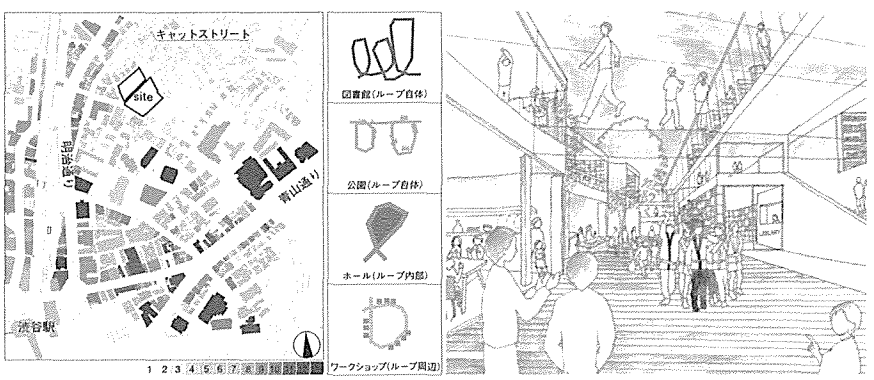
渋谷駅と表参道の中間に、新たに図書館などの4種の文化施設を導入し、周辺の道を延長した4種のループを立体的に絡み合わせることで、様々な隣接関係を作る。施設の内外や、大小様々な規模のものを施設間の主従関係を作ることなく1つの施設として共存させる。敷地は道の集合となり、人々の所作は道やその周りに展開する。ここでの活動は敷地を越え、周辺とつながり、街へ広がっていく。

藤岡　タイトルの意図はなんですか?
五十嵐　隣り合うプログラムのいろいろな所作が、道に重なり入り込んで、活発な道となるという意味でつけました。
奥山　周りとの関係がテーマならそれを形や空間に反映させた、もっと積極的な対応があってもよかったのでは。
五十嵐　商業地から住宅地の方向にループをつくり、敷地全体を巡ることができるようにしたり、公園など、住宅地から連続するものを取り入れて、住宅地側が裏にならないようにしました。

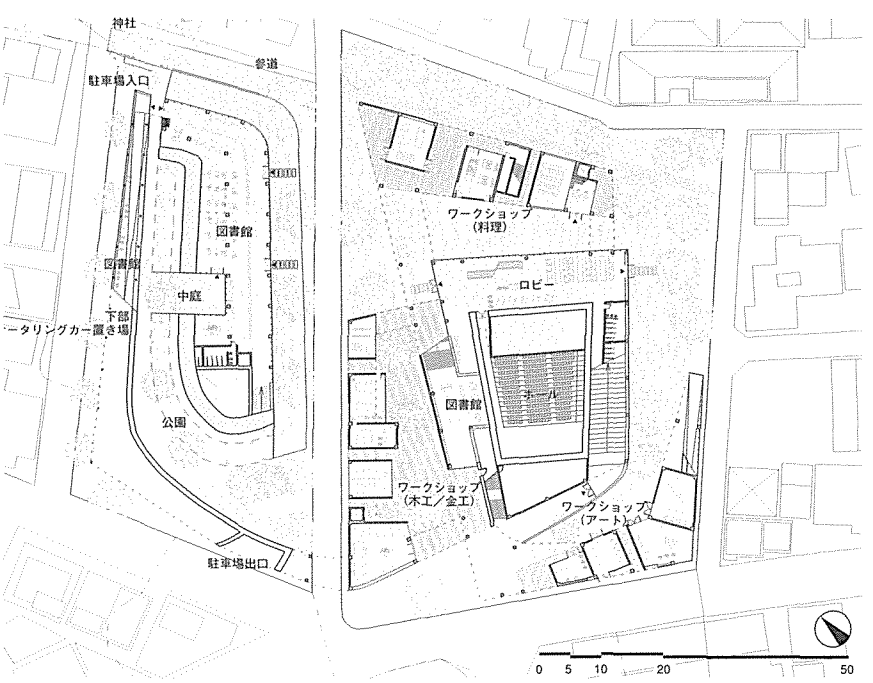
この作品は、「2006年度卒業設計合同公開講評会 東工大×藝大×東大」にて槇賞を受賞した。



アイソメトリック



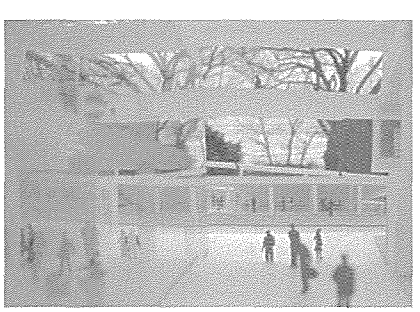
配置図　ダイアグラム　ワークショップ内パース



一階平面図



模型写真1

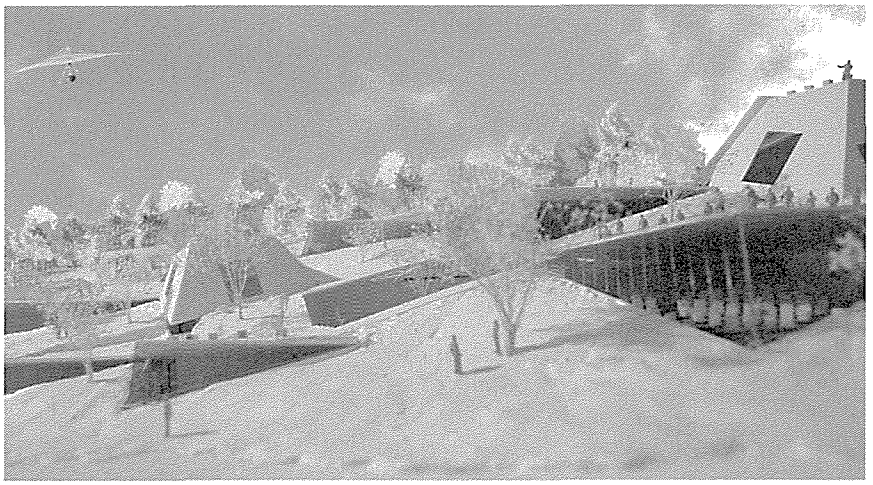


模型写真2

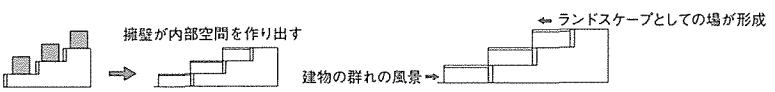
2006年度卒業設計 大岡山建築賞・銀賞
O-okayama Architectural Prize (Silver)
Diploma Project 2006

斜面にちらばる小さな地面

small grounds
spread on the slope

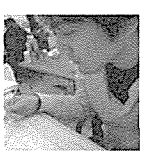


敷地の下側から全体を見上げる



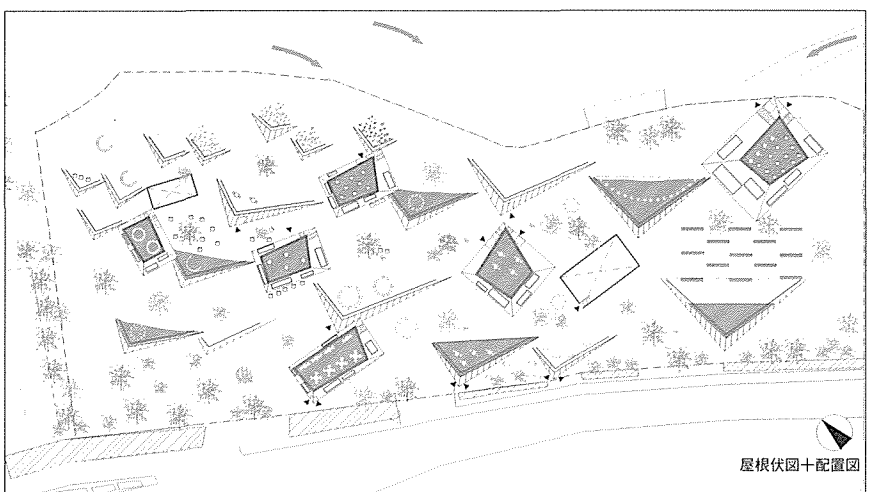
ダイアグラム

小滝健司
Takeshi ODAKI

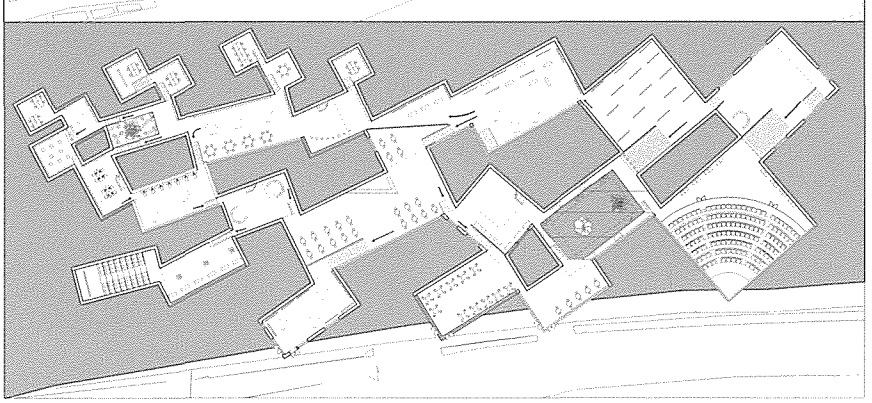


内部空間によってランドスケープが定義される建築を目指す。現在傾斜地にみられるのは、擁壁による、連続性を欠いた風景である。しかし、本来傾斜を伴った場所は魅力的である。傾斜は、広がりのある眺望や地面が傾いているなど平地ではみられない様なアクティビティを誘発するポテンシャルをもっている。そこに斜面を残したままの空間、風景を創出した。

八木　外部空間が斜面方向に繋がっていないように見えるのですが?
小滝　斜面を斜めに動けば全体が連続するようにできています。
奥山　空間のイメージは分かるが、建築の管理を成立させるプランニングの工夫が必要なのではないか。
塚本　斜面に取り組むのはいいとして、その難しさは何か、挑戦は何かは、施設の内容によってもかわるわけで、そうした具体性を前提にしないと意味がつくれない。実際の工事を考えると不自然。
安田　ランドスケープとしては面白いが一見単調に見える。掘るだけではなく掘った土を盛っても良かったのでは。
青木　このプランだと火災のときに登り釜状態になってしまう。



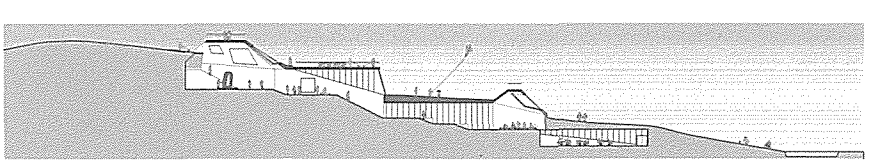
屋根伏図+配置図



全体平面図



数珠つなぎ状に次々と展開していく内部空間



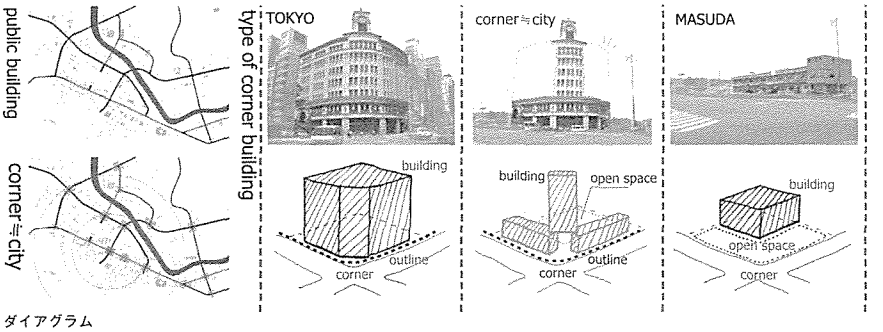
断面図

2006年度卒業設計 大岡山建築賞・銀賞
O-okayama Architectural Prize (Silver)
Diploma Project 2006

corner≒city

佐々木 啓
Kei SASAKI





ダイアグラム

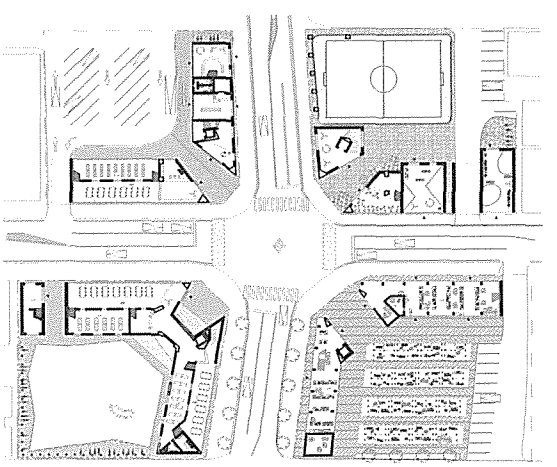


パース　交差点を見上げる

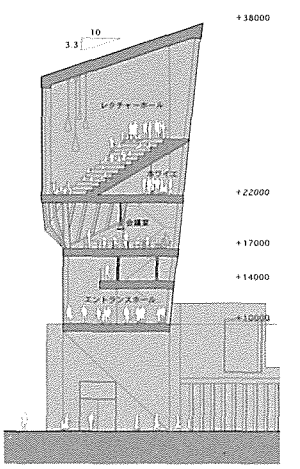
建築が建つことで直接的に出来上がる交差点という都市空間は、建築と都市が最も密接であつい関係をもつ場所である。そこに街の施設を集中させ、地方都市に局所的に都市的な場面をつくることを考えた。角のタワーと裏の広場という配置のルールを共有した建築群が交差点ごとに反復していくことで、建築の配置のルールがひとつの都市像を結んでいく。

藤岡　小都市でタワーが建つことの意義はなんですか。
八木　交差点に面したコーナーをもっと開けた方が良かったのでは。人のいるスペースが分断されてしまっている。
佐々木　交差点の中心に、タワーをもつ建物に囲まれた、都市的な風景を作ろうとしています。
安田　交差点の方向性が消えている。高さを変えるなど地形や方位を読んだようなタワーの作り方があったのでは。
青木　地方都市ではこの床面積は埋まらない。高さをうまく展開するためにプログラムを考える必要がある。
藤井晴　交差点ごとに街中のどこにいるかわかる仕組みがあると良い。

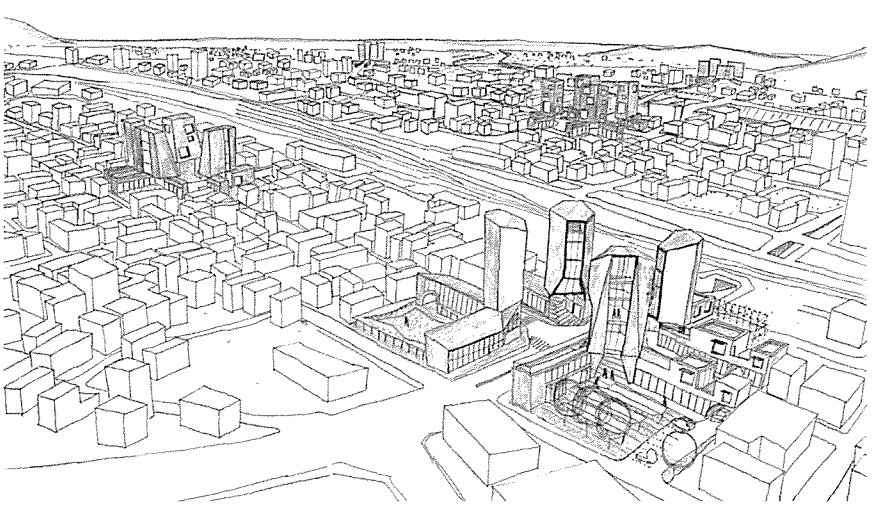
この作品は、「2006年度卒業設計合同公開講評会 東工大×藝大×東大」にて員島賞を受賞した。



1階平面図



タワー断面図



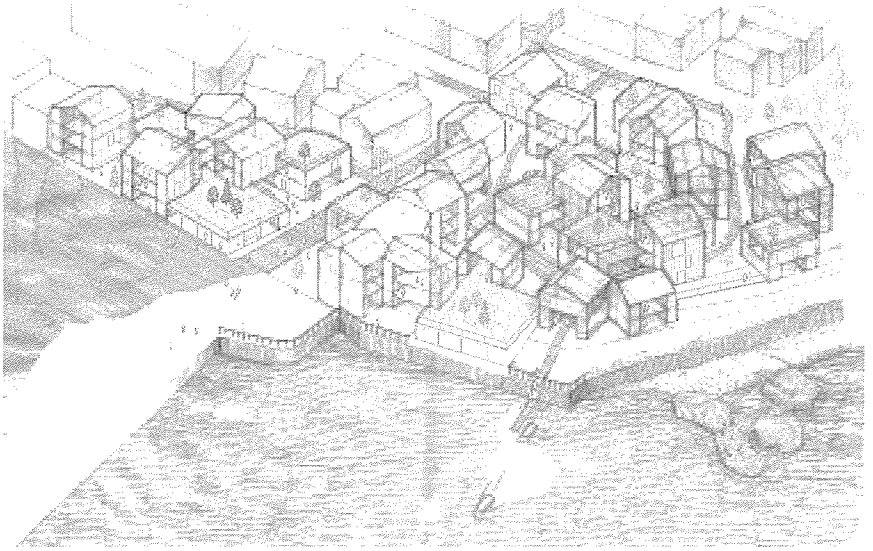
パース　街全体を眺める

2006年度卒業設計 大岡山建築賞・銀賞
O-okayama Architectural Prize (Silver)
Diploma Project 2006

いえの島
Houses In Enoshima

宮下淳平
Junpei MIYASHITA





全体を見下ろす／海に面したなだらかな斜面に建つ　真ん中には参道



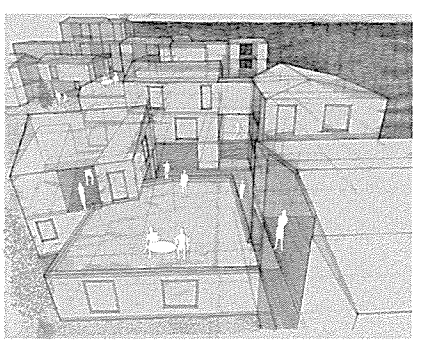
弁天橋より見る

神奈川県藤沢市の名所、江の島。ここには海や山、緑がある。この土地には、環境を生かし、外に開いた生活ができる建築を考えるべきではないか。そこで、小さいヴォリュームの住戸や、土産物屋や食堂といった店舗、宿泊施設が集まった島の新しい風景をつくる。ユニット1つは小さくて開放的なもので、隣り合うユニットどうしの距離や視線の関係を調整しながら配置し、それぞれが手をつなぐように集合して1つの建築がつくられる。自分の家の壁が延びていき、隣の家になり、店になり、まち全体をかたちづくる。

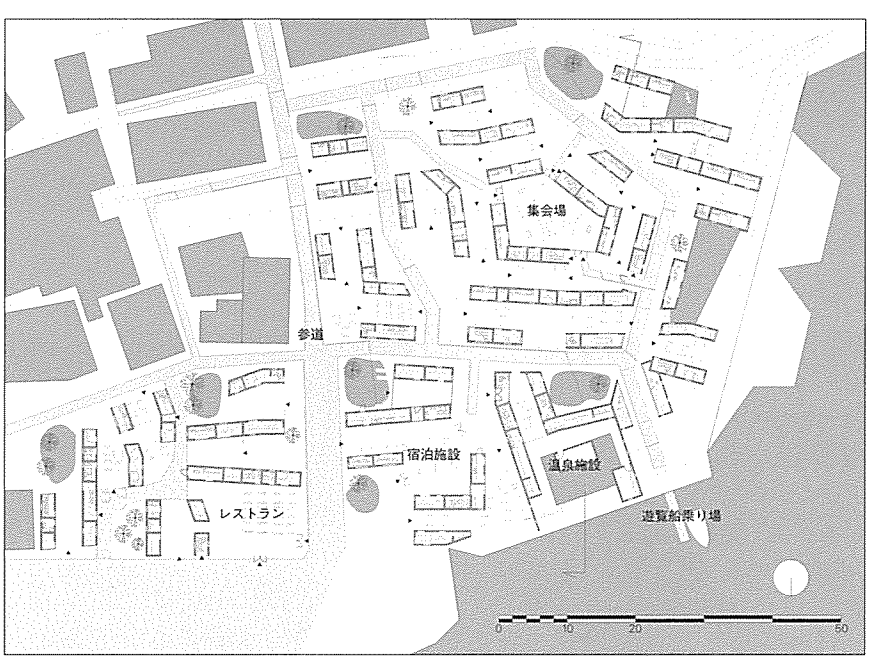
坂本　配置計画は何に準拠しているのか。
宮下　まず視線の問題があって、例えば住宅どうしが真正面で向き合わないとか、店舗どうしは視線が通るようにしながら、一部を共有するように配置しています。
塚本　全体計画をやらないと決まらないようなやり方になっている。実際の小さい建物が集まって出来た街並みや空間は、それぞれの建物が全体につながっていくルールを持っているはず。
坂本　システムが必要。最後にシステムを崩してもよいが、それが見えないのが計画を分かりにくくしている。



視線が通る筒状のユニット



建物に囲まれた外部空間

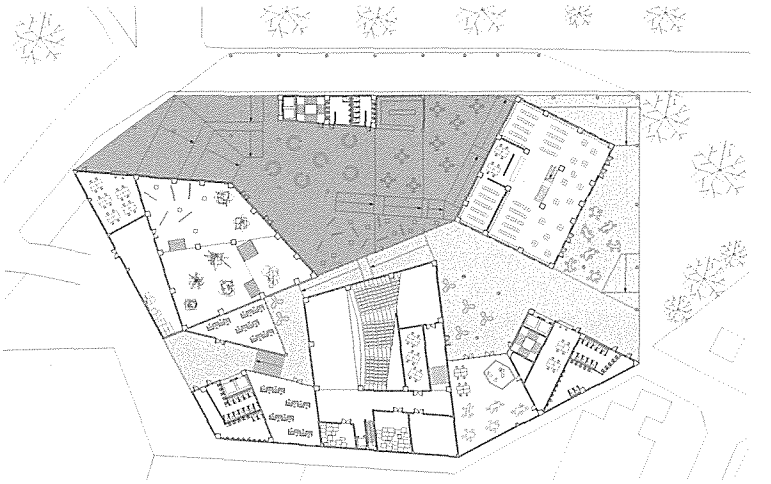


1階平面図／住戸と店舗によって開口の向きの関係を変える

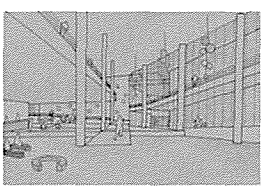
2006年度卒業設計 優秀作品
Diploma Project 2006

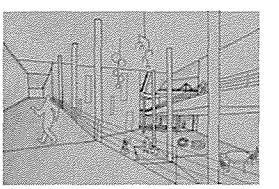
どこまでもうごく
Endless Moving

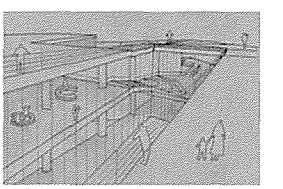
牛渡ふみ
Fumi USHIWATA

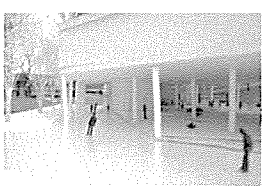


駒沢公園に隣接する土地に公共施設を計画した。公園には多くの人が訪れる。散歩する人、走る人、サイクリングする人。その勢いのある動きを建築に取り込む。ジョギングコースの一部が二重螺旋の導線になり建築を回遊する。導線は広がったり狭まったりしながら滞留する場を持つ。散歩し、寄り道し、体験しながら、通り抜けることのできる公共施設となる。

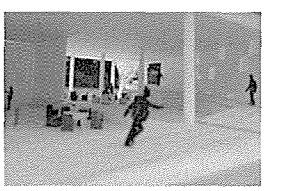

ロビーから上を見上げる


ホール付近から吹き抜けを見上げる


屋上からテラスを見下ろす


ジョギングコースからエントランスを見る


スロープからテラスを見る

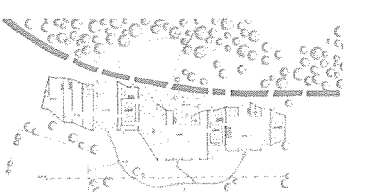

スロープからカフェを見る

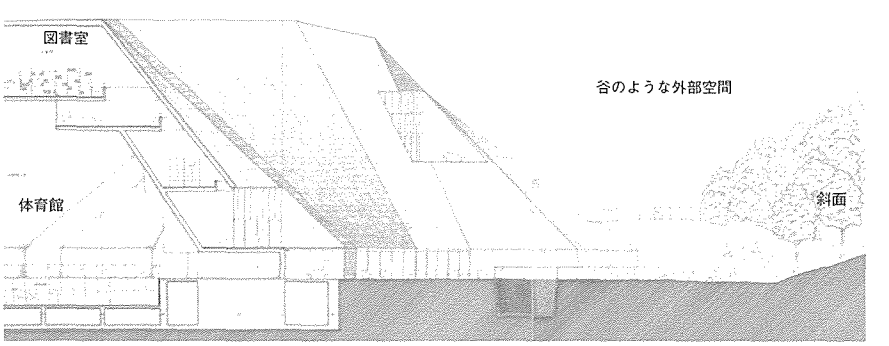
2006年度卒業設計 優秀作品
Diploma Project 2006

傾斜下の勾配
Inclain under Slope

大嶽陽徳
Akinori OTAKE

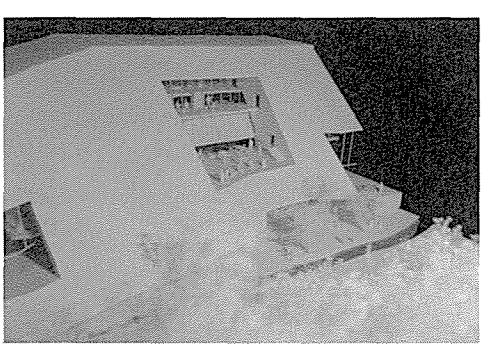

配置図

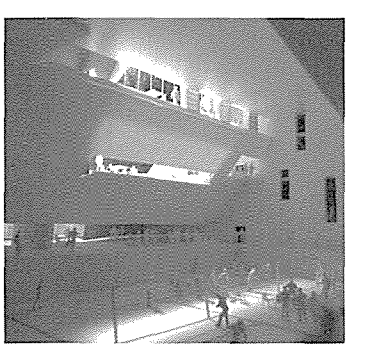

1階平面図



断面図

傾斜地の裾に建つ公共施設の計画である。斜面と建築で谷をつくり、そこに施設の機能を担わせている。そうする事で、建築と斜面の間に密接な関係を構築し、ひとまとまりの環境をつくろうとした。このような周辺環境と関係をもちつつ成立する公共建築のあり方は、「開いた」施設の提案になると考えた。


谷をみる

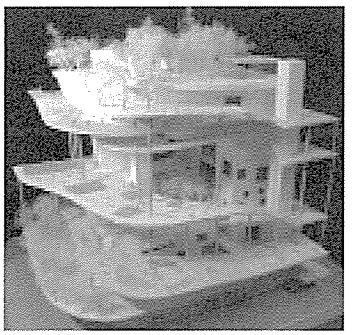

内観

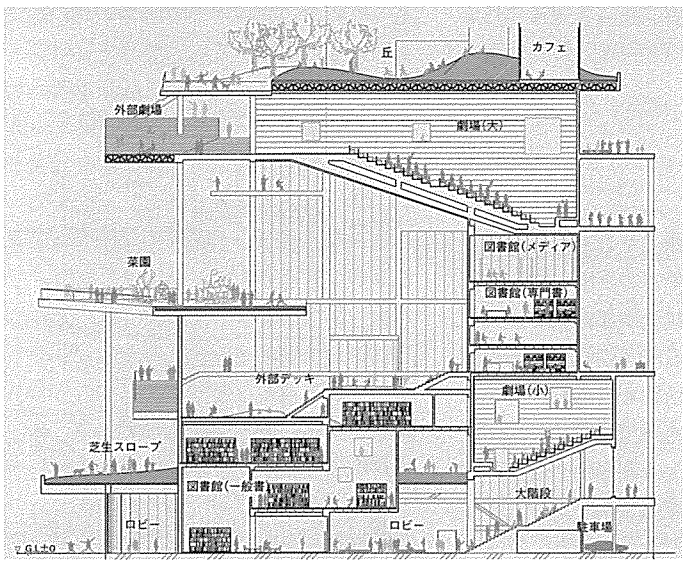
2006年度卒業設計 優秀作品
Diploma Project 2006

重なる散歩みち
Layered Concourse

瀧澤直子
Naoko TAKIZAWA


模型(南側からみた花畑と施設)


模型俯瞰



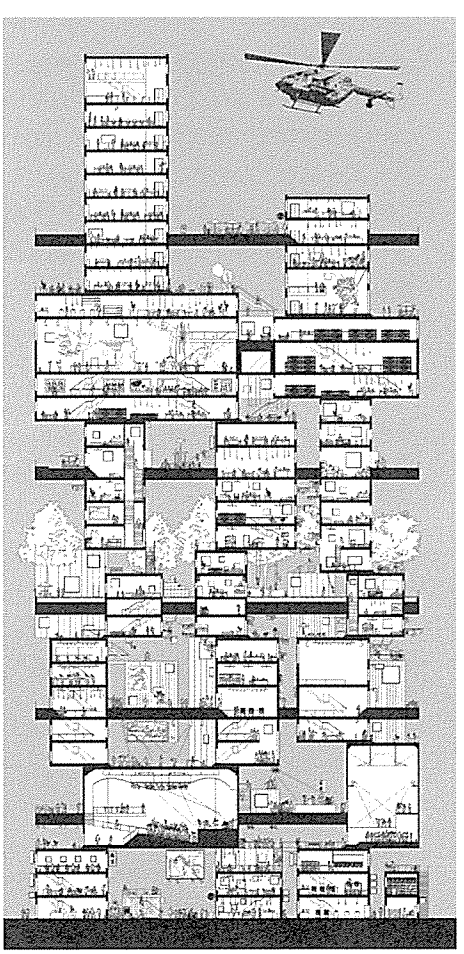
断面図

高密度都市において、公園と公共施設をつくる計画。通常平面的に広がる公園を、地形・広さ・木の種類や密度の違いにより層に分け緩やかにつなぐ。機能毎に独立したヴォリュームは平面・高さを変化させながら様々な要素をもつ公園の層を貫くように配置され、機能と公園、機能同士が場所に応じてそれぞれ多様な距離感や関係性を持つ。

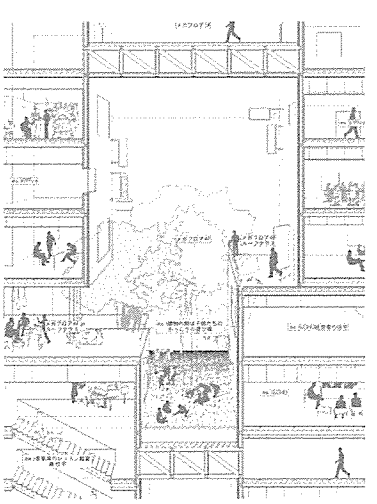
2006年度卒業設計 優秀作品
Diploma Project 2006

Nesting Blocks

中村真広
Masahiro NAKAMURA


断面図


外観コラージュ


断面詳細パース

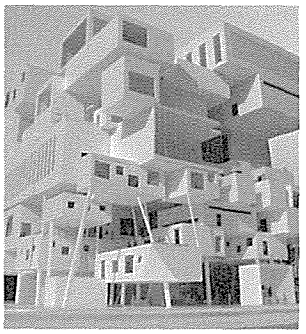
もっといきいきとした生活が染み込む超高層をつくりたい。大きなMEGASlabとそれを貫くNestingBlocksによって、ひとつのNestingBlockの領域はMEGASlabをはさんで上下に広がり、2つのMEGASlabの間には上下からの風景が混在する。これは内部に様々な余剰の空間をもつ、超高層のオルタナティブの提案である。

この作品は、レモン画翠主催「第30回学生設計優秀作品展」にてレモン賞を受賞した。

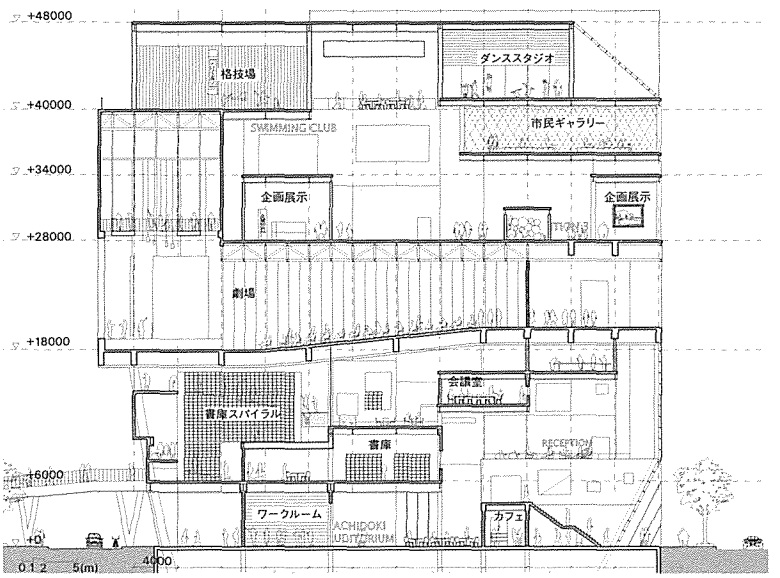
2006年度卒業設計 優秀作品
Diploma Project 2006

Isolation complex

山崎康太
Kota YAMAZAKI


外観


内観



断面図

文化複合施設の計画。それぞれの部屋を引き離して集合させることで、様々な活動の部屋同士の距離や視線関係をつくる。それらの間にできるひとつながりの空間は、変化していく活動を許容し、光や音を伝える。敷地は勝どき。開発により、空間のスケールが大きなものへと更新されていく中で、様々なスケールをもつ公共空間のあり方を考えた。

2006年度卒業設計　全タイトル

浅野貴文　アーキハバラ
新垣祐子　海のカタチ
安藤広隆　見れる体育館
五十嵐麻美　道に入り込む所作
石渡友輔　外を縫う
牛渡ふみ　どこまでもうごく
大口信也　AKABANE vestige park
大澤久美　重なりを抜け、すきまに見る
大滝章裕　二子玉川と棲む
大嶽陽徳　傾斜下の勾配
奥村豪悠　夕影に集う
小滝健司　斜面にちらばる小さな地面
小田部敏明　フットサルパーク
金谷貴央　ミニカワライフ
黒川雄太　チャミズ　STATION PARK
小嶋一輝　三茶文化プレイス
近藤由佳　つながる、紡ぐ
佐々木 啓　corner≒city
清水寿昭　Hotch Potch Station Otemachi
新谷 健　next door parasite
杉田昌弥　through the city hall
鈴木英理子　ハコでヤマ
高橋聡史　roof like bridge
瀧澤直子　重なる散歩みち
田中栄次　stadium screen
田中佳幹　都市の小さな居場所
玉井英輔　chidori library
津村万梨子　コノマチリビング
土井 司　NEURON
内藤智之　キチジョージコム
中野修太　ちいさなCUBEがささえる
　　10コの大CUBE
中村真広　Nesting Blocks
西村友樹　a fermata
橋本竜一　建築と大地
深谷和義　コーヒー好きの集まる家
舩越克己　駅のむこうにみえる街
舟橋靖之　波
古荘佳子　たまプラーザ駅 南口
本江慶亮　まちとの距離
松島優太　NISHI-SHINJUKU RESIDENTIAL
　　AND OFFICE COMPLEX
宮下淳平　いえの島
宮永賛紀　はしらの森
モハメッド ファトマ カシム　porous garden
守澤貴幸　路地と住居と人と
八木 豊　rehabiliway
山崎康太　isolation complex
吉岡 慶　支持の観察のための間隙
吉田 泰　Asigara
若村祐介　a new Departure in ENOSHIMA
上坊 絢　LiVrary
矢後亮介　スキマが生み出すつながり

2006年度 卒業設計合同公開講評会 東工大×藝大×東大レポート

Joint presentation of diploma works:
Tokyo Institute of Technology
Tokyo National University of Fine Arts & Music
The University of Tokyo

2007年3月3日、東大安田講堂にて東工大・藝大・東大の卒業設計代表作品（各大学4作品、計12作品）を集めた合同講評会が開催された。当日はゲストクリティークに青木淳、石山修武、貝島桃代、鈴木明、槇文彦の5氏を迎え、各大学の先生や1200人の聴衆がその経過を見守った。本レポートでは本学発表者がゲストクリティークから頂いた講評を中心に報告する。

東工大作品講評

五十嵐麻美『道に入り込む所作』：敷地周辺との読み取り、プログラムの立て方、建物の造形等、全てトータルとしてバランスがよく、非の打ち所がない現実的な作品（鈴木）。4種類あるループの差異が模型の素材等で示せればよかったのでは（貝島）。道を使って建築を作ろうという点は興味深い。その道の連続性や道自体の性質をもっと明確にデザインできればよかった（青木）。建築としての完成度が高く、都市の中に建つことに対して納得ができる作品（槇）。

佐々木啓『corner≒city』：都市建築のタイポロジーとしては面白いが、建物の造形があまり魅力的なものとなっていない（鈴木）。これはヴォリューム・建ち方だけの提案なのか建築・空間も含めた提案なのかが不明確である。例えば、法規的なことと空間の関係性等が述べられるとよかったかもしれない（貝島）。

中村真広『NESTING BLOCKS』：箱とスラブによって構成される新しい超高層のモデルを示すことができていて、何より設計の意図が断面図に丁寧に示されているのが評価できる（青木）。周辺環境との連続性が述べられていなかったので、超高層というビルを作りたかったのか、もしくは立体化された街のようなものが作りたかったのかが不明瞭である（貝島）。我々の知っているイメージを積み重ねることによってある新たなメッセージが浮かび上がってきていると言える（槇）。

宮下淳平『いえの島』：高低差があるのなら地面のデザインがより重要になるのではないか。また、作者個人の思い入れや問題意識の所在が伝わりにくい（鈴木）。江の島の特殊性を設計に組み込んでいない為、提案性が弱くなっているのではないか（石山）。

講評会を終えて

全体の講評を通して、個人の空間感や個性、更に言うと自分の内面から湧き出てくる問題性が感じとれる案が最終的に評価されたように感じた。それはこの時代に全員が共有できる社会や都市に対する切実な問題意識がないことが一つの原因であろう。卒業設計では設計者個人のエゴと社会にとっての価値との双方向からのアプローチが求められると私は思う。最終的な完成作品はそのバランスの中でどこかに位置することになるが、今回高く評価された2作品の立ち位置はお互いに近く、そして全体の中では個人の思い入れの強い方に偏った場所にいた。偏るということは作品の提案性・インパクトを強くしやすくなる一方で、もう片方からのアプローチには触れないということを意味している。おそらく今回の評価には、社会・都市にとっての必要性を問わずとも、問題が社会性ではなく例え個人的なものであったとしても、切実に熱意を持ち続けて設計に取り組んで欲しいという審査員の思いが現れていたように感じた。

On March 3, 2007, a joint symposium presenting the best diploma works by graduates of Tokyo Institute of Technology, Tokyo National University of Fine Arts & Music, and The University of Tokyo (4 works each, 12 works in total) was held in Tokyo University's Yasuda Lecture Hall. Guest critics were Jun Aoki, Osamu Ishiyama, Momoyo Kaijima, Akira Suzuki, and Fumihiko Maki. Teachers from each university and an audience of 1,200 students attended the presentations.

●発表作品全タイトル（発表順）
「Intersect city」林盛／東大（石山賞）
「garden」白井尚太郎／藝大
「カレーのにおいとはがれたミルフィーユ」渡辺典文／東大
「遡上都市」服部一晃／東大（グランプリ）
「NESTING BLOCKS」中村真広／東工大
「道に入り込む所作」五十嵐麻美／東工大（槇賞）
「eyes wide shut」赤坂惟史／東大
「両方ともほしい」中川千歳／藝大（鈴木賞）
「詩（シ）ークエンス」内田陽介／藝大（準グランプリ）
「corner≒city」佐々木啓／東工大（貝島賞）
「いえの島」宮下淳平／東工大
「花火」白根昌和／藝大（青木賞）

レポート：浅見泰則［修士2年］
Report: Yasunori ASAMI (M2)


会場風景



発表者とゲストクリティークによる質疑応答



ゲストクリティークによる最終講評

2006年度修士制作大岡山建築賞・銀賞
O-okayama Architectural Prize (Silver)
Master's Design Project 2006

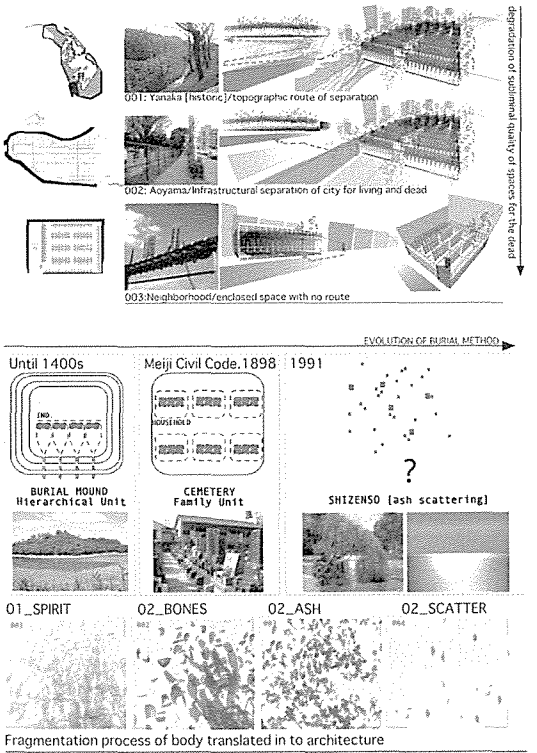
Visualizing Tokyo's Death Narrative

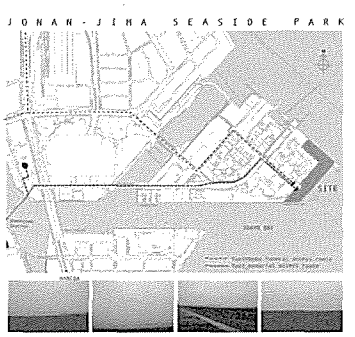
Tamsin GREEN

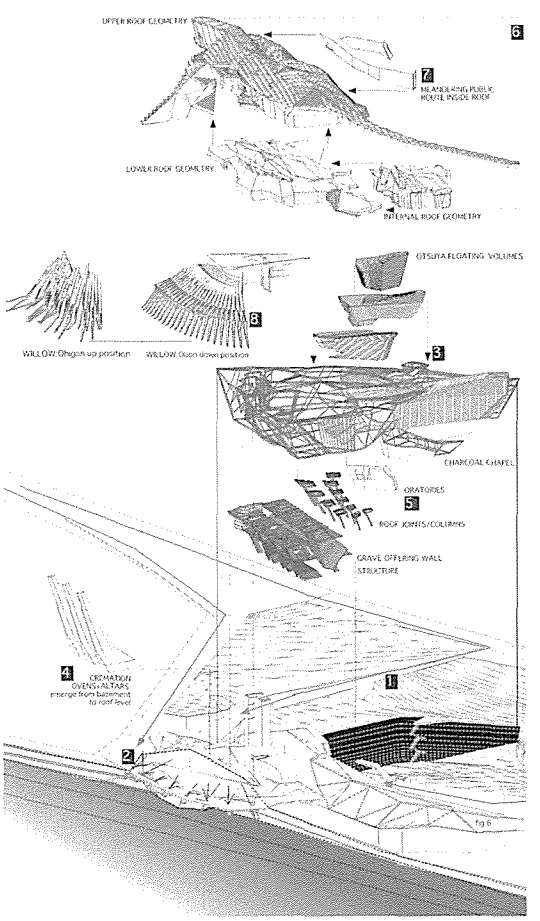


With the ageing Japanese society, the population is decreasing and contemporary families are geographically dispersed, leaving no one to care for the old-style communal burial plots.

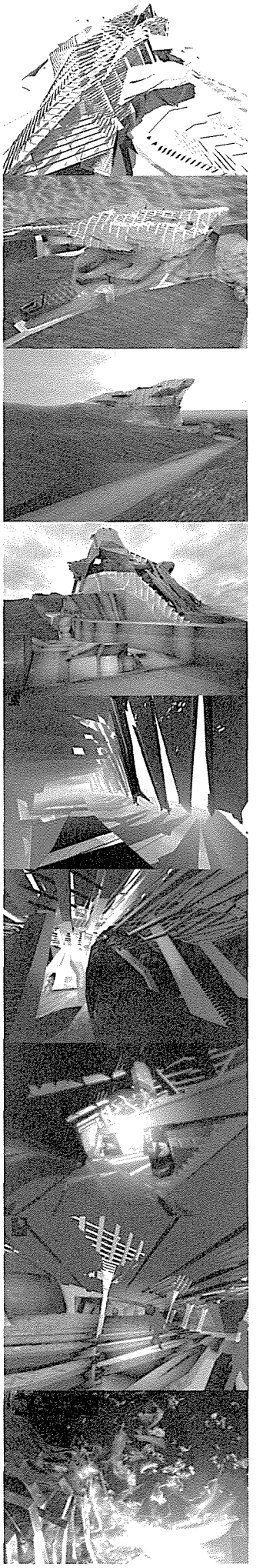
The project is divided into two sections; firstly a research and analysis based work, Deciphering the narrative. As the project has many layers and fragments of interpretation, the narrative framework effectively digests the research and provides a strategy for design. It creates a storyboard that follows imaginary "characters" that represent three threads of investigation. The mortician, Genji, is essentially a shadow whose presence enables the meeting of the other two characters, Yuki and Nobu. By rediscovering the historical sublime quality of spiritual space, can the integration of cultural analysis and contemporary theories of psychological space lead to a more engaging form of funerary architecture?







isometric



perspectives

2006年度修士制作大岡山建築賞・銀賞
O-okayama Architectural Prize (Silver)
Master's Design Project 2006

ハイブ・ステーション

多面隣接乗換えシステムによる新宿駅再編計画

Hive Station

Shinjuku Station Reorganizing Project
Applying Multi-Sides Transfer System

文野義久
Yoshihisa FUMINO

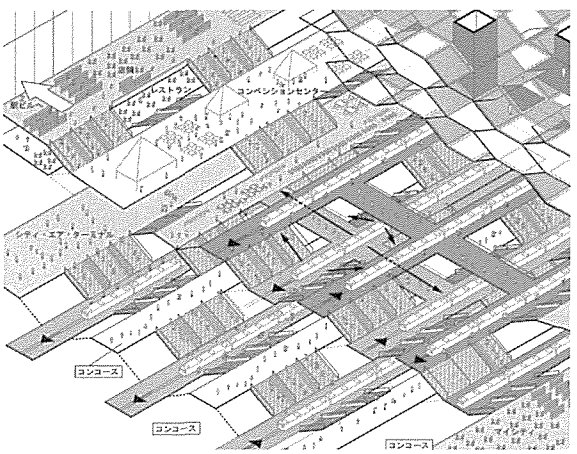


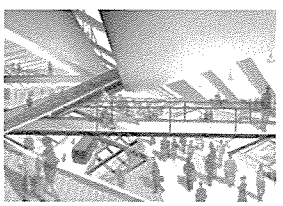
新宿駅は、鉄道路線を中心とした複数の交通機関が集中し、都心でも極めて利用者の多い駅である。特にJRについては近年新たな路線の乗入れなどが進んでおり、大量の乗降客の円滑な移動、乗換えの合理化が必要になってきている。また、駅周辺には駅前広場やバスターミナル、歌舞伎町などの活気に溢れた商業地区、西新宿のオフィス街等、多様な活動によってできる都市空間が広がっており、駅の乗換えシステムと周辺環境との連携を図るため駅の基本的なあり方を建築的に考える必要があるといえる。本計画では新宿駅の鉄道軌道上のスペースを利用して、蜂の巣状の架構の中に鉄道路線を複層化させ、バスターミナルや商業スペースなどが立体的に複合した「ハイブ・ステーション」を提案している。

鉄道や路線バス、高速バスなどの交通機関相互は、多方向に隣接する乗換えシステムによって円滑に接続され、さらに周辺の建物や環境とも空間的、動線的に連携させることで地域における活動の中枢となるような、都市における新たな駅空間の可能性を示している。



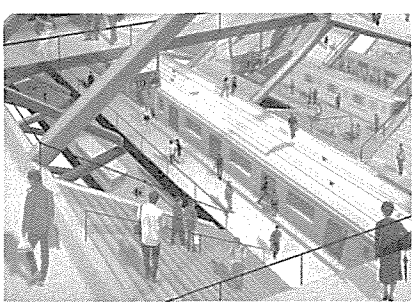
俯瞰モンタージュ



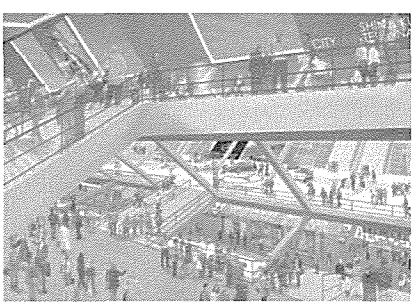


▲ハイブ・ステーションのコンコース上のブリッジから長手方向を見る。短軸方向にはいくつもの鉄道路線や、レストラン等の店舗があり、立体的に移動できる。

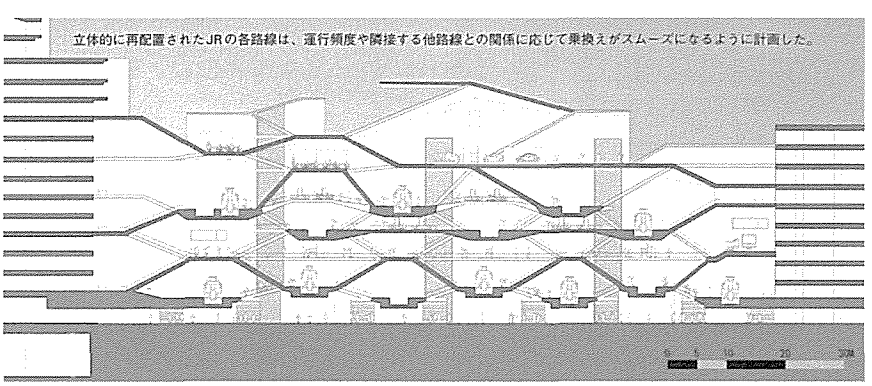
◀多面隣接乗換えシステム
蜂の巣状の架構内部に、鉄道軌道を複層化させ、商業空間などと複合させることで、乗換えを含め、利用者が多方向へ移動できる動線システム



立体的な乗換え空間
駅内では、両プラットホームから3方向ずつ、最大で合計6方向への移動が可能である。コンコースに向かう人、別の路線やバスに乗り換える人が移動する階段やブリッジが立体的に交錯する。



多用途に隣接する駅空間
ハイブ・ステーションの上層部分では、周りの駅ビルの増床スペースやコンベンションセンターなどが、成田エクスプレス等の比較的運行頻度の少ない路線の乗換え空間に複合している。それぞれのスペース間は立体的な往来が可能である。



短手断面図

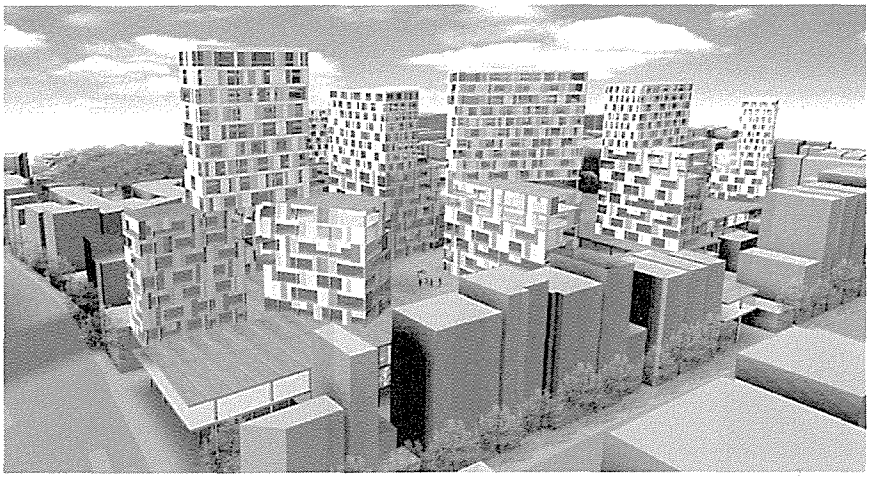
2006年度修士制作大岡山建築賞・銀賞
O-okayama Architectural Prize (Silver)
Master's Design Project 2006

空所とヴォリュームが連鎖する都市建築

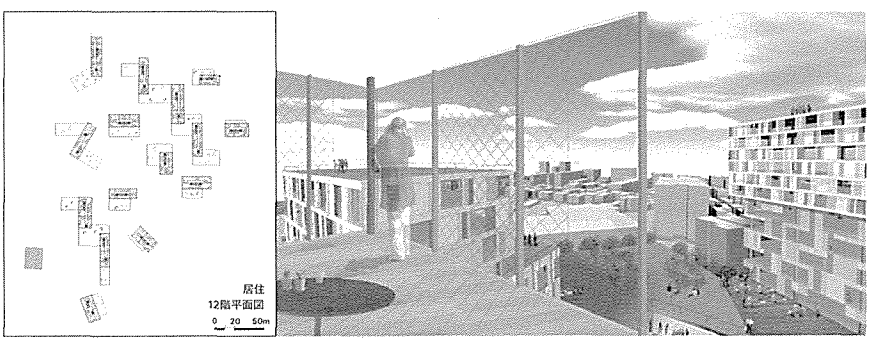
urban architecture of interconnected voids and volumes

三木達郎
Tatsuro MIKI

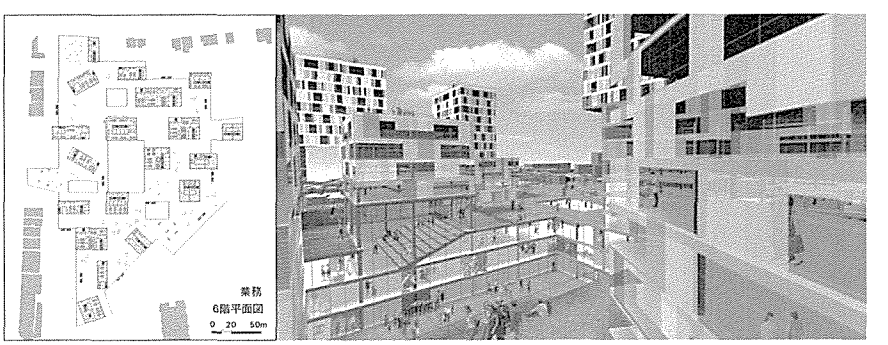




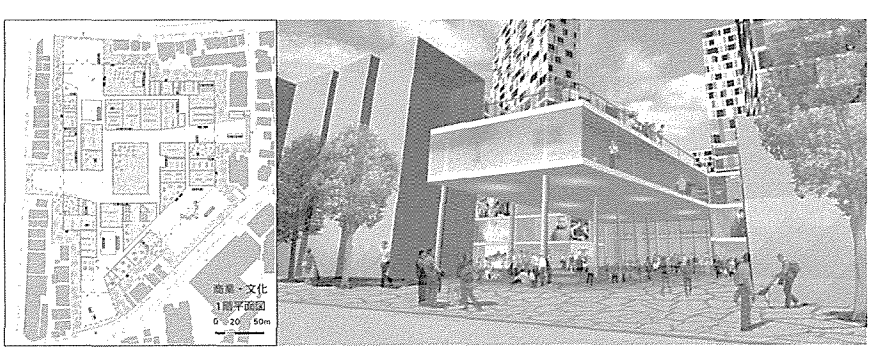




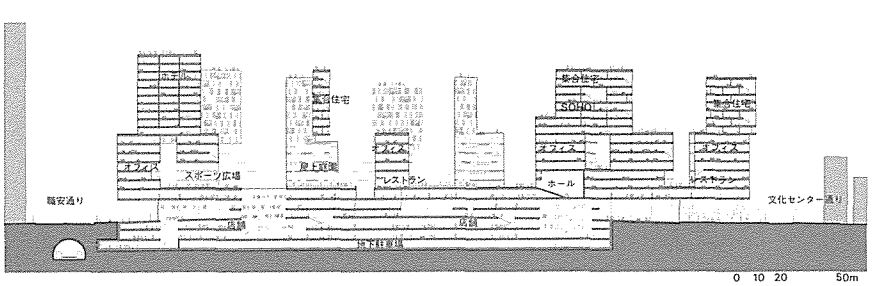
高層部　広い開口面をもち広大な空所を含み込んだ居住空間



中層部　内部空間とそれによって分節された空所が連鎖する構成



低層部　外周にエントランスをもつアクセシビリティの高い平面構成



断面図

近年都心部に見られる大規模街区再開発による高層建築の多くは、大きな平面の積層によるヴォリューム形状をもち、外部との関係が希薄な完結した内部空間となっている。それに対しヴォリュームをより細かいスケールで扱い、様々な空所を形成することで、内部空間がより多くの空所に接し、多方向へ抜ける視線や活動に適した空間の広がりをもつような、空所とヴォリュームが連鎖する関係をつくることができると考えられる。そこで本計画では、ケーススタディとして新宿六丁目の複合市街地計画地区を対象に、空所とヴォリュームの連鎖による都市建築を提案する。そのことにより、大規模敷地において周囲の環境と空所を介した繋がりを形成しつつ、内外の空間が密接に連鎖した都市建築の可能性を示すことを目的とする。

周囲の建物の高さや配置、それに伴う近景から遠景までの空所といった高さごとに異なる環境に対して空所とヴォリュームが連鎖する関係を計画することで、層ごとに特徴のある空間構成となる。さらにそれらが立体的に連鎖することで、周辺環境との繋がりを保つ都市建築の新たなあり方のひとつが示される。

2006年度修士制作
Master's Design Project 2006

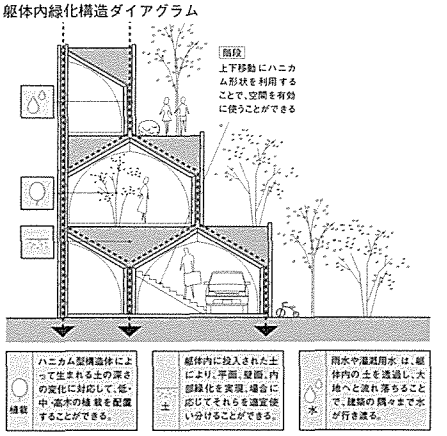
ニュー・ネイチャー・エレベイテド・ストラクチャー

New Nature
Elevated Structure

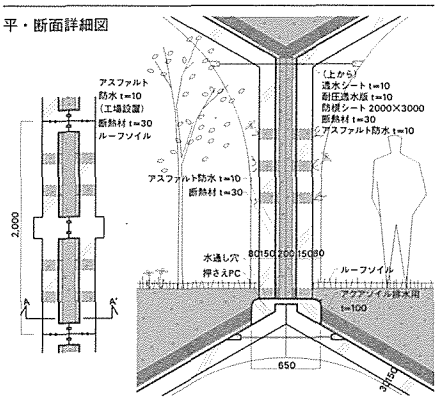
大庭拓也
Takuya OBA

ヒートアイランド現象に対する軽減効果や断熱効果など、建物の緑化による有用性は明確なものとなり、近年、ますます条例化等によって行政からの緑化指導が促進されている。また緑化は単に視覚のためにとどまらず、主要素である植栽、土と水循環は、都市的な視点から建築空間の質を高め、多様な価値を有する有効な手段になりうると考える。本計画では、新たな緑化手法として躯体内緑化構造を提案し、高層建築における、大地と連続する新しい関係とそこから生み出される緑化手法の具体案を提示することを目的とする。具体案として住居を中心とした複合施設を計画した。躯体内緑化構造はそのハニカム状の特性を活かし従来の高層建築タイプにはみられない新しい建築表現が可能である。また大地と連続することで降雨や雑排水を敷地レベルで管理し、沿岸全体に与える影響を最小限に抑えるだけでなく、地中の恒温性を最大限利用し外気の予冷・予熱を行うことができる。空間の質を高めるだけでなく、その集合による都市的な役割を果たし得る躯体内緑化構造は、今後の建築設計において一般性を獲得し、かつ有効な手法となり得る可能性を示すものとする。

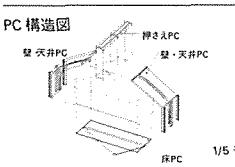
躯体内緑化構造ダイアグラム

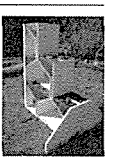


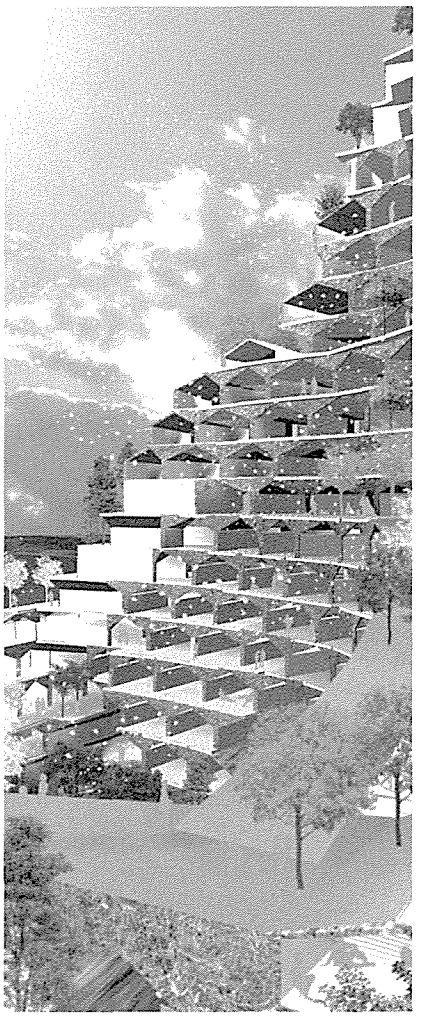
平・断面詳細図



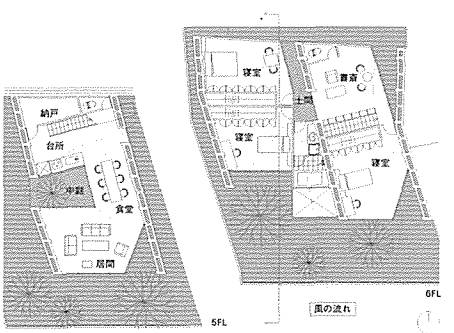
PC構造図



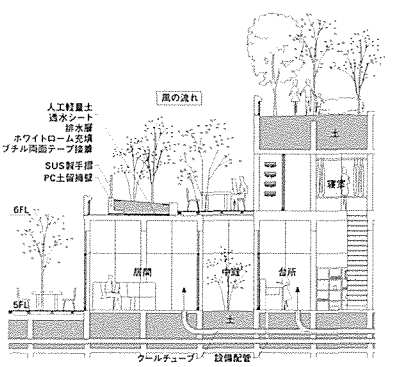

1/5 モックアップ写真



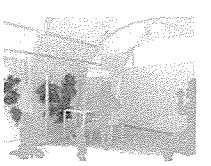
ニュー・ネーチャー・エレベイテド・ハウジング

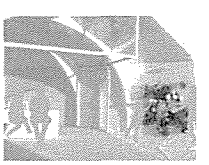


住戸平面図例

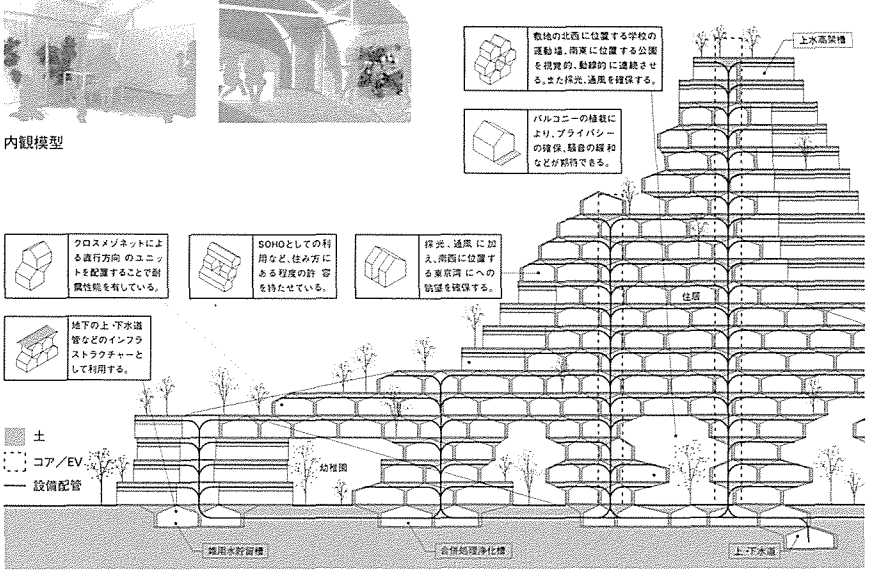


住戸断面図例





内観模型



構造・設備イメージ展開図

コースト・コンパクト・シティ

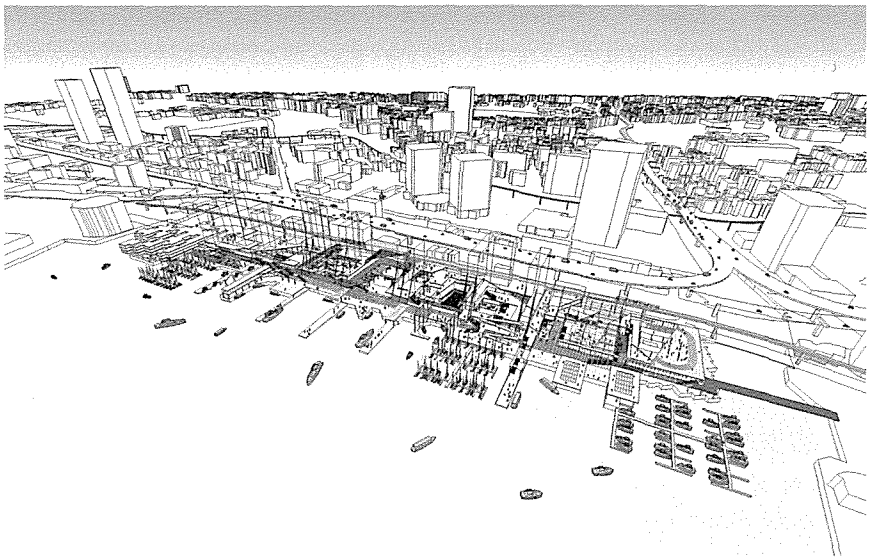
湾岸居住支援施設としての拠点開発計画

COAST COMPACT CITY

HUB ORGANIZING PROJECT
AS RESIDENECE SUPPORT IN TOKYO BAY

樟 茂育
Shigeyasu KUSU

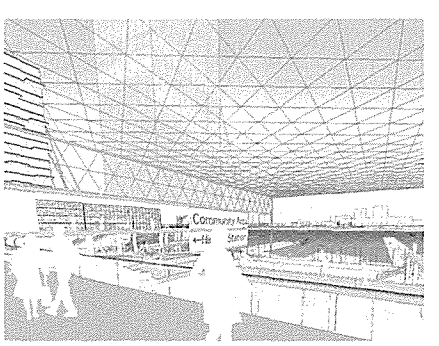
近年、東京湾沿岸部では、点在した工場跡地に、大規模な集合住宅を中心とした開発が多く見られる。これらの開発地では急激な人口流入によって、小学校をはじめとした教育施設や医療施設といった日常の生活を支援する施設が不足しており、今後更にこの状況が深刻化すると考えられる。また、東京湾沿岸部には有明地区やお台場地区などに、スポーツ施設や商業施設などが同様にして点在しており、海上交通によるそれらのネットワーク化をはかることで、海をとりまく生活圏を構築する可能性が考えられる。そこで本計画では、東京湾沿岸部（日の出ふ頭）において、水上交通のターミナルと、湾岸における居住支援施設を複合した拠点開発を計画することでのコースト・コンパクト・シティを提示した。拠点開発では沿岸と地上施設の接続の在り方を提案することで、水上の空間やアクティビティを取り込んだ拠点施設を形成するとともに、東京湾沿岸部を水上交通によって動線的かつ空間的に利用することで、海上を中心とした文化圏の構築と、湾岸地域で互いに連携し合うことでの湾岸都市居住の可能性を示すものと考える。



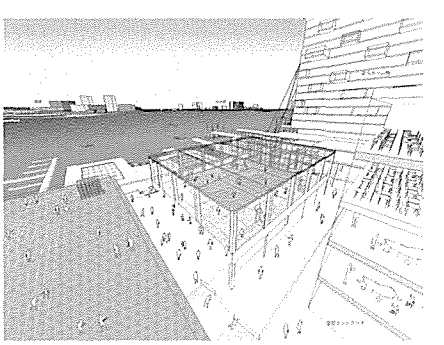
拠点ターミナル全体図



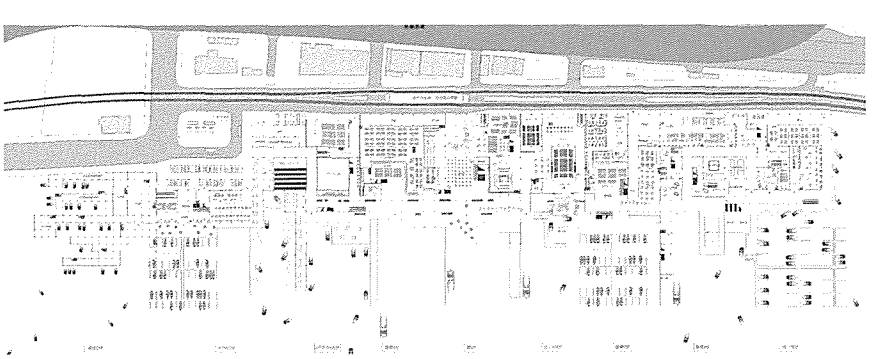
桟橋からコースト・パッサージュ、施設を望む
水上レストランや役所の受付など建物内外の活動が連続するコースト・パッサージュは桟橋から訪れる人を受け入れることで、水辺と一体となった親水性をもち、沿岸部からコースト・パッサージュを経由して役所エリアなどの施設にアクセスする。ガラスに覆われたファサードは湾岸エリアの玄関口として、水上から視線が連続する外観をつくりだす。



日の出ふ頭駅から桟橋を望む
ゆりかもめ日の出ふ頭駅と水上交通の結節点である駅エリアは拠点計画の中心として様々なレベルへの動線によって多方向にアクセスが可能である。透過性のある大屋根で覆うことで、対岸や屋上広場まで一望できる。



学校校舎から運動場、海、豊洲方向を望む
スポーツエリアやデイケアセンター、幼稚園に隣接している小学校は沿岸から独立した動線をもち、体育館や校庭は共用施設として多様な人たちに開放されることでパブリックスペースが水辺から校舎まで連続して広がっている。



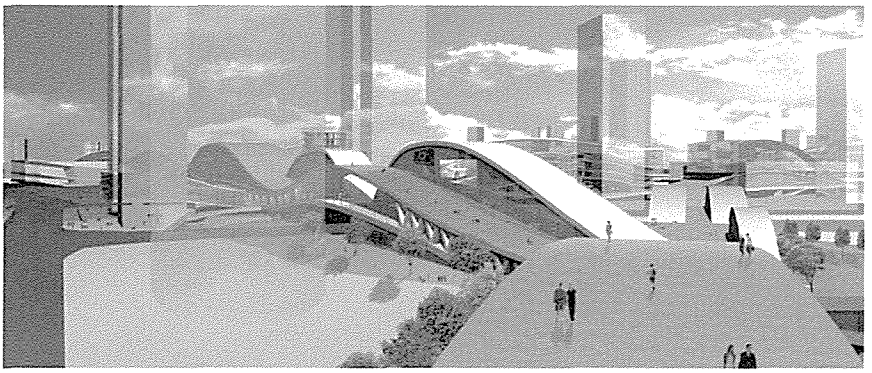
配置図
ゆりかもめ・日の出ふ頭駅に隣接した細長い形状の敷地に、沿岸部に沿って各々の施設をエリアごとに並列させる。また、沿岸部からのエントランスとなるコースト・パッサージュによってそれらのエリアを並列的に結ぶ

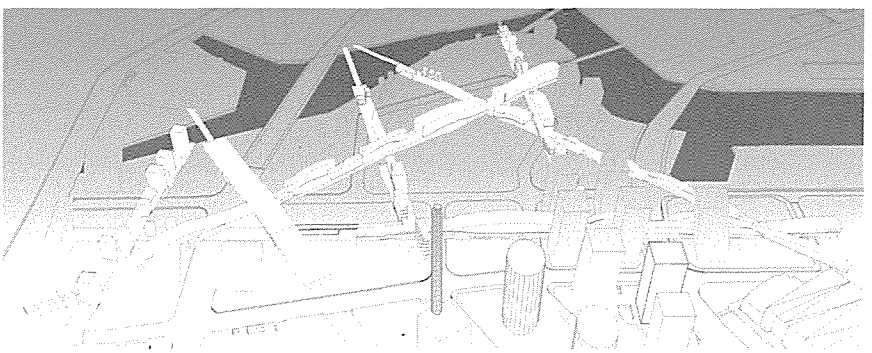
ランドフォームシティ
コミュニケーションの為の都市デザイン

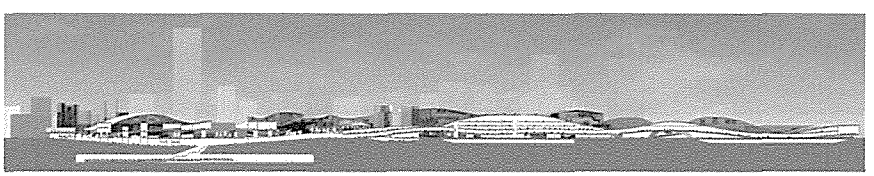
Landform City
Urban Design for communication

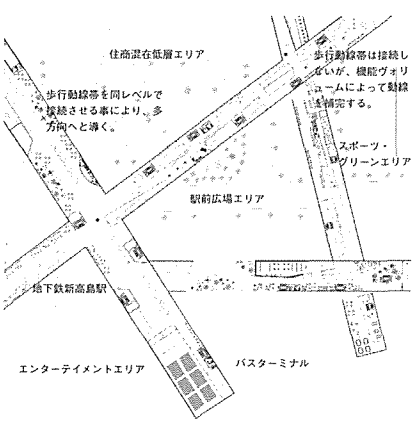
黒川一史
Kazufumi KUROKAWA

横浜の湾岸地域は、幹線道路や貿易港が集中する交通の要所であり、これまで産業の発展を支えてきた。しかし現在、都市居住を含めた高度利用開発が要求されている。そのなかでも新高島地区は地下鉄駅の新設などを核として、その役割を期待されているが、大量輸送交通によって周辺地区と分断され、さらに埋立地の広大かつ平坦な土地に車両交通優先の区画割りにより街区同士の関係は希薄である。そこで本計画では、新高島地区と周辺地区の諸機能をつなぐ起伏を伴った帯状の建築を配置することで、全域に広がる歩行者ネットワークを確保し、複数の既存街区に新たな領域を形成し都市モデルを提案することを目的とする。周辺の都市機能を接続し、道路で区切られた敷地を横断する歩行者動線帯を考える。また接続する都市機能に応じて帯の性格を位置づけ、帯上下に機能を持った建築的なヴォリュームを配する。この事により街区全体を覆う歩行者ネットワークが形成されると同時に、周辺の都市機能との連続を確保し、帯状の建築に囲まれる既存街区を超えた複合的なエリアが形成され、帯状の建築を介した新たなる交流の場が隣接する都市モデルを提案した。

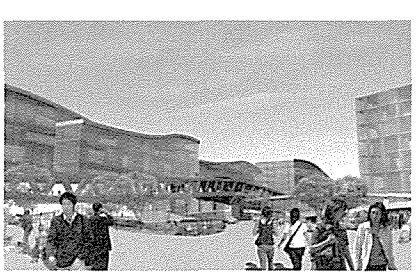

ランドフォームベルト同士の重なりをみる

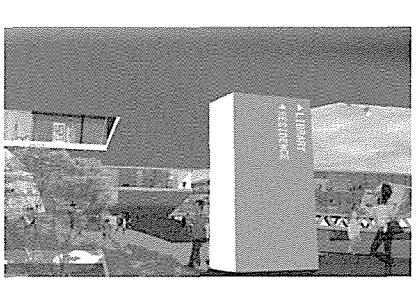

マスタープラン

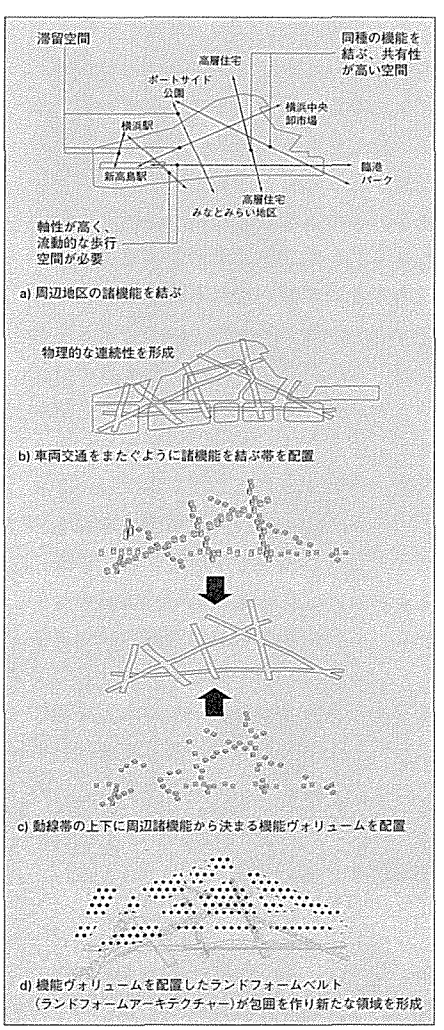

全体断面図



平面図（新高島駅東口周辺）


ランドフォームベルトに囲まれた外部空間


ランドフォームベルトを支えるコアは、内部への入口を兼ねる



設計プロセス

2006年度修士制作
Master's Design Project 2006

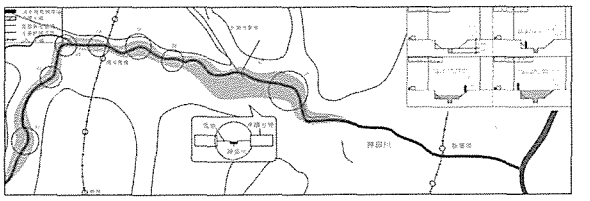
ダム・シティ
分水路網を用いた都市空間の再編成

DAM CITY
Restructuring urban spaces
with flood control Canals

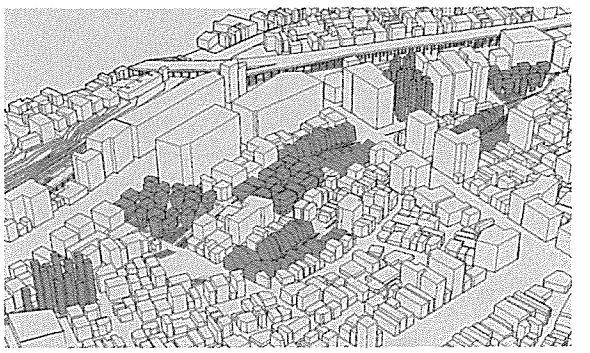
新保佳恵
Yoshie SHIMBO

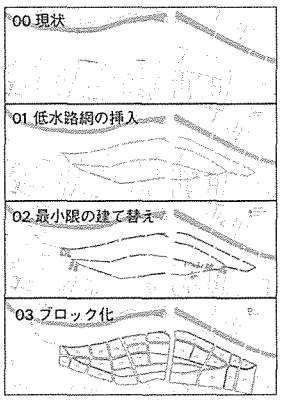
都市の急激な市街化によって土地本来の雨水の保水性が低下したことに起因して、近年都市型洪水が頻発している。洪水の危険域として都市の暗部となり利用価値が低下している神田川流域において、既存の都市構造へ複数の水路網と氾濫域による治水システムを計画する。氾濫域は幅やその形態が流れる水量によって変化する。水路に挟まれる・包含する・接する3つのブロックタイプにそれぞれ拡散・拡幅・貯水の水コントロール方法を設定し、カワラ・タワー、タニ・ナガヤ、イケ・プロティの3タイプのブロックタイポロジーとした。街区規模で水面への視線のぬけ、通風を確保し、かつ季節による水位の変化を楽しめる住環境を計画する。このような東京都市部の狭小建築からなる隙間の多い街並みを生かす建築とそのヒューマンスケールの水辺環境によって、かつての盛り場として賑わいをみせていたような、水辺と生活様式との結びつきを作り出すことができるのではないだろうか。

この作品は「トウキョウ建築コレクション2007」において、「難波和彦賞」を受賞した。

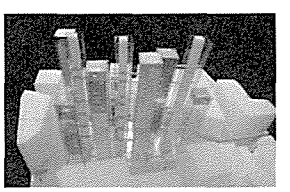

神田川流域の分水路治水計画

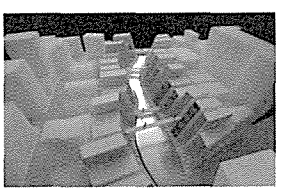

神田川の氾濫

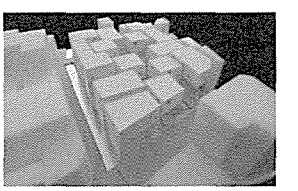

04開発サンプル
既存の街路網にそって空き地を利用しながら、都市基盤として神田川の流れを分水する分水路と、街区単位で氾濫域を挿入し、開発単位のブロックを決定する。

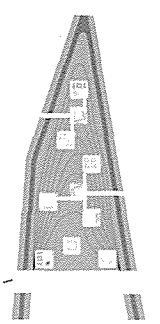


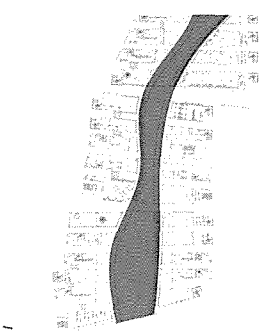
プロセス

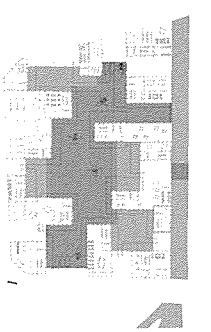

01 カワラ・タワー


02 タニ・ナガヤ

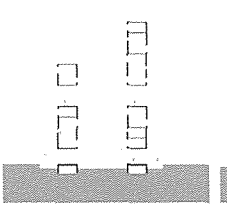

03 イケ・ピロティ

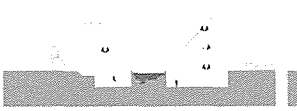

01 1F平面図

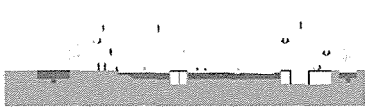

02 1F平面図


03 1F平面図

神田川からの水を低水路に引き込み、水量が多い夏期には、周辺のヒートアイランド現象を緩和するクールスポットとなる。


01 断面図

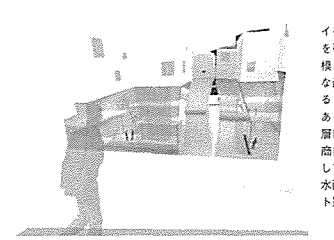

02 断面図


03 断面図


カワラ・タワーブロックは水路網の分岐点と集合点に位置し、水を分散するためのタワー型建築の集合である。面積の小さなブロックに分散させることで水面から直接立ち上がる基礎部が湿潤した水の流れを拡散させる水制としての機能をもつ。夏期はタワーの足元のクールスポットをへた涼しい空気を作用効果でダブルスキン内に取り込み、4面開口をもつ各住戸への冷却効果を期待できる。
街路よりタワーを眺める


ブリッジよりナガヤを眺める

タニ・ナガヤブロックは蛇行させた氾濫域に応じて建物形状を湾曲させ、また高さ方向は日差しを考慮して斜面を用いた建築群を配置する。この一連した壁面の連なりが谷状の景観をつくりだしている。これらの建物は水路に対して長屋形式で集合し、個々の住戸単位で水面を確保することができる。この水の流れに対して、ほぼ直行するスリット状の隙間が、水路上を流れる風を誘引し周辺へ導いていく。


室内よりイケを眺める

イケ・ピロティブロックは水路から水を引き込んだ貯水池の機能をもつ小規模な池の集合と低層レベルでボーラスな建築群が互いにひだ状に隣接しているブロック建築。建物は高密な配置であるが、水辺への日差しの考慮から低層部分を切りかいている。3層までは商業が入り、水辺をパブリックに開放している。建物間の半パティオ空間の水面から温度の高い周辺のアスファルト道路へと、空気の流れが生じる。

建築教育のための キャンパスデザイン

東京工業大学建築学科棟再編計画

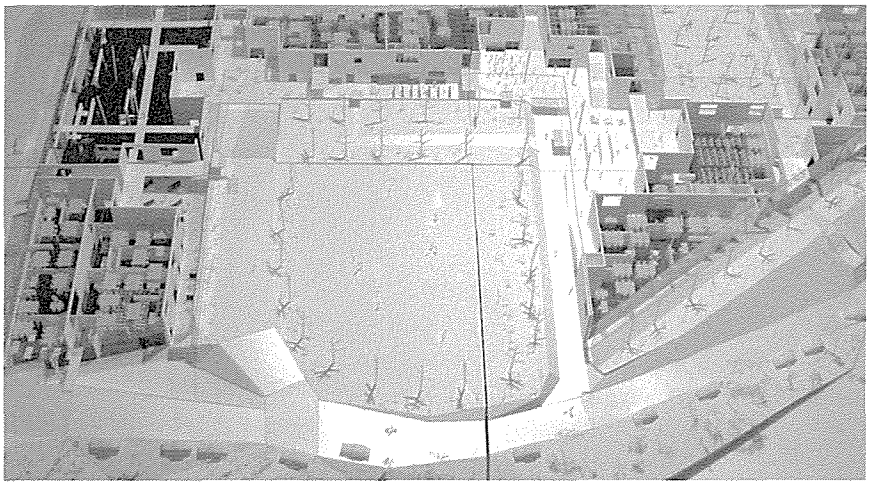
NEW CAMPUS DESIGN FOR ARCHITECTUAL SCHOOL

A Case Study for
Tokyo Tech Midorigaoka Campus

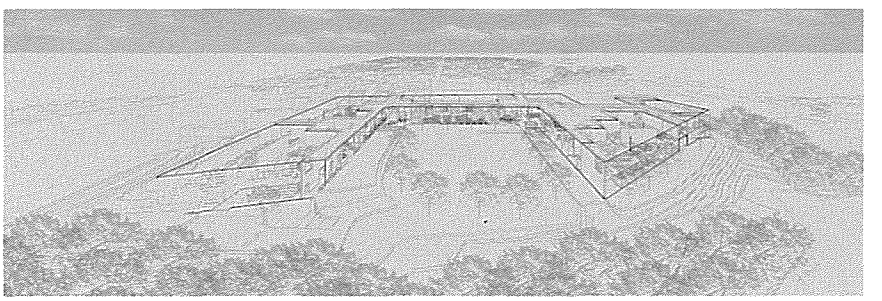
須賀貴康
Takayasu SUGA

近年、建築教育についての議論が盛んに行われている。設計行為や建築教育の場がグローバルになりつつある現在、教育プログラムを再考する必要があり、それに伴い講義室、製図室、研究室、実験室等を有したキャンパスの在り方が問われている。そこでまず国内外における主要な20の建築学科について調査を行った。次に現在老朽化が進んでいる東京工業大学建築学科棟をケーススタディとして取り上げ再編計画を提案する。

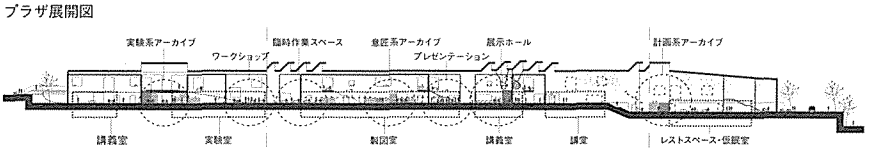
本計画は老朽化の度合いや使いながらの建替えのため段階的に行われる。外構計画として既存の広場や樹木を保存しながら車道や駐車場の問題、さらに緑が丘駅からのアプローチの問題を改善する提案を行っている。さらに建築計画として、動線の交差点状に設けられたプラザで展覧会や大人数でのイベントなどが行う事ができ、異なる分野間の交流を促す。建築学科アーカイブ空間では、現在進行形で大学独自のアーカイブをつくっていく事で、建築学科の独自性を強く打ち出す。研究室は2～3研究室がワンルームになることで、何百年も続いていく大学の変化に対応しつつ、空きのスペースを有効に利用していく計画である。



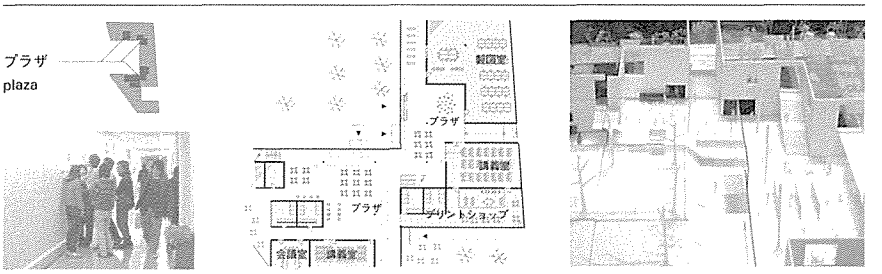
模型写真



プラザ展開図

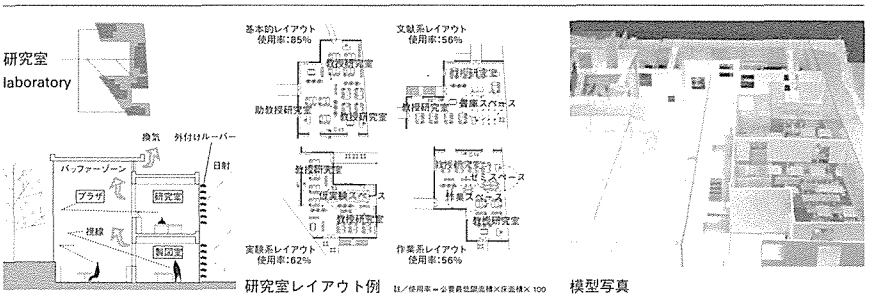


プラザ展開図



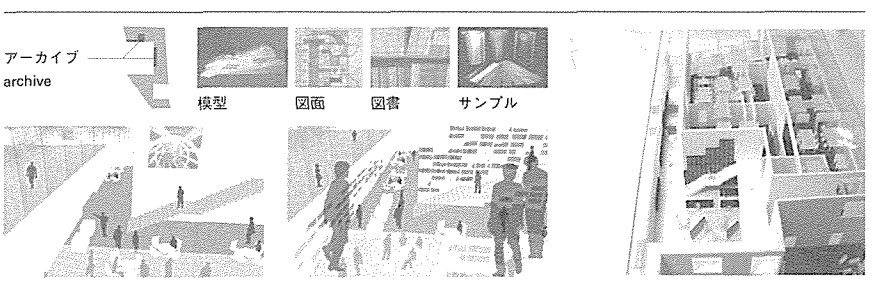
平面図

模型写真

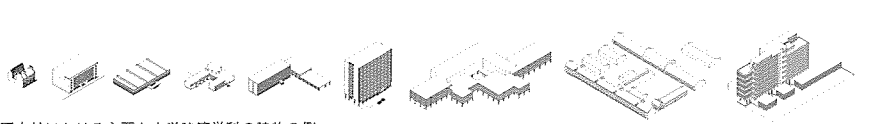


研究室レイアウト例　註/使用率＝必要最低限面積×在室率×100

模型写真



模型写真



国内外における主要な大学建築学科の建物の例

レリーフ シティ

森林公園と都市の混在した埋立地

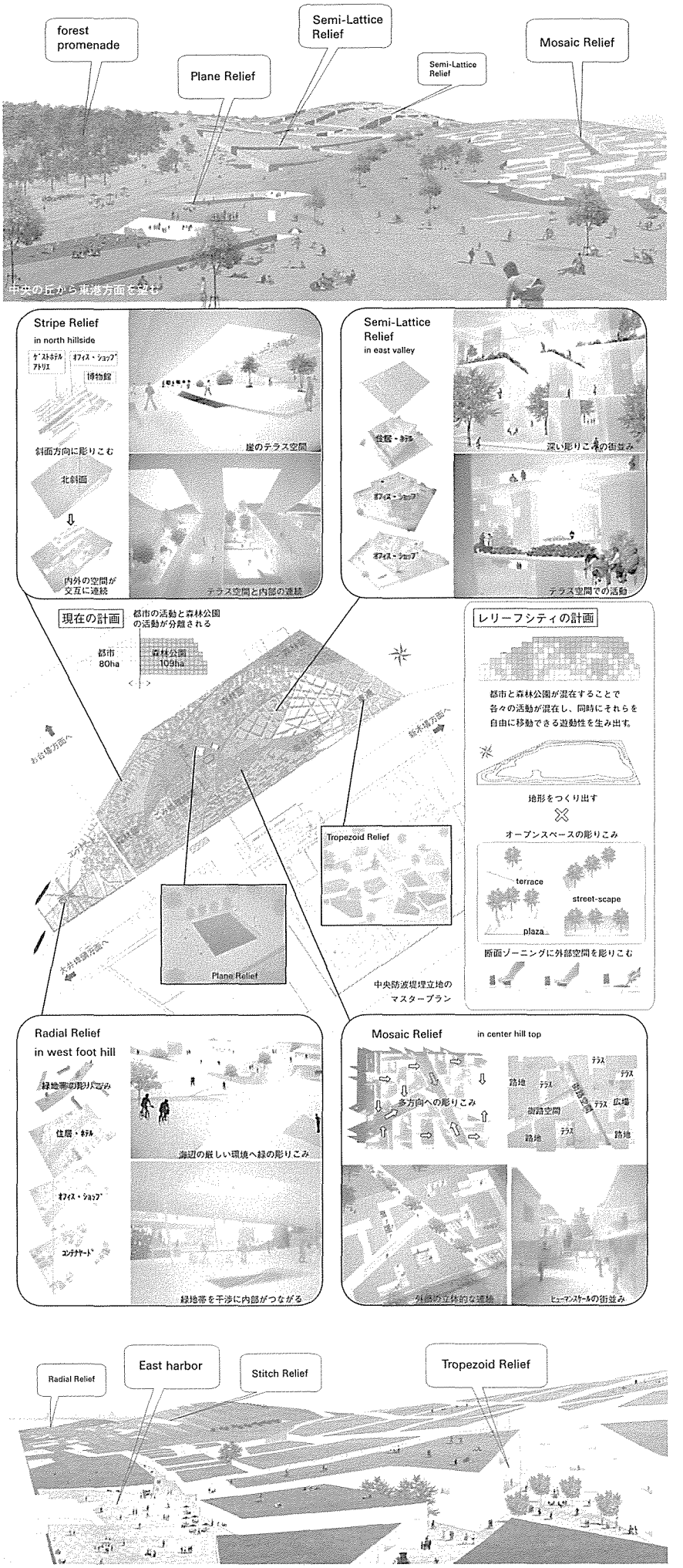
RELIEF CITY

The landfill city intermingled
with the forest park

武田新平
Shinpei TAKEDA

東京港湾の「中央防波堤内側埋立地」では、湾岸公園の核となる大規模な森林公園と、その継続的な活用を計る複合機能を持った都市が求められている。しかし、公園と都市双方の活動を促す外部空間にとって、埋立地における車両重視の交通空間と広大な敷地割りへの広大な公開空地は、閑散とした雰囲気をつくると考えられる。本計画では、起伏を持った地形をつくり、そこにオープンスペースを彫りこむことによって、埋立地の広大な空間を活かしながら、森林公園と都市の外部空間が複雑に絡み合うレリーフ状の都市をつくり出す。

森林公園と都市を混在してレイアウトし、埋立地全体の地形に対して、彫りこみ操作を加え、交通拠点との関係を考慮した多様な空間を持つ複合機能都市としての性格付けを行う。それらは、様々なオープンスペースと人々のアクティビティを生み出し、各々は埋立地の広大なフォルムの中でなだらかにつながれることで遊動性を持つ。このような都市は森林公園と複合機能都市の双方が近接して機能する埋立地の計画の可能性を提示するものと考える。

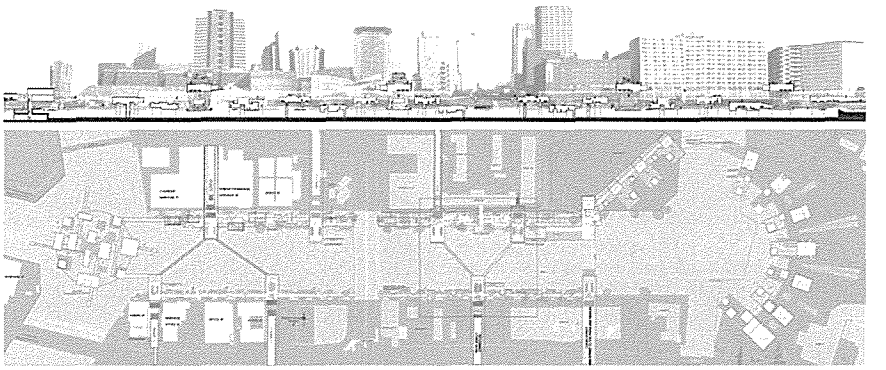


東港から西港方面を望む

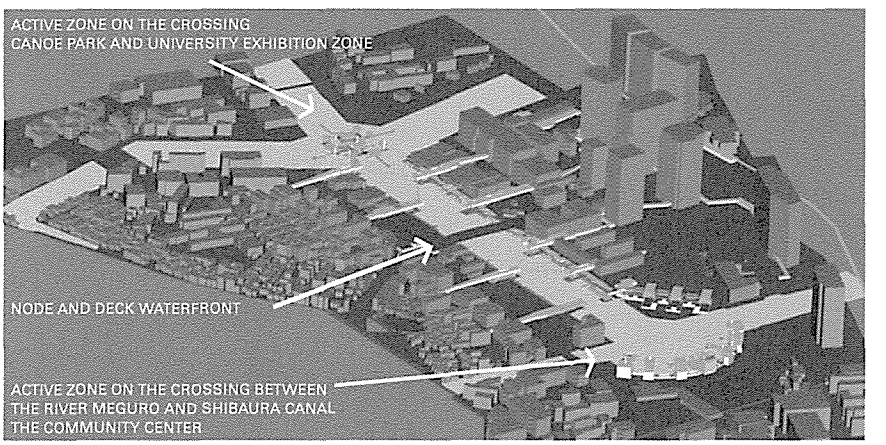
New boundary system in Tokyo canal

Proposal for a Water Park
as an Event Space

Kamila BIELINSKA



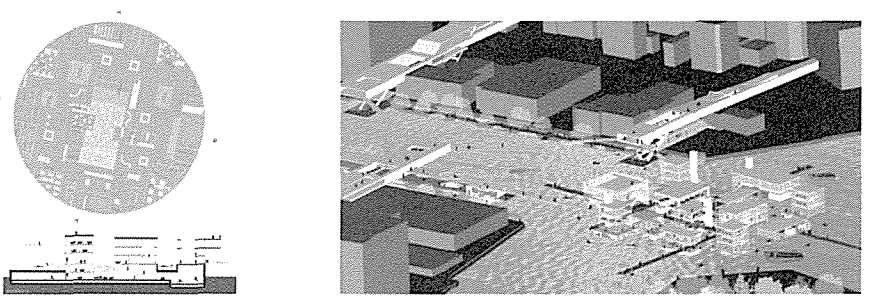
THE VIEW OF THE SHIBAURA CANAL WITH DESIGNED WATER BOUNDARY



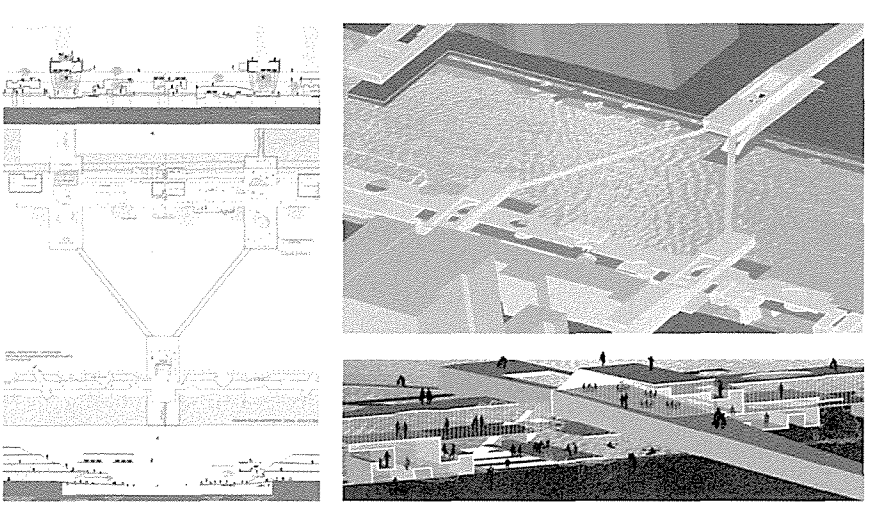
SHIBAURA CANAL WITH SURROUDING



COMMUNITY CENTER ON THE MEGURO RIVER



CANOE STATION AND EXHIBITION SPACES OF THE UNIVERSITY OF FISHERIES

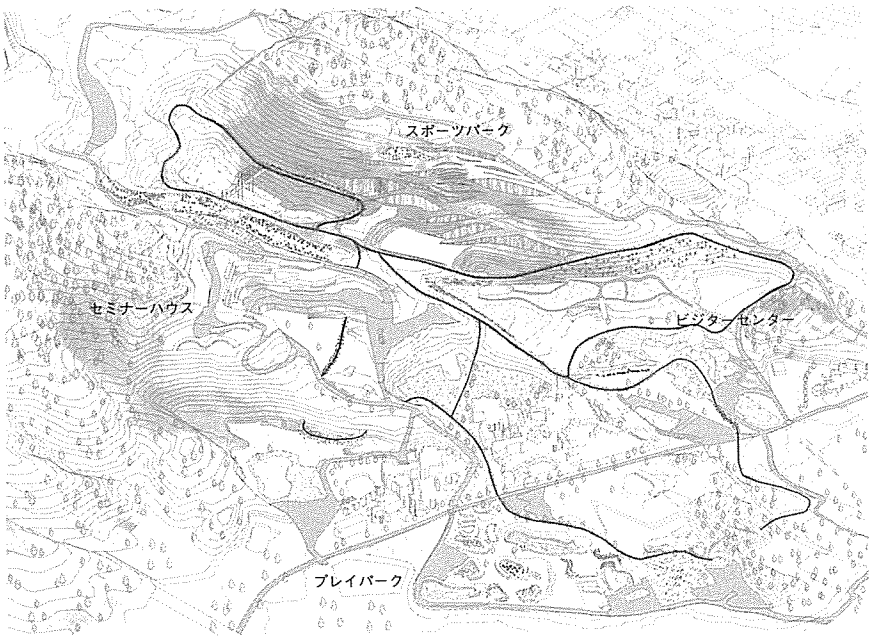


SYSTEM OF ELEVATED NODES AND DECKS CONNECTING BOTH SIDES OF THE COASTS

The purpose of the project was to reorganize water boundary in the Tokyo Bay. A new boundary is designed as a fluid transverse from the nature to the urban tissue, providing attractive spaces for rebirth of integrated local activities. The proposed Water Park gradually loses density from a large size city blocks layout, to a more scattered configuration of small volumes, spanned with a system of decks. The system is porosius and the observer can experience the phenomena and the water. Aditionaly designed zone provide space for several events, organized permanently and in particular times all over the year. This chain creates an active public space necessary for all kind of interaction between habitants and occasional tourists. It connects existing city attractions in one network, giving continuous experience while crossing the canal. Also a proposal to use water network for the local transport in pick up and drop system plays an important role in enriching the typology of aquatic architecture. The proposed waterfront treatment is conceived as a prototype to regenerate active recreational zones and tiding lives on the both sides. The upgrade of the waterside condition gives possibility to regenerate Tokyo Canal in a sustainable way.

ランドフォーム・パーク
Landform Park

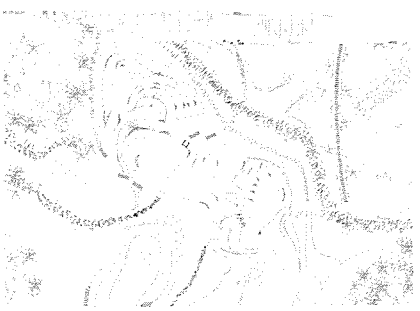
福田久展
Hisanobu FUKUDA



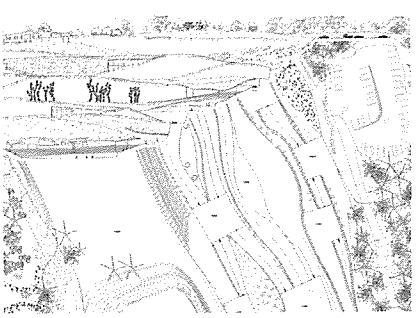
全体俯瞰図

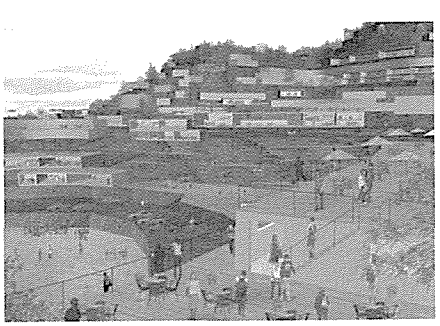
地形の起伏がある場所では、急勾配の斜面に沿った円形劇場や、蛇行する緩斜面を段状に造成した棚田などにみられるように、地形との関わりのなかで活動の場が形成されている。そこでは勾配、スケール、形状の変化といった斜面の形状に応じて地表面が造成されたり建物と組み合わされることで、自然環境と一体となった領域が形成されている。このような領域には、従来の敷地造成と建物とによって分節された領域形成とは異なる、連続的な環境の中に様々な活動の場を有機的に配置する可能性があるものと考えられる。本計画ではケーススタディとして複雑な地形がみられる岐阜県大垣市の採石場跡地を対象に、地形を建築化することにより、多様な活動の場を形成する環境公園としての「ランドフォーム・パーク」の計画を提案する。全体計画は公園の導入部としてのビジターセンター、斜面を利用する活動を主としたスポーツパーク、アスレチックや広場が連続して広がるプレイパーク、長期滞在者にとって園内の拠点施設となすセミナーハウスからなり、それらを採石に利用されていた道を再利用したサイクリングロード、車道が結ぶ。

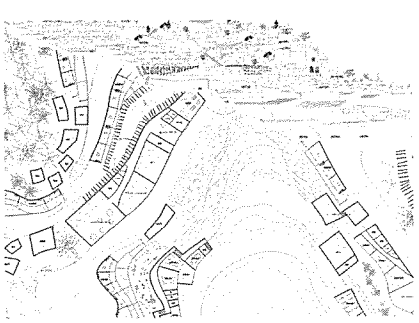

ビジターセンター・パース


平面図

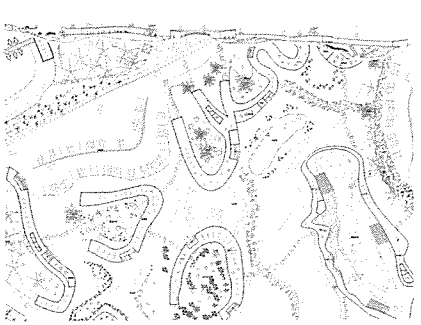

スポーツパーク・パース


平面図


セミナーハウス・パース


平面図

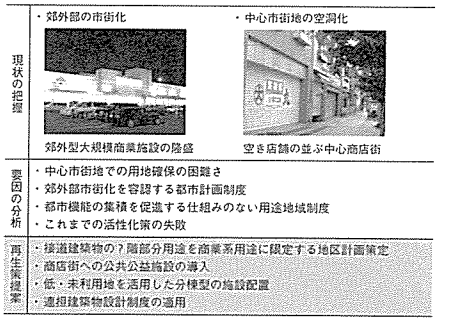

プレイパーク・パース


平面図

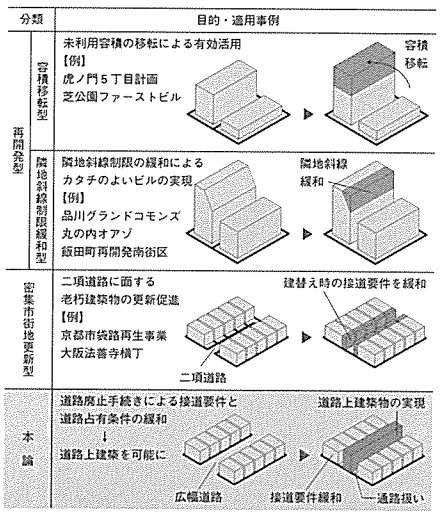
商店街と地域施設の複合化による中心市街地再生の可能性

Potential for vibrant city centre by integrating shopping street with district facilities

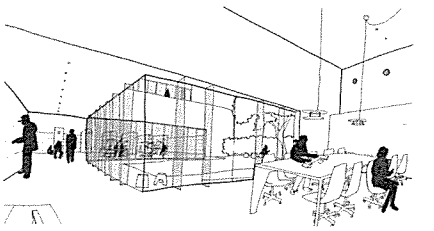
村阪尚徳
Naonori MURASAKA



本論の展開



連担建築物設計制度の既存適用事例の分類と本論で提案する新たな適用手法



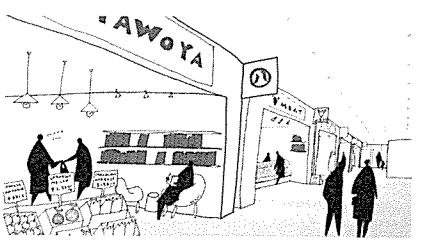
空き店舗を活用した閲覧室

空き店舗についても改修を行い、施設の一部として活用する。権利者との合意が得られた部分から順次整備可能であるため、迅速な整備が可能となる。



コア部分から南側を望む

商店街出口となる５ヶ所には、貸出・検索・BDSなどの基本的機能を備えたコアを設けることにより、施設管理上やセキュリティ上の問題を解決する。



内観パース

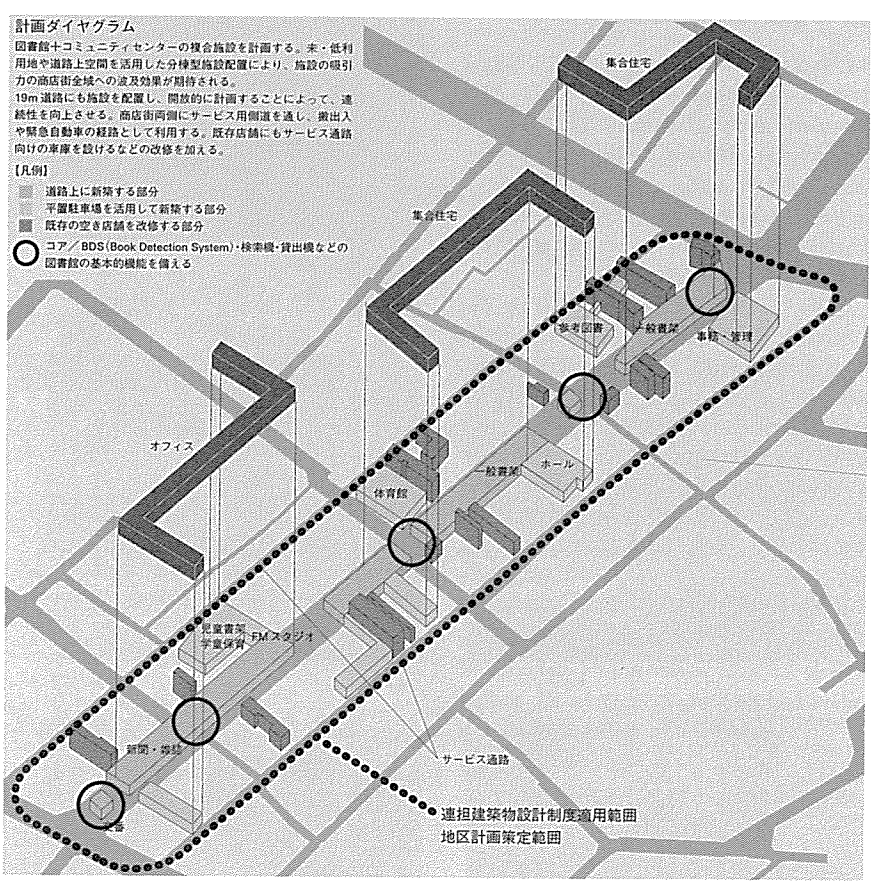
既存店舗にも資料を配架し、待ち時間や買い物途中に立ち寄れるように計画することによって、店舗と消費者との接触機会を増やし、売上の増加を狙う。

近年、特に地方都市において、中心市街地の空洞化が大きな問題となっており、その再生は喫緊の課題となっている。この問題に対しては、既に各種の取り組みがなされているものの、必ずしも有効に作用しているとは言えず、新たな再生策の提案が期待されている。

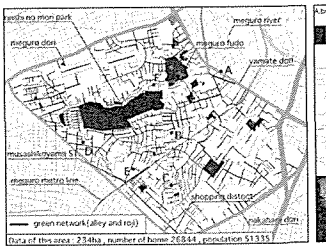
本論では、中心市街地の主要部分を占める商店街再生のために、地方自治体の立場から、建築・都市計画的手法による新たな再生策の提案を行った。

商業施設にとっては集積による相乗効果を生み出すことが主要な課題となってくる。この課題の解決のため、連担建築物設計制度を既存事例とは異なる目的で適用し、平置駐車場などの低・未利用地および道路上を活用して、商店街に分棟型地域施設を複合させることを提案した。また既存の店舗についても、新たに計画する建築物との一体化を目的として改修を加え、商店街の集積性を担保する計画とした。

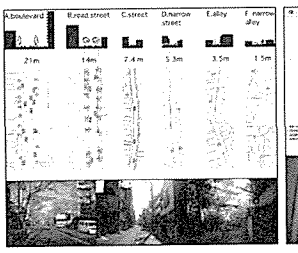
本論で提案した再生策は、必ずしも全ての地方都市に即適用可能という普遍性、一般性を有するものではないが、今後の地方都市中心市街地再生への応用の可能性を示唆するものであると考える。



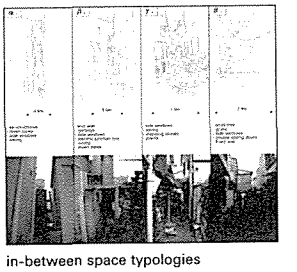
短手方向断面図



green network in Musashikoyama

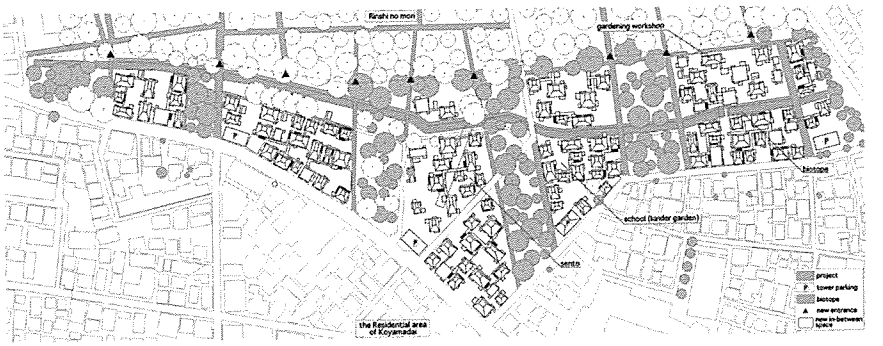


street typologies


in-between space typologies

Rinshi no mori experimental housing project

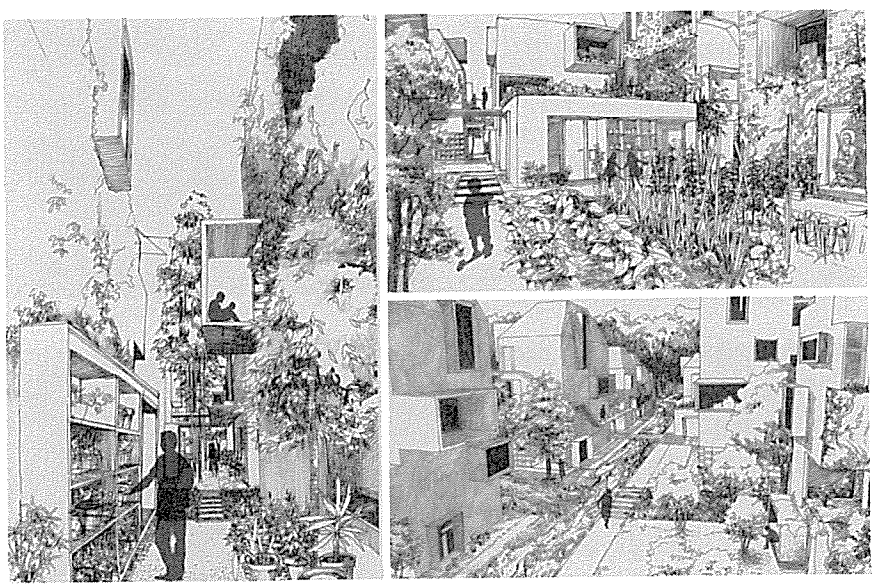
Simon MORVILLE

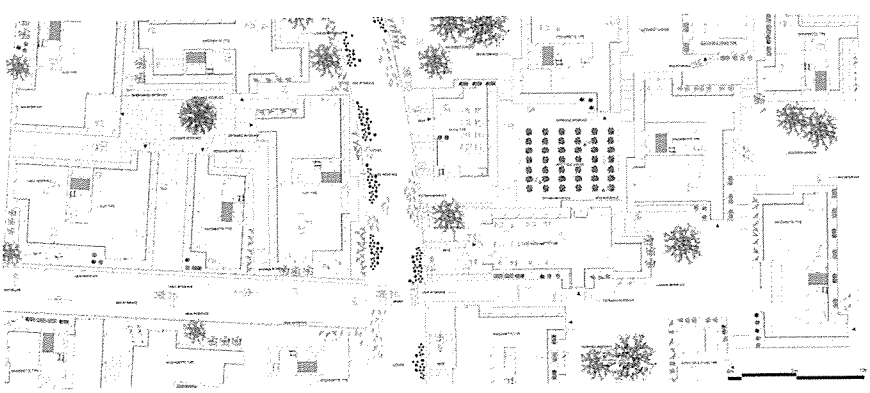


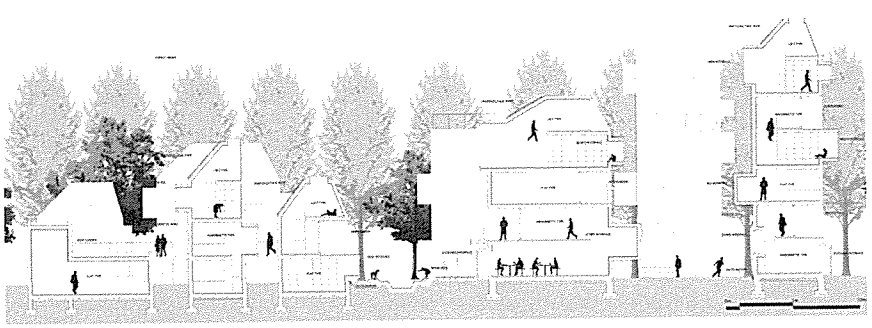
site plan

The research of the urban texture of Musashi-Koyama reveals a residential layout composed of small streets and wooden houses through three kinds of typologies. Showing the articulation between each scale, they each qualify as a spatial layer-streets, in-between spaces, and interfaces-which define the vernacular character of the neighborhood.

The housing project inspired by the research proposes an emerging urban space, situated between the urban texture of Koyamadai 2 chome and the park of Rinshi no mori. It consists of detached apartment houses to relocate the 300 actual inhabitants, but also of local facilities enhancing the community lifestyle, such as a sento. In order to preserve the memory of the site, the forest and the city interpenetrate each other upon traces of the previous condition. The layout of houses generates a network of alleys and gardens, as "interfaces", grafted to the volumes, model the in-between spaces, blurring the inside and outside, as well as domestic and private boundaries.


perspective


plan detail


section detail

アーバン・パス・パーク

小田急線路跡地計画

URBAN PASS PARK

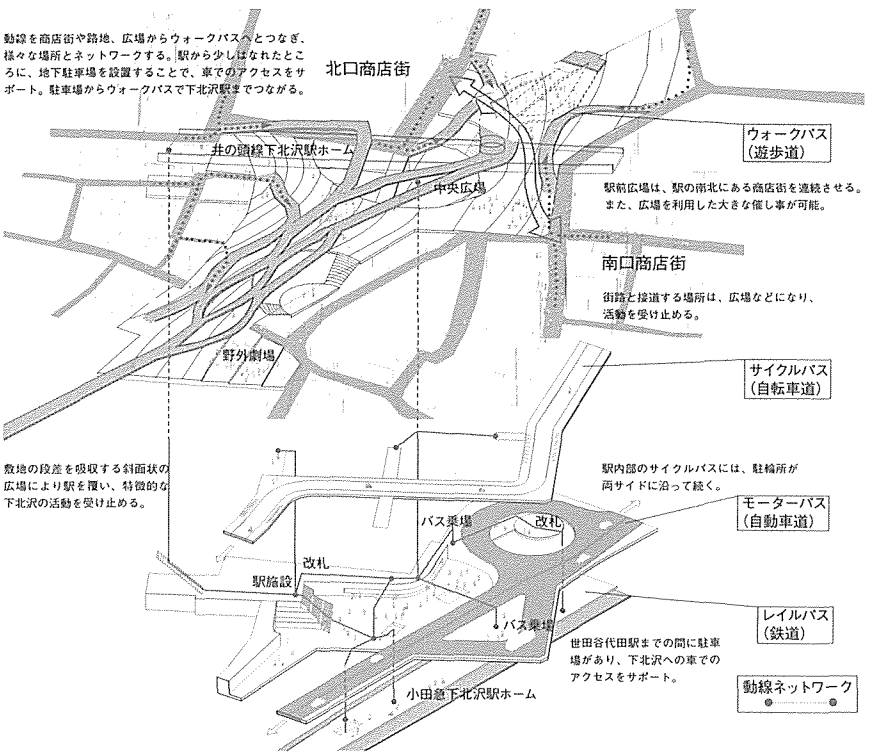
project for the old site of odakyu railroad

山中悠嗣
Yuji YAMANAKA

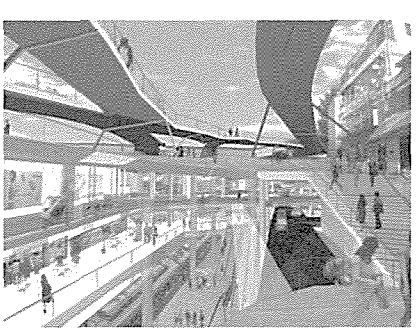
都市部では、交通の円滑化をはかるために踏切道を解消する線路連続立体交差事業や都市計画道路などの整備事業が進められている。これらが同時に進行している下北沢周辺では、既存市街地を分断するように計画されている都市計画道路によって、下北沢特有の町のスケールや界隈性といった都市構造が破壊されることが問題となっている。そこで本計画では、線路跡地を利用し、鉄道や道路、遊歩道などが線状の都市公園と複合した「アーバン・パス・パーク」を提案する。線路地下化工事の過程でつくられる掘割空間を残し、そこに鉄道に加え遊歩道、自転車道、自動車道、といった交通インフラを立体的に輻輳させ、計画地周辺を活性化する複合交通を線路跡地に整備する。さらにそこを線状の都市公園とすることによって地域を連続させる。そうすることで、人々のレクリエーションや文化的活動の場となるオープンスペースを提供し、既存の地域の界隈性を拡張することが可能である。本計画はこのように、過密化した都市において交通インフラを整備すると同時に、そこに人々の活動の場を形成しうる再編の手法として、有効であると考えられる。



俯瞰パース



下北沢駅周辺アイソメトリック



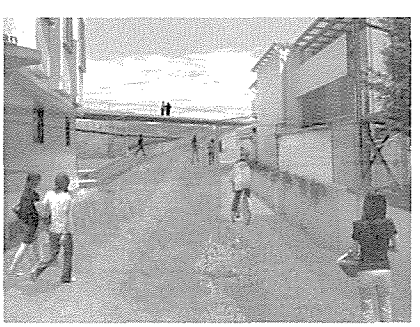
下北沢駅内観



下北沢駅野外劇場



世田谷代田周辺ウォークパスより



世田谷代田・下北沢間ウォークパスへのアクセス

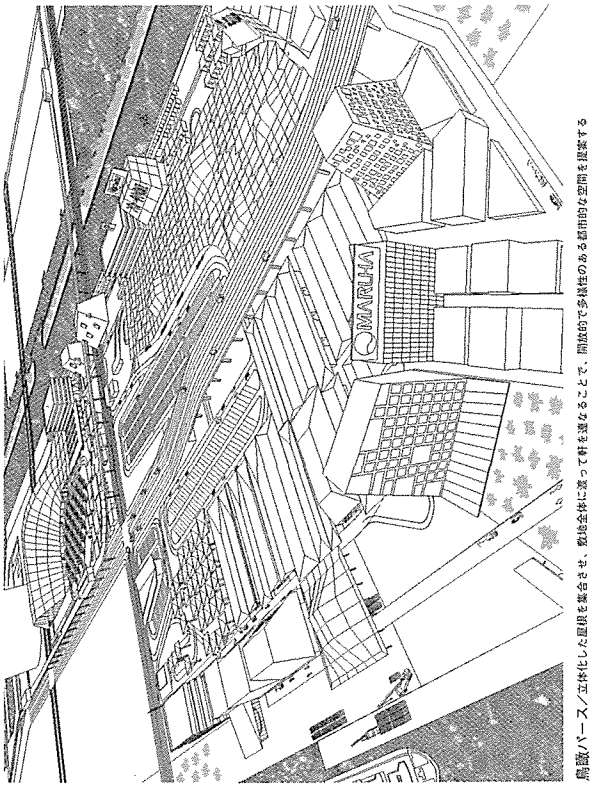
もうひとつの
豊洲中央卸売市場

都市の広場としての卸売市場の提案

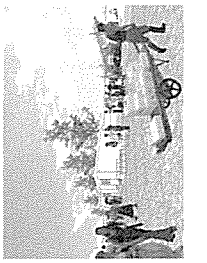
TOYOSU wholesale market
as urban plaza

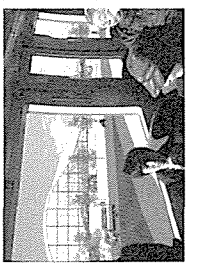
吉田拓也
Takuya YOSHIDA

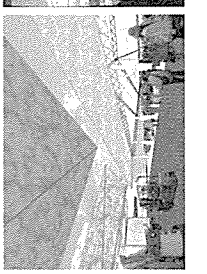
市場はかつて都市の中心部に立地し、生活を支える公共的な空間であったが、物流量の増加に伴う専門化や集約化、規模の増大から周縁部へ移転する傾向にある。築地市場もまた老朽化や狭隘化により豊洲地区へ移転が決定し、生活の場に近い市場が見られなくなることが懸念される。一方、市場の空間は、時間帯による利用形態の変化、物流量や物流方法の変化を受け入れる余剰性や可変性を備え、また観光や地産地消の場として人々を集め、繋ぐ役割に長けていることから、活気ある公共空間としての潜在的な可能性を持つと考えられる。しかし都による計画案では、ボリュームが敷地中央に配され、外周を搬出入動線が包囲し、水際は緑地の緩衝帯とされており、境界は強く閉ざされ完結的になっている。そこで本計画では、敷地に係る交通を整理することで敷地内を巡回しかつ水際に展開する歩行者動線を確保し、また、様々な屋根を用途や求められる性能、環境の違いに対応させながら敷地全体に連ねることで開放的で多様性のある都市の広場としての市場の空間を提案している。

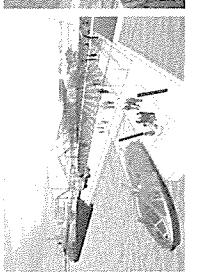


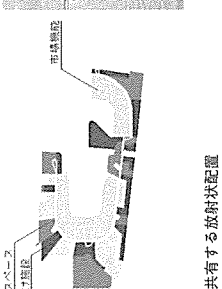
鳥瞰パース／立体化した屋根を集合させ、敷地全体に渡って軒を連なることで、開放的で多様性のある都市的な空間を提案する


小売市場：小売市場に専用の桟橋を設け、東京湾で獲れる魚介類を扱い、地産地消を促す

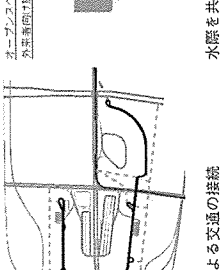

ゆりかもめ：ゆりかもめは敷地中央を通し、乗客は市場の建物に囲まれる体験をする


桟橋大空間：市場部によって使われない時間帯には広場と一体に使われる

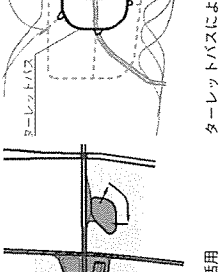

水産部桟橋：臨海オープンスペースには水産部の桟橋と水上バスの駅、ホテルが隣接する



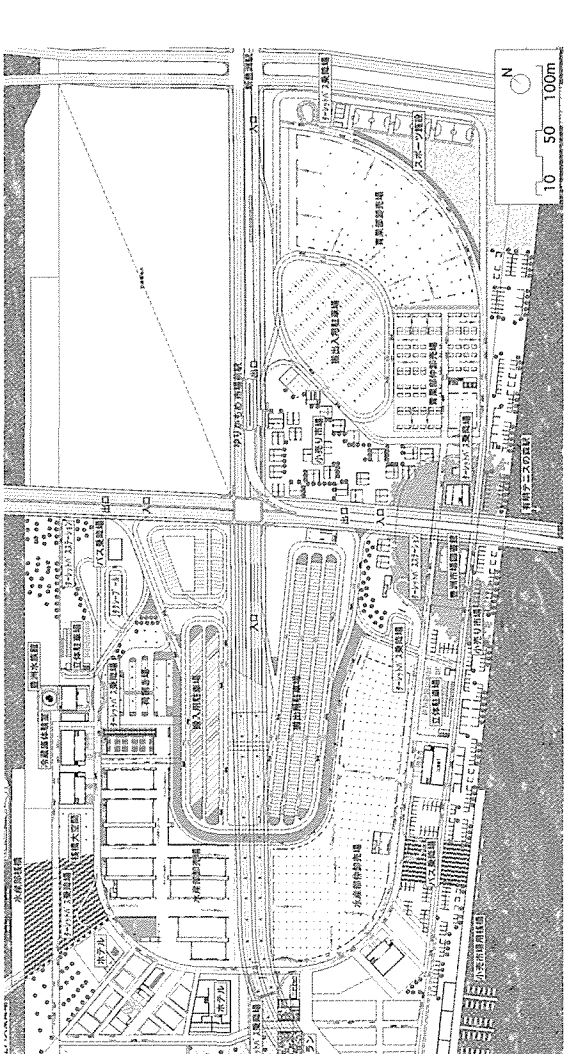
水際を共有する放射状配置
外来者向け機能と市場の付属施設が相互に噛み合う放射状の配置とし、外来者と市場関係者の双方が集まる場所をつくる



ターレットバスによる交通の接続
歩行者空間の拡大に対しては、ターレットを転用した巡回バスを運行し、これにより敷地に係る交通の拠点を繋ぐ



搬出入動線の集約と水際の活用
搬出入動線を敷地中央に集約することで、水際を含め敷地全体に連続する歩行者動線を確保する。


N
10
50
100m
入口
入口
入口
ホテル
ホテル
ホテル
ボーダーブリッジ
ボーダーブリッジ
ボーダーブリッジ

ライブラリウム

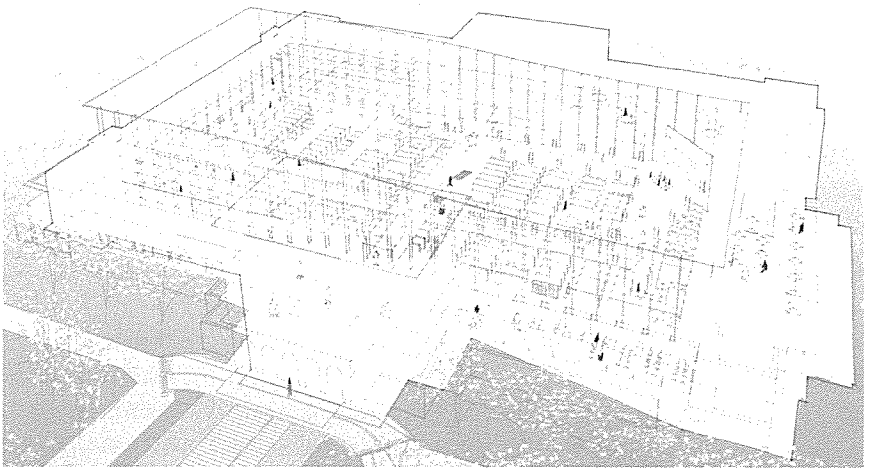
博物館機能を合わせ持つ滞在型図書館計画

LIBRARIUM

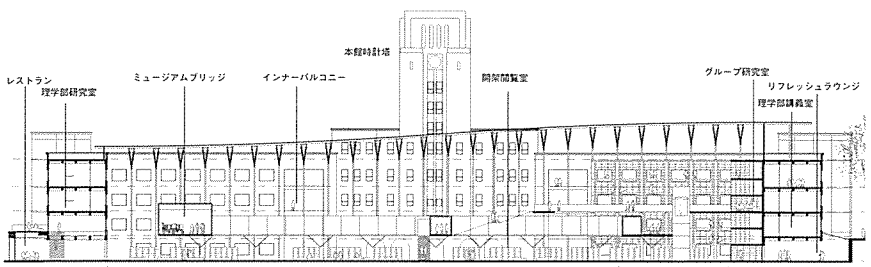
New Library for staying
with Tokyo Tech Museum

吉田智重
Tomoshige YOSHIDA

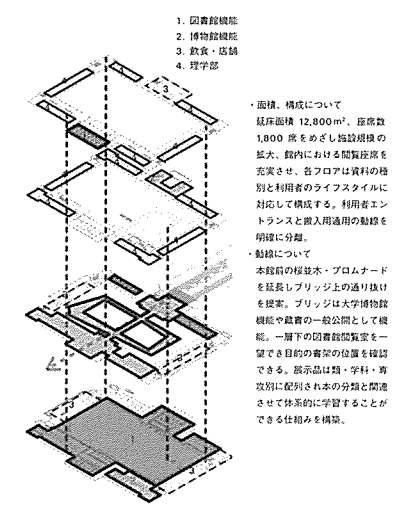
多くの利用者が、各々異なる目的を持って利用することのできる公共施設の一つに図書館が挙げられる。現代の図書館はコンピュータ活用の進展に伴い、その機能や意義が大きく変わりつつある建築タイプである。情報を提供する場としての空間構成、家具配置においてより一層の充実が期待されている。しかし建設から年数を経た図書館は、蔵書の拡大に伴い閲覧室の小さな貸出中心型が多いのが現状であり、館内空間と利用者の関係を捉え直している事例は少ない。本計画では、本学の本館を改修対象とし大岡山キャンパスにおける歴史的建造物の保存・再生の手法を示し、動線と一般公開を考慮した全体計画を行なった。中庭を内部化することで長時間滞在目的の新しい空間構成を有した図書館を提案した。また「通り抜けブリッジ」を設け東工大博物館機能を挿入し複合化することで、活性化された情報交換の場を創り出した。このように歴史的建造物の保存・再生、滞在環境を考慮した座席、家具配置や空間構成、長時間の開館をめざした管理方法により研究目的のみならず学生や教員や訪問者が豊かな時間を過ごすことのできる空間を有する新しい図書館を提案した。



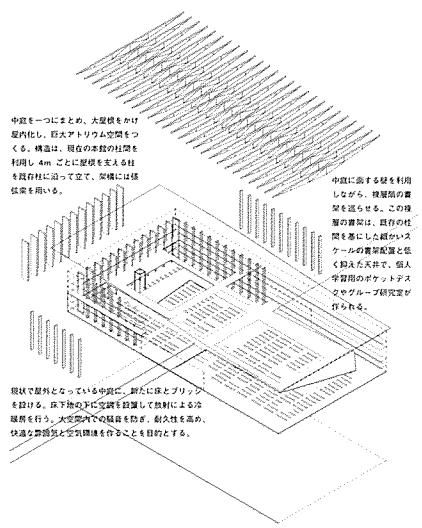
外観パース



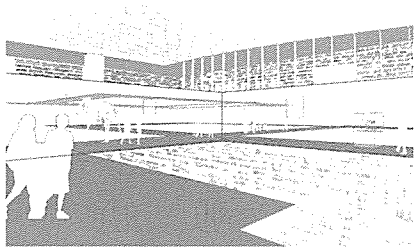
断面図



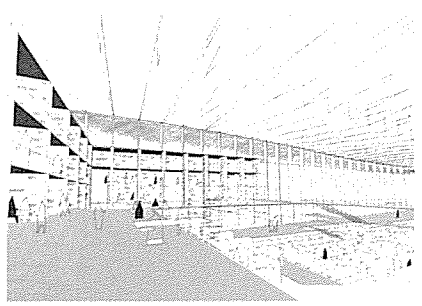
全体構成図



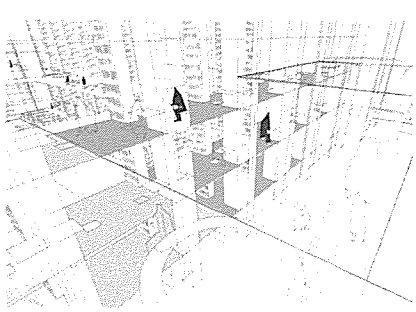
改修方法



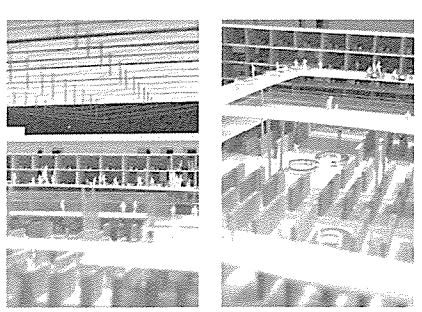
内観パース　ブリッジより



内観パース　積層書架より



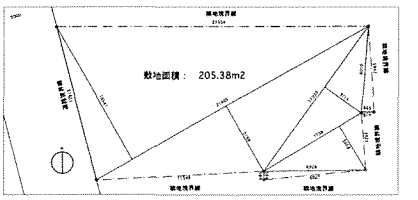
内観パース　ラウンジより



模型写真

建築設計製図　第一
Sophomore Studio Work: Spring Semester

木造戸建住宅
Detached Houses



敷地図

担当：
藤岡洋保［教授］、宮本文人［助教授］、塚本由晴［助教授］
Hiroyasu FUJIOKA (Professor), Fumihito MIYAMOTO (Associate Professor), Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor)

山崎鯛介［助手］、吉村英孝［補佐員］、
藤村龍至［D4, TA］、ホルヘ・アルマサン・カバジェロ［D3, TA］
Taisuke YAMAZAKI (Assistant Professor), Hidetaka YOSHIMURA (Assistant), Ryuji FUJIMURA (D4,Teaching Assistant), Jorge Almzan Caballero (D3, Teaching Assistant)

職名、学年は担当時のもの(以下同様)。
以下は、授業の内容を山崎[助教]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。

設計製図第一では、建物の構成を具体的に把握させるため、以下の演習課題を与えた後、右のテーマで住宅の設計を行った。

1.トレース課題
1-1：立体最小限住居（池辺陽、1950年）、鉛筆描き
1-2：軽井沢の山荘（1962年、吉村順三）、インキング
1-3：同前、透視図（着彩）

2.リサーチ課題：世界の近代住宅作品の空間構成の調査
昨年度に同じ（ka 30参照）

3.住宅設計課題「大きな家」
課題趣旨および設計条件は右の通り

［課題趣旨］
東京近郊の住宅地の一角に、カフェ付きの3世代住居を計画する。
・家族構成は若夫婦＋小学生1人＋おばあさんの4人
・おばあさんは庭木を愛しており、できるだけ庭が欲しい
・夫は車と自転車が趣味で、整備するスペースが欲しい
・妻はアクセサリーづくりが趣味。住宅の一部にショップが欲しい
・テナントとしてカフェ（100m²程度）を持つ

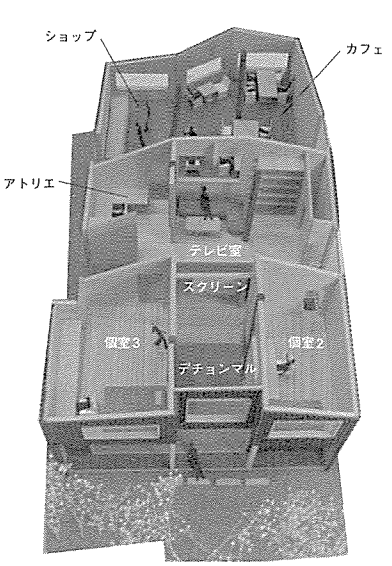
［設計条件］
敷地面積：205.38m²　用途地域：近隣商業地域(建蔽率80%、容積率300%)
高度地区：第3種高度地区　防火地域：防火地域　構造形式：木造2階建て
※延床面積は課題趣旨を考慮し、できるだけ大きく確保すること

［総評］
課題は大岡山駅近くの住宅地にカフェを併設した二世帯住宅を設計するというものである。敷地は長方形で短辺を道路に接する。カフェと道路の関係、庭や駐車場の配置、二世帯の関係性をどう取るのか、などが設計のポイントとなった。韓国の住宅の伝統的形式である「デチョンマル」を取り入れた作品や、道路から階段状に連続していく作品などがみられた。

The purpose of this assignment was to explore and learn what an actual building should be (whether a combination of building elements, a structural system, or whatever else). Following several practice sessions (tracing the drawings of two legendary houses built in the 1950s-60s), the project got underway to design a detached house for a family with café.

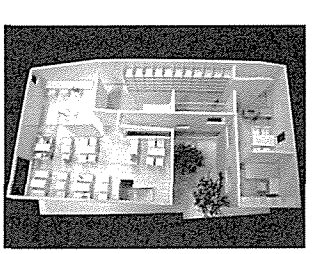
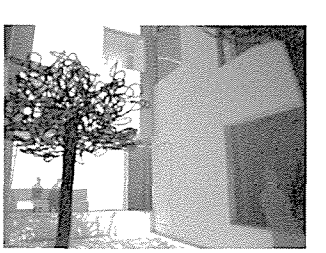
優秀作品

デチョンマルが見える家
House with Daechung-Maru (Wooden Floor)
キム・ヒョンス　HyunSoo KIM

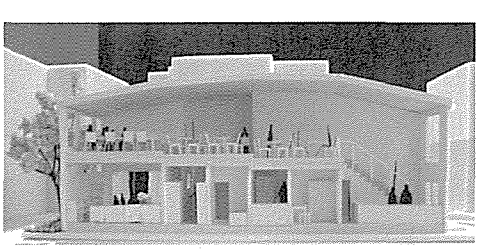


模型写真

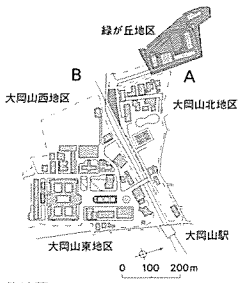
reflection
坂根みなほ　Minaho SAKANE



模型写真

double
阿部沙佳　Sayaka ABE


模型写真

建築設計製図　第二／第1課題
Sophomore Studio Work: Autumn Semester



敷地図

「ふだんの居場所を考える」
"Design a Daily Use Space"

担当：
藍澤宏［教授］、青木義次［教授］、
藤井晴行［助教授］、大佛俊泰［助教授］
Hiroshi AIZAWA (Professor), Yoshitsugu AOKI (Professor),
Haruyuki FUJII (Associate Professor), Toshihiro OSARAGI (Associate Professor)

菅原麻衣子［助手］、飯塚裕介［助手］、池谷友宏［M1, TA］、
島田 廉［M1, TA］、山田将史［M1, TA］、吉見周平［M1, TA］
Maiko SUGAWARA (Assistant Professor), Yusuke MESHITSUKA (Assistant Professor),
Tomohiro IKETANI (M1, Teaching Assistant), Ren SHIMADA (M1, Teaching Assistant),
Masashi YAMADA (M1, Teaching Assistant), Shuhei YOSHIMI (M1, Teaching Assistant)

講評会：奥山信一［助教授］
Shin-ichi OKUYAMA (Associate Professor)

以下は、授業の内容を飯塚[助教]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。

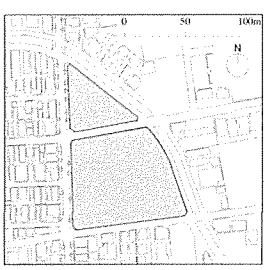
本課題は大岡山キャンパス内に学生のためのふだんの居場所を計画するものである。主に建築系の学生の行動圏域においてA・Bの2エリアを設定し、その中で学生自身が2,000 m²程度の敷地を決定することとした。敷地の魅力やおもしろさを読み取り、また自分たちの居場所となる独創的な空間の提案を求めた。

課題を進めるにあたり、前半はグループディスカッションを行なった。2つのエリアについての分析、ふだんの居場所に必要とされる機能、その機能をどのような敷地において建築空間として展開できるかについて議論した。

後半は、グループごとに選んだ敷地において各自の設計を進めた。他のグループの学生からの意見も取り入れるよう、コンセプトの発表会、中間講評会の後には全員が感想を書き、掲示を行った。

This assignment required small groups of students to design a daily-use space for the O-okayama campus. First, each group analyzed the location and discussed the necessities and functionality of two areas. After a brainstorming session, the students then drew up individual plans which expanded on the group concepts.

建築設計製図　第二／第2課題
Sophomore Studio Work: Autumn Semester



計画地

「都市と住居」
"City and Housing"

担当：
青木義次［教授］、奥山信一［助教授］、藤井晴行［助教授］
Yoshitsugu AOKI (Professor), Shin-ichi OKUYAMA (Associate Professor),
Haruyuki FUJII (Associate Professor)

飯塚裕介［助手］、菅原麻衣子［助手］、池谷友宏［M1, TA］、
島田 廉［M1, TA］、山田将史［M1, TA］、吉見周平［M1, TA］
Yusuke MESHITSUKA (Assistant Professor), Maiko SUGAWARA (Assistant Professor),
Tomohiro IKETANI (M1, Teaching Assistant), Ren SHIMADA (M1, Teaching Assistant),
Masashi YAMADA (M1, Teaching Assistant), Shuhei YOSHIMI (M1, Teaching Assistant)

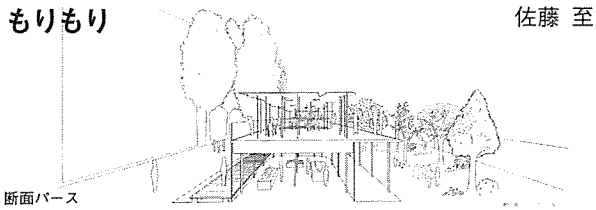
講評会：藍澤宏［教授］、大佛俊泰［助教授］
Hiroshi AIZAWA (Professor), Toshihiro OSARAGI (Associate Professor)

以下は、授業の内容を飯塚[助教]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。

本課題は商業・公共施設と複合した集合住宅を設計するものである。6-7人のグループに約8,000 m²の計画地を与え、常にディスカッションを行いながら、コンセプトの設定、敷地の割振りと各自の設計を進めることとした。他人の設計する外部空間や開口部などとの関係について考慮し意見を交わすなかで、各自の敷地の中だけを考えた場合では得られない設計案を発見することがこの進め方をとったねらいである。本年度は世田谷区の深沢を計画地として想定した。計画地は幹線道路から400m程離れた比較的静かな住宅地である。東側は桜が植えられた緑道に面し、地域住民の散歩に利用されている。西側沿いの道路と計画地を横切る道路の西側は、主に日用品を扱う店舗が小規模であるが並んでいる。このように異なる東西の特性との関係を考慮しながら、グループのコンセプトをどのように具体化していくかがディスカッションの主なテーマとなった。他のグループの学生からの意見も取り入れるよう、コンセプトの発表会、中間講評会の後には全員が感想を書き、掲示を行った。コンセプトを表現するために、全体配置図、立面図の他にも独自のユニークな表現方法が試みられた。

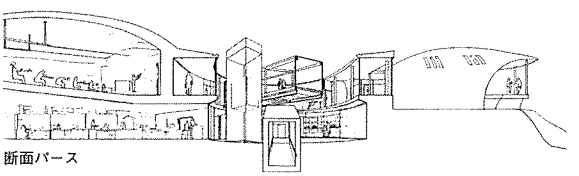
This assignment specified the design of an urban housing complex to be produced by groups of students. Eastern and Western sides of the site are different, and most groups concentrated topic of discussion on how to concrete their concept considering relation to these characteristics.

もりもり　佐藤 至



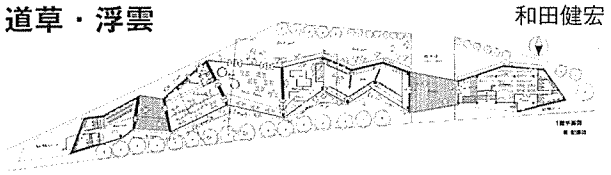
断面パース

RAG　重田 淳



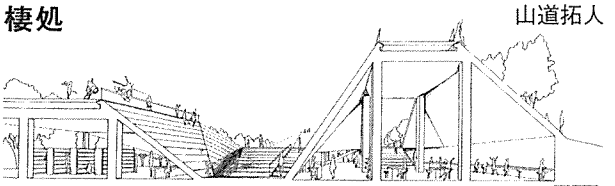
断面パース

道草・浮雲　和田健宏



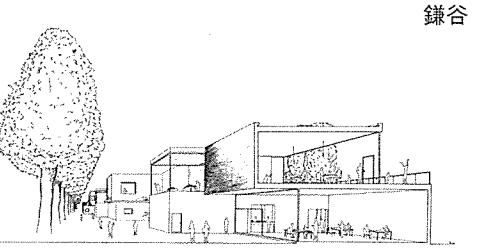
1 階平面図兼配置図

棲処　山道拓人



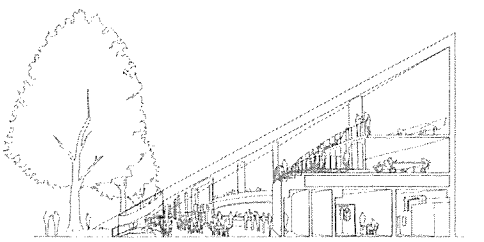
断面パース

moiré　鎌谷 潤



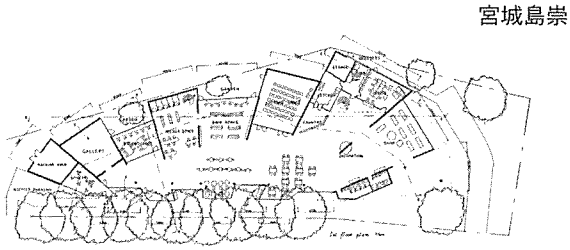
断面パース

TUBE-TAMARIBA　山上卓人



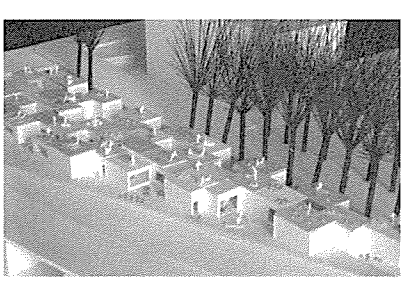
断面パース

凹　宮城島崇人



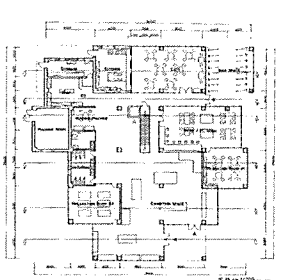
1 階平面図

mosaic　坂根みなほ



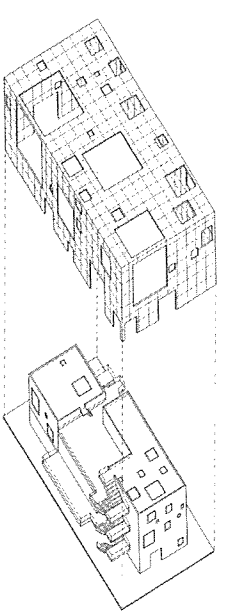
模型写真

2-step　周 友昊



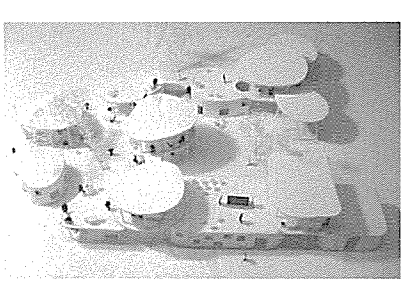
1 階平面図

切り取られた空　杉原慎一朗



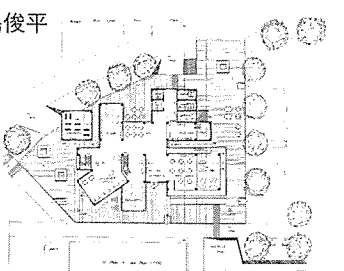
アクソメ図

滲　沼野井諭



模型写真

道とすきまをつなぐ場所
似鳥俊平



1 階平面図兼配置図

みちとの遭遇

B グループ／柿沼慶文、香月 歩、蕪木美穂
鎌谷 潤、河合英徳、金 賢洙



みちと出会う。みちはある時は遊び場に、ある時は団欒の場に、映画館に、自己表現の場になる。それぞれのみちで人は思い思いの時を過ごす。そこでは日々新たな出会いがあり、発見がある。人はみちに住まい、みちは人をつなげる。

Tech ↗ Tech ↘

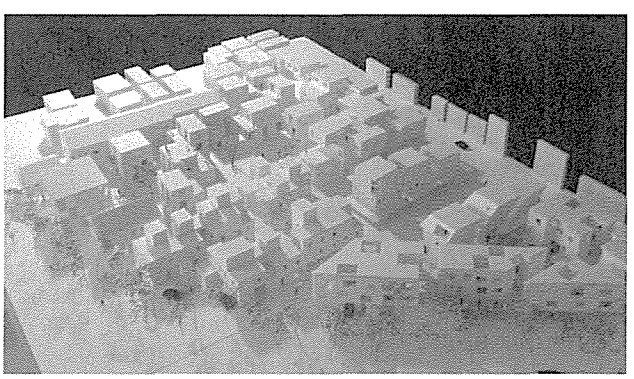
F グループ／手島菜奈絵、得地信一、中村 悠
西田恵理、西村光平、似鳥俊平



外部から並木道を取り込み、そこにレベル差をつけ、集合住宅というプライベートな空間にパブリックな空間としての広場をとりいれた。それにより、そこに住む人と外部がゆるやかにとけこむ集合住宅の空間がうまれることを期待した。

パッチワーク

G グループ／沼野井 諭、野々山昌峰、馬場勇輝、松原啓祐、
丸子勇人、三橋由弥子



敷地境界や街路によって仕切られた東京の住宅街。仕切られた要素が『パッチワーク』することで住宅街はいきいきとし、都市に住むことが楽しくなるのではという提案である。

ひとつながり

H グループ／宮城島崇人、山上卓人、山本祥太
山本洋介、吉本憲生、和田健宏



集合住宅における多様性とは外部との関連性であると考えた。外部との関わり方は様々に考えられるが、それが個ではなくある程度の集合でなされることにより、一つの特殊解も環境として成立する可能性を持っている。それぞれが外部のことを考えた結果、それが寄せ合わさった場所はさらにおもしろい場所となった。

建築設計製図　第三／第1課題
Third-year Studio Work: Spring Semester

表参道の交差点に建つ都市型複合美術館
Urban Museum Complex at Omotesando

出題者：安田幸一［助教授］
Koichi YASUDA (Associate Professor)
構造計画指導：金箱温春［非常勤講師、金箱構造設計事務所］
Yoshiharu KANEBAKO (Guest Professor, Kanebako Structual Engineers)

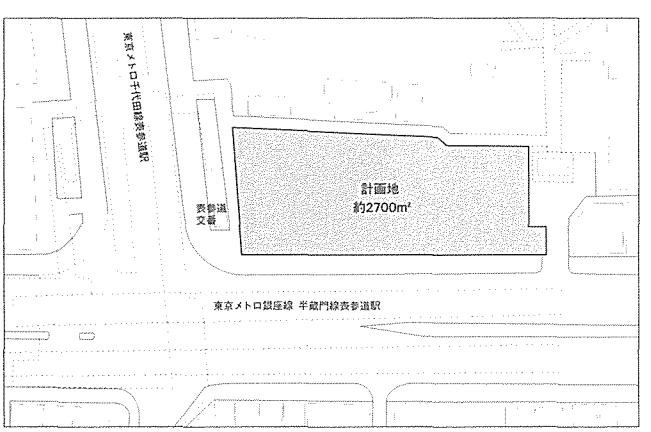
八木幸二［教授］
Koji YAGI (Professor)

是永美樹［助手］、
柴田晃宏［D1, RA］、片淵和啓［M2, TA］、
新保佳恵［M2, TA］、田中真紗美［M2, TA］
Miki KORENAGA (Assistant Professor), Akihiro SHIBATA (D1, Research Assistant),
Kazutaka KATAFUCHI (M2, Teaching Assistant),
Yoshie SHINBO (M2, Teaching Assistant), Masami TANAKA (M2, Teaching Assistant)

ゲストクリティーク：
山口浩司［非常勤講師、岡部憲明アーキテクチャーネットワーク］
Hiroshi YAMAGUCHI (Guest Professor, Noriaki OKABE Architecture Network)
高橋 寛［建築家、ワークステーション］
Hiroshi TAKAHASHI (Architect, Workstation)
坂牛 卓［助教授、信州大学］
Taku SAKAUSHI (Associate Professor, Shinshu University)
奥山信一［助教授］
Shin-ichi OKUYAMA (Associate Professor)

以下は、2006年5月24日に行われた講評会の模様を、学生編集委員の木下皓之［M2］がレポートしたものであり、文責は編集部にあります（敬称略）。

［課題内容］
表参道は、日本のみならず、世界へ向けた最先端ファッションを代表とする文化の情報発信地である。その表参道と青山通りの交差点にふさわしい展示と商業施設等の複合するプログラムを各自設定し、都市型複合美術館を設計する。敷地横には地下鉄表参道駅が近接しており、地下からの自然な動線を誘導すると同時に、地上と地下を積極的に接続する仕掛けとしての役割も期待する。また、現在敷地には、屋上看板のある中小規模のビルが建ち並び、東京の典型的な都市景観の一つを形成しているといえる。人も車も大量に交錯する結節点である表参道の交差点として、街づくりの視点から人の流れや溜りを考慮した好ましい都市環境を提案する。



敷地図

［課題条件］
下記、施設機能を含み、その他の機能は各自が自由に設定する。
1. 美術館（展示室・収蔵庫・搬入口・事務室・学芸員室・カフェ・ミュージアムショップ等）
2. 商業店舗（飲食・物販等）
3. 地下鉄表参道駅出口

［提出物］
設計概要、配置図1/500、各階平面図1/200、断面図2面以上1/100、立面図2面1/200、外観パース、内観パース、断面模型1台1/200

［敷地条件］
計画地：港区北青山3丁目
敷地面積：約2,700m²
述床面積：最大約16,200m²以内（法定容積率600%）
建築面積：約2,160m²以内（法定建坪率80%）
高さ制限：なし。
その他の条件：敷地内の高低差はないものとする。

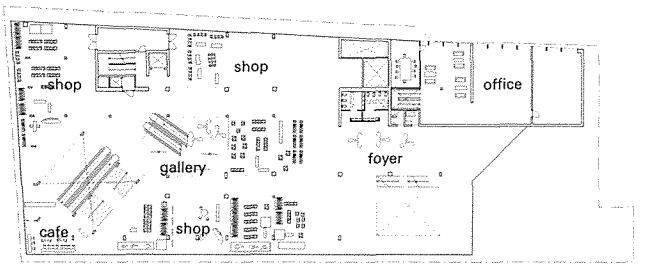
［総評］
安田　今回は図面でのコミュニケーションを覚えてほしいと思い、設計意図を図面にして相手に伝えるという、設計者として一番基本的なところを課題の隠れたテーマとしました。デザインする上でも、手を動かし、汗をかきながらデザインするのも重要だと思っていますので、毎年少し目標設定を高く設定して課題を考えています。次の課題でも手を動かすことを継続しながら、考えを表現することに力を発揮していただければと思います。課題に対しては、都市を読むことと美術館に対する提案をすること、この二つを要求していました。これを契機に、もっと積極的に街に出て、美術館も含めて、多くの建築を体験してほしいと思います。

The site is the one of the best in the commercial district of Omotesando facing the main intersection. Omotesando is the core zone in the forefront of Japan's fashion industry.The assignment was to design an urban museum complex including commercial facilities, favorable to the urban environment as a node of pedestrian and cars traffic. In addition, since the exit from the subway station lies adjacent to the site, it is vital to create a link and leading naturally from underground to ground level.

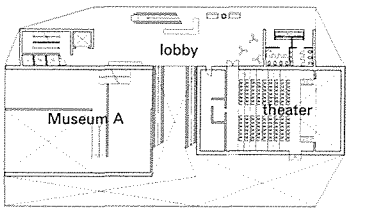

講評会風景

Omotesando Art 'Base'

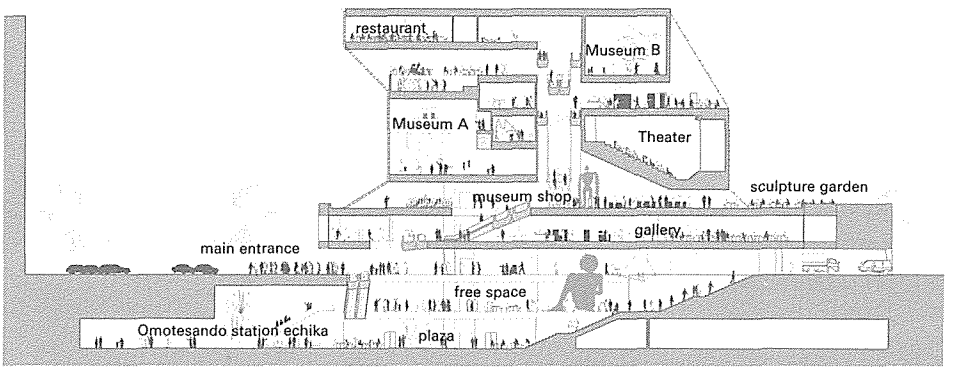
亀井 聡　Satoshi KAMEI



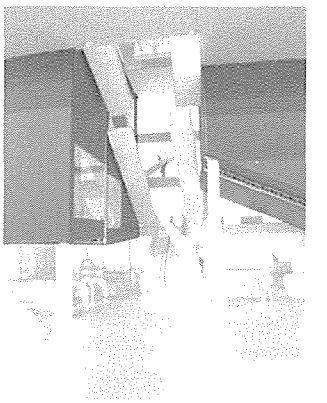
2階平面図



5階平面図



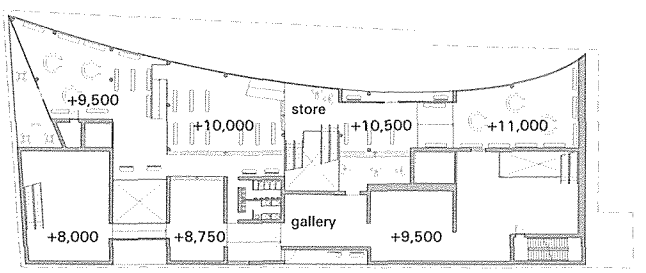
断面図



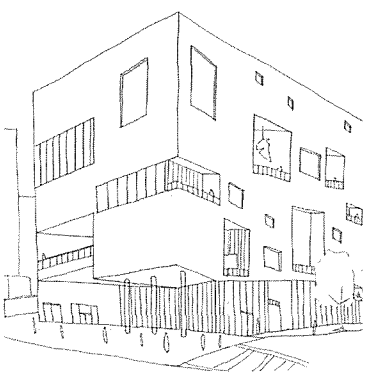
模型写真

Omotesando Crossing

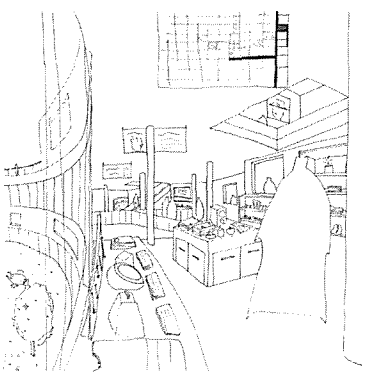
山本 茂　Shigeru YAMAMOTO



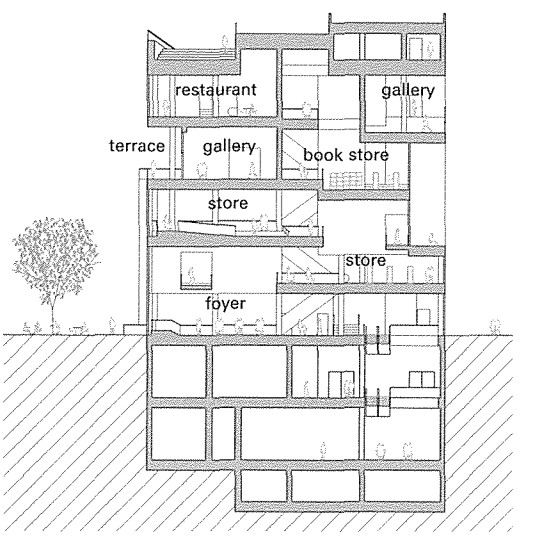
3階平面図



外観パース



内観パース



断面図

Omotesando Art 'Base'

亀井　表参道に建つ他の建物に負けないよう、美術館であることをアピールしながらシンボルになる建築を考えました。黒い箱の中に美術館やシアターを、その隙間にパブリックなスペースを配置し、偶然性を誘発する構成にしました。

高橋　ガラスは斜めに張らず、垂直に張った方がオリジナリティがでたんじゃない?

坂牛　黒い箱の余白が空間を作っている面白さが、一階までにじみ出てくるといい。エントランスが生きてない感じがする。

安田　ピロティみたいな引いていく空間が外部に合ってもよかったかも。周りとの対比としてつくってるんだから、周辺の模型も欲しかった。

金箱　構造がどのように成り立つかもう少し考えた方がいいですね。

Omotesando Crossing

山本　企画展示のみを扱う複合展示施設です。それぞれの階には、商業空間と展示空間をまたぐ場所を設け、動線のショートカットや、ショッピングへ向かう人の引き込みを作っています。

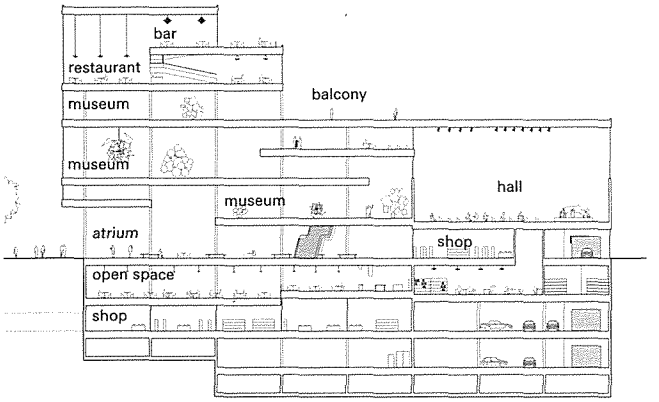
奥山　ちょっと元気が無い感じがするよね。良質なデザインだけど、何が起こるか伝わってこない。

高橋　骨格がはっきりしない。ファサードも寄せ集めだし、断面もなんかやってみましたっていう感じ。こういう構成にしなくてもいいと思えてしまう。

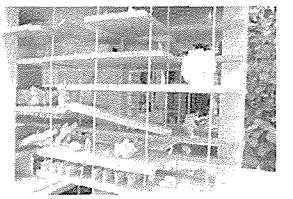
山口　もっとシンプルに、完全に抽象的にできていればそれも面白かったかもしれない。

Patchworks

小笹 泉　Izumi KOZASA

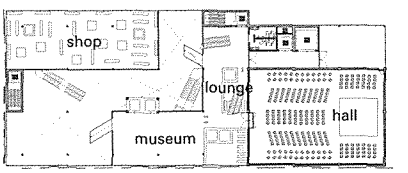


断面図





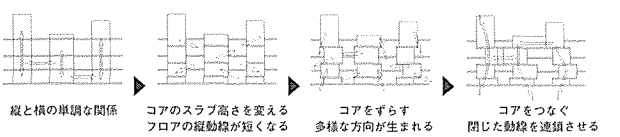
模型写真



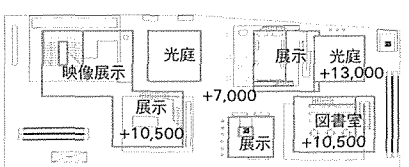
+6,000平面図

ARCHI-NATURE

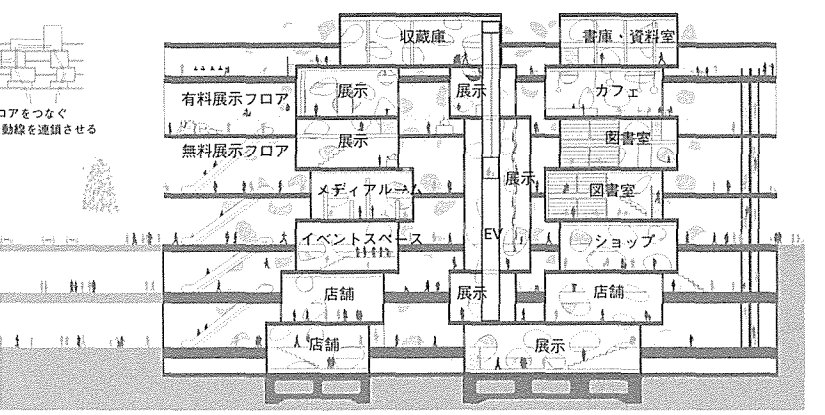
佐野博基　Hiroki SANO



ダイアグラム



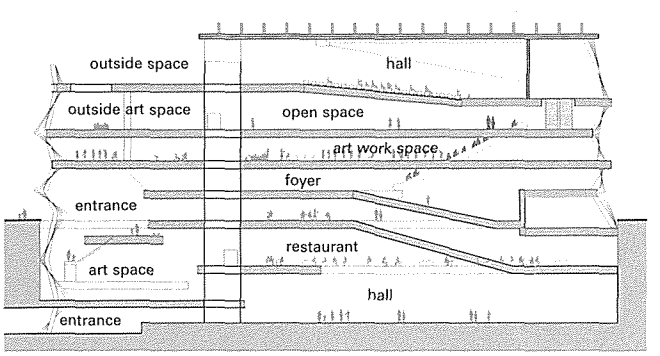
2階平面図



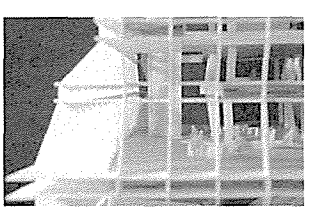
断面図

OMOtesAndO Meets Arts

芳本晃大朗　Kohtaro YOSHIMOTO

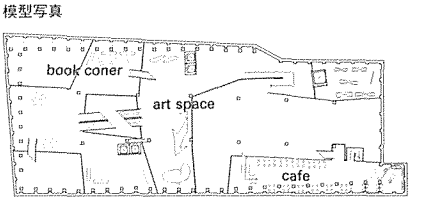


断面図





模型写真



-9,000平面図

Patchworks

小笹　ドミノシステムの発展系として、自由にスラブをかけ、異なる質を持った空間に活動を配しました。表参道における身体性回復のため、建物の中で自分の座標が認識でき、身体感覚が喚起されるこのシステムを取りました。

坂牛　高い所と窮屈な所の関係がもう少しクリアに見えてくると、身体性とドミノっていう話がもう少し分かりやすくなる気がする。

安田　新しいシステムを把握するときは、新しい空間に結びつけないと。「理屈」は大切にしながら空間を創ってほしい。

ARCHI-NATURE

佐野　美術館の非日常性を問題視して日常空間として設計しました。展示空間を他の機能と等価と捉え、互いに連鎖する建築を作りました。

奥山　もっと巧みな施設計画が欲しい。アイデアがあってもそれを成立させる仕掛けがないと。

金箱　相当特殊な架構となることがわかっていますか。平面か断面の一方向だけずらすという程度では、デザインにならないのでしょうか。

OMOtesAndO Meets Arts

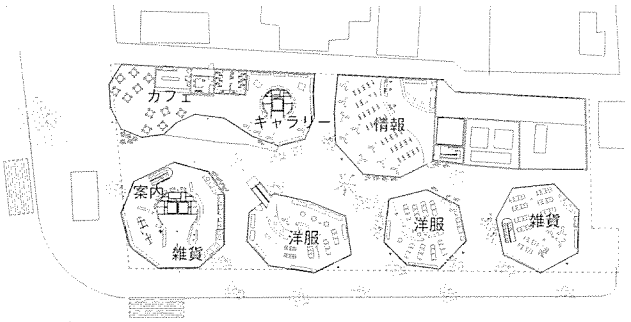
芳本　表参道に点在する小さなギャラリーを探すためのツールを持つ美術館です。角地と通りに分け、表面の凹凸で変化をつけました。

坂牛　形の面白い構造だと思うのですけが、外部のねじれをもうすこし内部に生かしたい。

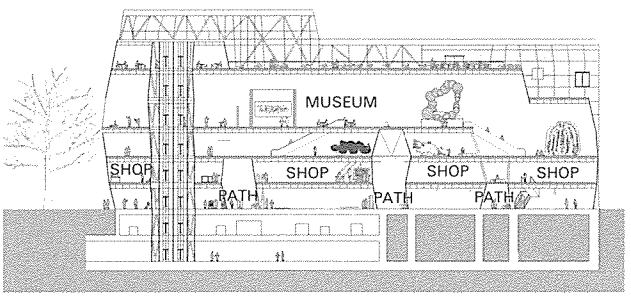
安田　鳥かごみたいな中に、全く別構造のスラブが浮いてる方法もあったかもしれませんね。

Tokyo Media Forest

穴水博道　Hiromichi ANAMIZU



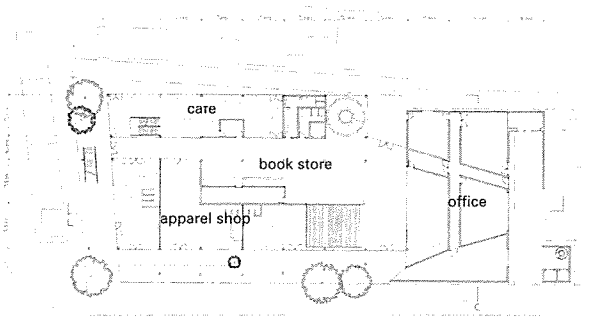
1階平面図



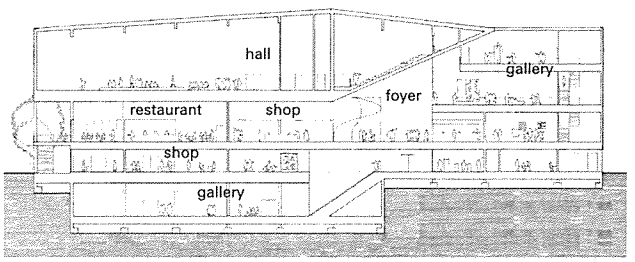
断面図

Omotesando MODE Museum

宮田多門　Tamon MIYATA



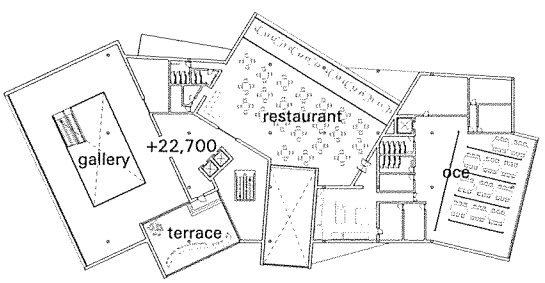
1階平面図



断面図

Directions

斎藤啓佑　Keisuke SAITOH



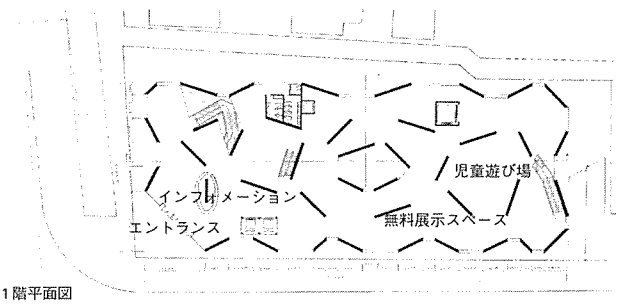
5階平面図



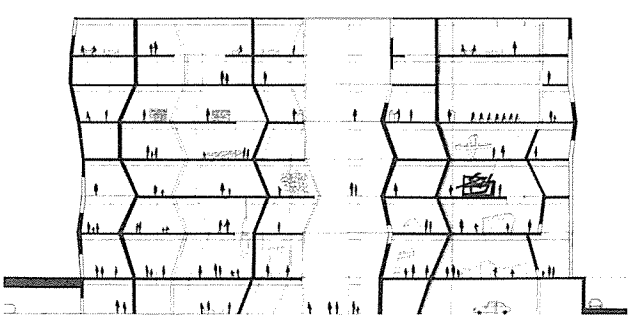
外観パース

Ribbon

白戸秀明　Hideaki SHIRATO



1階平面図



断面図

Tokyo Media Forest

穴水　経済性の高い表参道という土地で、高い容積率を出しながら、公園のように無償で休める場所を作ろうと考えました。

高橋　この場所での公園のあり方を提案した方がよかったのでは。木があればいいのか？

金箱　構造は割と考えられているようだけど、全部を三角形で作りすぎているんじゃないかな。

Omotesando MODE museum

宮田　ファッションを展示する美術館として、ファッションの要素で美術館全体を構成します。

奥山　綺麗に描けてるけど特徴は無いんだよね。どういう場所を作りたかったの？

坂牛　美術館が奥に押し込まれてる感じがする。都市の美術館なんだから、歩いてると街が見えるとか、そういう流れがあるといいと思う。

Directions

斎藤　内部のアクティビティが外部に発信されることで人を引き込んで、そこ自体で循環を作り出せるような建物を考えました。

山口　柱をグリッドにのせてるのは何故ですか？斜めの壁が恣意的に見える。

安田　壁を振るのでなく、ボックスとして考えたら空間の偶発性まで操作できたかもしれない。

Ribbon

白戸　部屋を作らずアクティビティの境界を曖昧にする事で、気軽に入れる美術館としました。

安田　同じ空間の繰返しになるかも。

高橋　百個くらいスペースがありそうだから、百個彫刻持ってる人の個展とかすればいいかも。

建築設計製図　第三／第2課題
Third-year Studio Work: Spring Semester

「Titech Sports Complex」

担当：
金箱温春［非常勤講師、金箱構造設計事務所］
Yoshiharu KANEBAKO (Guest Professor, Kanebako Structual Engineers)
山口浩司［非常勤講師、金箱構造設計事務所］
Hiroshi YAMAGUCHI (Guest Professor, Noriaki OKABE Architecture Network)

八木幸二［教授］
Koji YAGI (Professor)
安田幸一［助教授］
Koichi YASUDA (Associate Professor)

是永美樹［助手］、
柴田晃宏［D1, RA］、片淵和啓［M2, TA］、
新保佳恵［M2, TA］、田中真紗美［M2, TA］
Miki KORENAGA (Assistant Professor), Akihiro SHIBATA (D1, Research Assistant),
Kazutaka KATAFUCHI (M2, Teaching Assistant),
Yoshie SHINBO (M2, Teaching Assistant), Masami TANAKA (M2, Teaching Assistant)

ゲストクリティーク：
岡部憲明［岡部憲明アーキテクチャーネットワーク］、
坂本一成［教授］、竹内 徹［助教授］、奥山信一［助教授］
Noriaki OKABE (Noriaki OKABE Architecture Network),
Kazunari SAKAMOTO (Professor), Toru TAKEUCHI (Associate Professor),
Shin-ichi OKUYAMA (Associate Professor)

以下は、2006年7月18日に行われた講評会の模様を、学生編集委員の岩間直哉[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

[課題内容]
学内大岡山北地区に、運動施設を拠点としたスポーツコンプレックスを計画する。スポーツを目的とした大スパン建築を設計することにより、建築と構造及び設備の整合を学ぶ。

[課題条件]
40m×50mのメインアリーナ、40m×20mのサブアリーナを含むスポーツ主体の計画ではあるが、集会・展示等の利用も考慮したプログラムを各自が設定する。外部空間との連続性を考え、ランドスケープと一体となった建築とする。

[提出物]
全体模型1台1/500、主要構造模型1台1/100、設計概要、配置図1/500、敷地断面図1/500、平面図1/200、断面図1/100、立面図2面1/200

[敷地条件]
大岡山北地区約10,000m²内に自由に計画する。
但し、敷地内の既存建物は全てないものとして考えてよい。

[総評]
金箱　この課題は、大空間を通して直接学びますが、今後も構造のことは意識していてほしいです。デザインをやりたい人でも構造の基本的なルールを知らないと構造設計者と会話ができない。自分のやりたいことをなんでも解決してくれるというものではありません。何故そういうことをやりたいのか、何故そういうデザインがいいのか、どうしてそこで構造を頑張らなければいけないのかということをちゃんと伝えられないといけない。デザインを生かすためにはどのような構造がいいかということを考えてほしいと思います。大空間の課題だからといって全てを覆うような大きな空間を作らなくてもいいのです。デザインと構造がいかにして一体性を持って、なるほどと人に思わせるようなものを作っていくかということをこれからも是非考えてほしいと思います。
山口　最初に大枠でプログラムを決め、そのプログラムに応じたプランニングが出来てきて、そのプランニングに従って構造が見えてくる訳です。そのプロセスを一ヵ月半という短い期間で仕上げるというのは、なかなか厳しい課題だと思います。大空間というのは、デザインと構造以外にも、照明とか空調など環境の制御といった、もっと複合的な答えを見つけていかなければならない種類の建物です。そこまで考慮して計画をするのは三年生ではなかなか難しいとは思うけども、そういうが総合的な対応が必要だということは頭の隅に置いておいてほしいです。これだけ大きな模型を作ったのだから、周辺環境も含めた複合的な関係がはっきり主張できるような計画をいつも心がけていただきたいと思います。


講評会風景

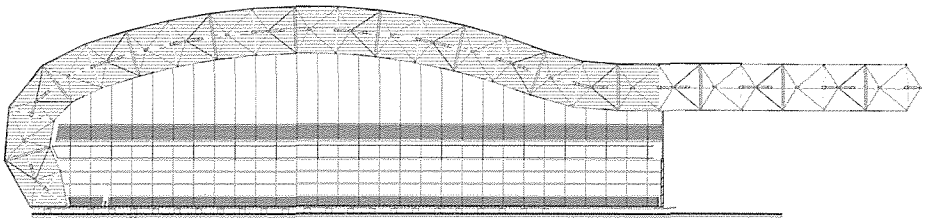
The assignment was to design a gymnasium and sports complex, offering space for student amenities including gallery, meeting rooms, relaxation space and cafe. for O-okayama campus. It was essential to consider the relationship between our entire campus landscape and the surrounding urban environment.


金箱温春　Yoshiharu KANEBAKO
1953年　長野県生まれ
1975年　東京工業大学工学部建築学科卒業
1977年　同大学院修了、横山建築構造設計事務所入社
1992年　金箱建築構造設計事務所設立
1998年　日本建築構造技術者協会賞受賞
2005年　松井源吾賞受賞
主な作品：京都駅ビル、ふれあいセンターいずみ、遊水館、湯博物館、広島市立基町高校、兵庫県立新美術館

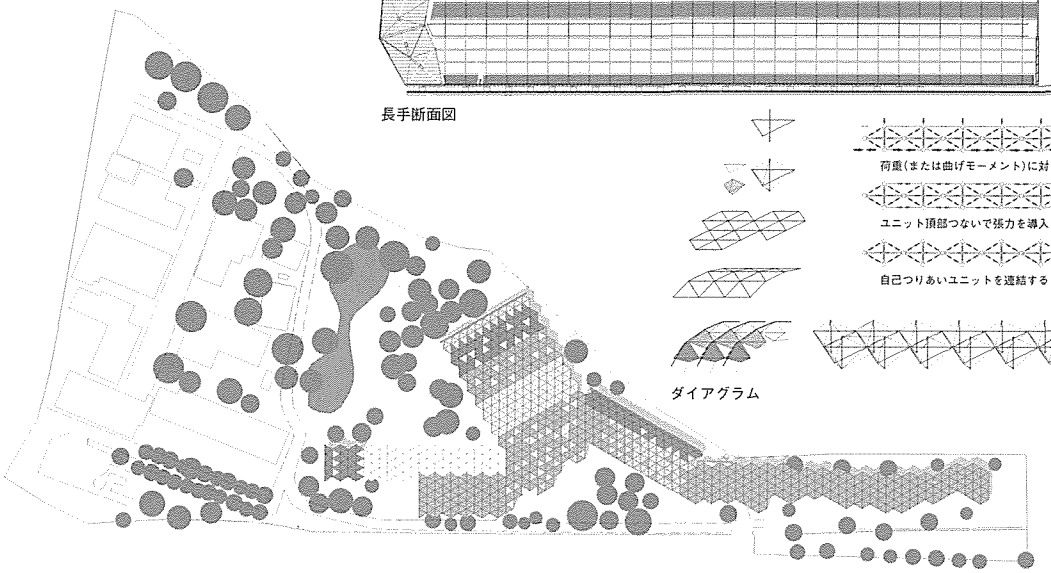

山口浩司　Hiroshi YAMAGUCHI
1955年　福岡県生まれ
1978年　東京工業大学工学部建築学科卒業
1980年　同大学院修士課程修了
(株)建築研究所アーキヴィジョン入所
1991年　RenzoPianoBuildingWorkshop srl GENOVA ITALY 入所
1995年　工学院大学工学部建築学科講師、個人事務所設立
1996年　岡部憲明アーキテクチャーネットワークと共同　現在に至る。
主な作品：東京国立文化財研究所、
ヴァレオユニシアトランスミッション株式会社、桜新町の集合住宅、
JST名古屋黒笹寮、小田急電鉄新型ロマンスカー50000形VSE

些末な境界

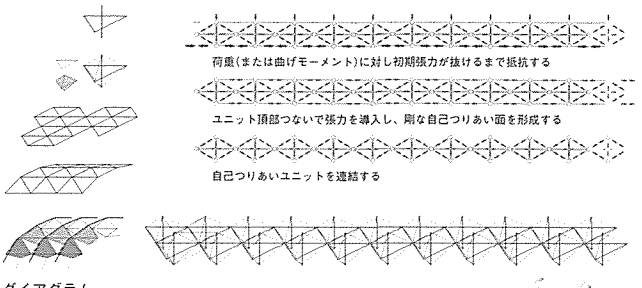
小笹 泉　Izumi KOZASA



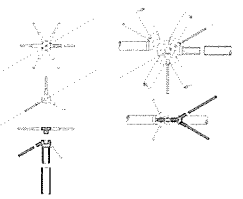
長手断面図



配置図



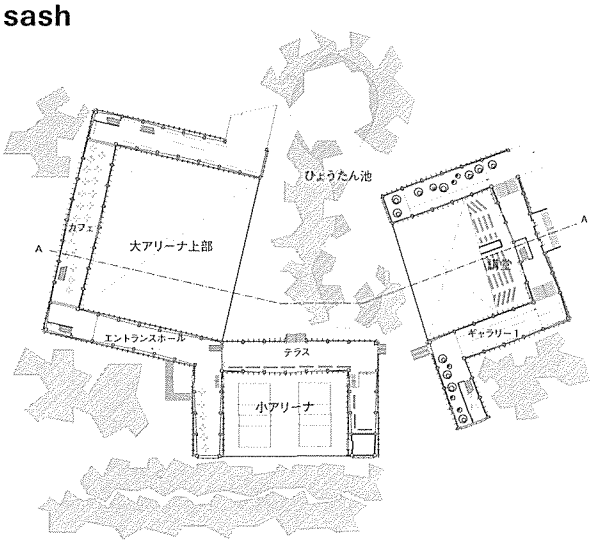
ダイアグラム



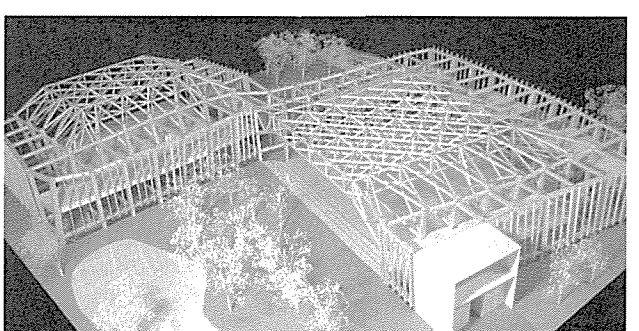
ディテール

sash

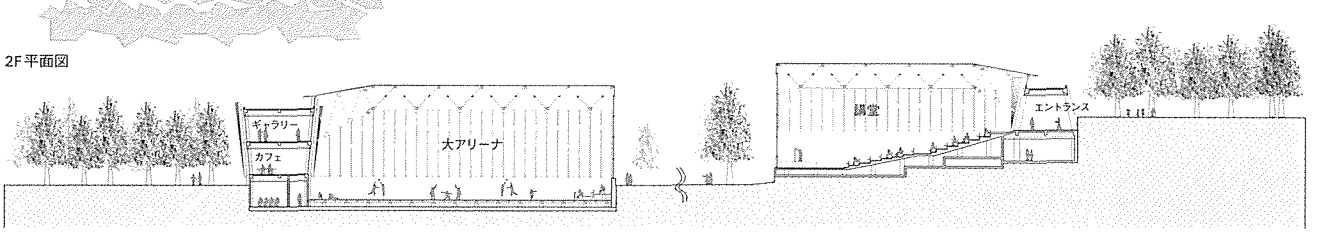
斎藤啓佑　Keisuke SAITO



2F平面図



模型写真



断面図

些末な境界

小笹　大規模建築の巨大な境界を切り崩すべく弱い境界を目指しました。釣り合いが完結している一つのユニットを面状に組み合わせてその頂部を結びあわせるトラス構造を考えました。これにより方向性と無方向性、視覚的不安定と力学的な安定等それぞれ矛盾するものが同時に統一されて形になります。

竹内　このシステムはティンセグリティー・トラスといって実際に使用されている構造です。初期張力をどうやって入れるかが重要です。

岡部　仕上げはどうなっているの？

小笹　ほとんどはアルミのパネルで、所々乳白パネルや強化ガラスを入れています。

山口　デリケートな構造だからサッシ材がかなり影響してきそうですね。仕上げ材自身が構造の一部になるともっとよかったですね。

sash

斎藤　来館者が大空間で多様な体験ができるように、連続したヴォリュームで大空間の形状を作ります。その際にボリュームの壁を立体的にうねらせることで、連続した中にも様々な空間の広がりをもたせることを考えました。構造はヴォリュームをコの字形に囲み、三方向から真ん中の水平トラスを支えています。

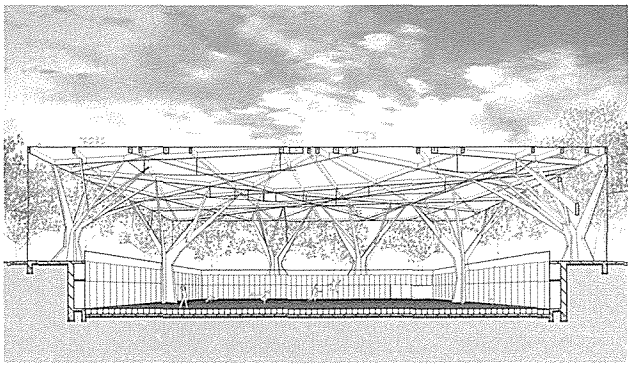
山口　プランは入れ子のようになっていて動線部分がフレームになっているんですね。

岡部　実際にこれだけ部材があると、部材全体はもう少し小さなものになると思います。構造模型になった途端に部材が大きく見えます。

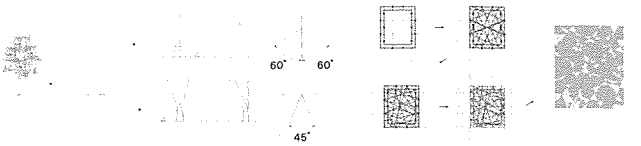
金箱　周りのフレームを傾けることで、敷地の周りによく馴染み空間がよくなった。

Oookayama Sports 'HIROBA' Complex

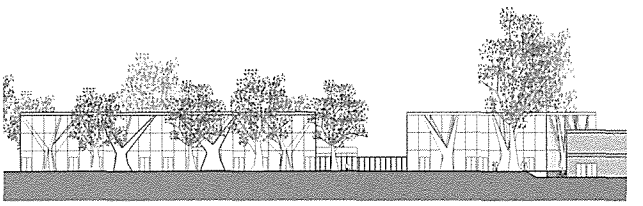
亀井 聡　Satoshi KAMEI



断面パース



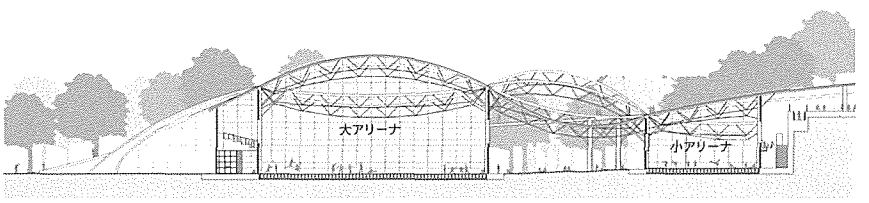
梁ダイアグラム



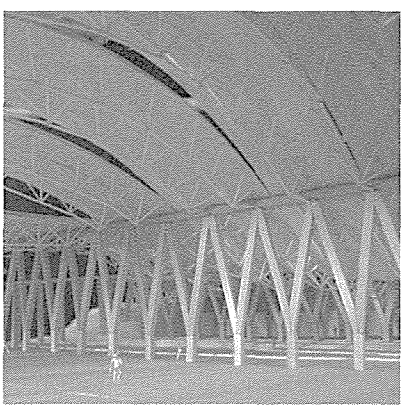
西立面図

extreme undulation

高井利洋　Toshihiro TAKAI



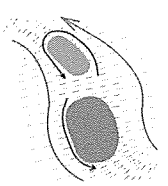
A-A'断面図



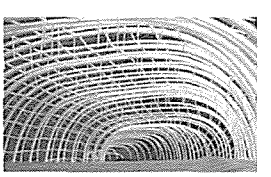
模型写真

Wave Arena

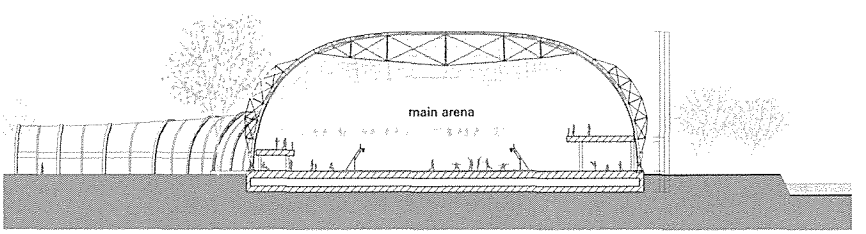
長谷川千夏　Chinatsu HASEGAWA



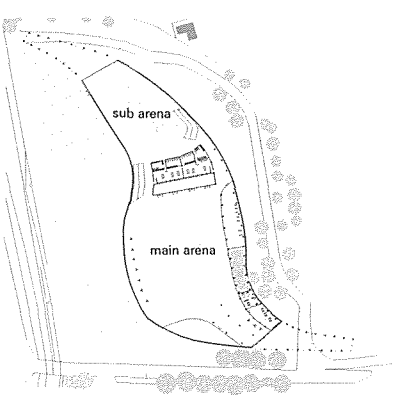
ダイアグラム



模型写真



断面図



1F平面図

Oookayama Sports 'HIROBA' Complex

亀井　建物の間の外部空間も内部空間と同じように性格付けしようと思い、散在分棟配置を考えました。木をモチーフにした柱にランダムな梁を架け、メインの6本は張弦梁にしました。

山口　ヒエラルキーとして、先にいくほど華奢な部材になってほしいがそうなっていない。大きなスパンのところは張弦で逃げている。

安田　屋根小屋組みと柱から持ち出された枝の構成が、巨大な森の下にいるような感じがよく出ています。

extreme undulation

高井　緑が丘地区の斜面と深い森によって断絶された地域に、うねりを持つ屋根を架けることで大岡山地区と緑が丘地区のつながりの活性化を考えました。

岡部　なかの空間は面白いものができていますよね。あとはトラスの構造材にもうひと工夫あったらよかったですね。

奥山　ランドスケープとの関係で架構を考えたのはいいですよね。

金箱　持ち上げて斜めにした柱もいいですね。

Wave Arena

長谷川　大アリーナと小アリーナをうねる外皮で包みこむことを考えました。構造は外皮の大きさによって形を変えるアーチ構造です。スパンの大きな部分には張弦材を付けました。

岡部　こういう形状の場合グリッドシェルの方が自由度が高く均等に力が働くし、建築としても一つのシステムで包む方がよかったのでは。

長谷川　変わっていく曲率に対して材の太さを変えたくなかったから張弦材を使いました。

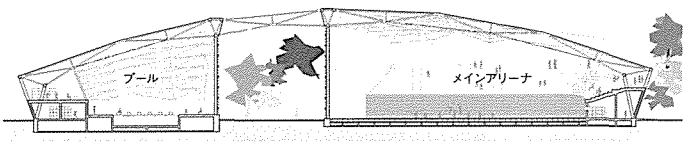
八木　入り口が横にもあったらよかった。

緑道ガーデン

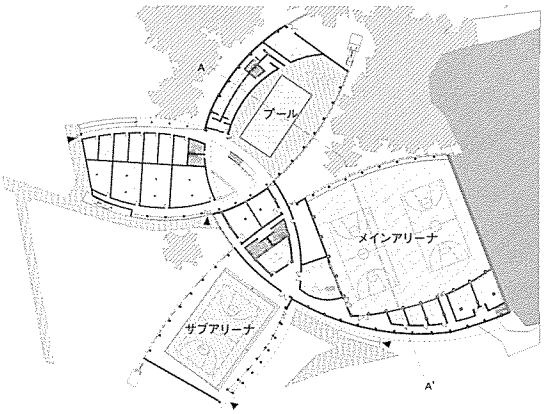
内山裕太　Yuta UCHIYAMA



模型写真



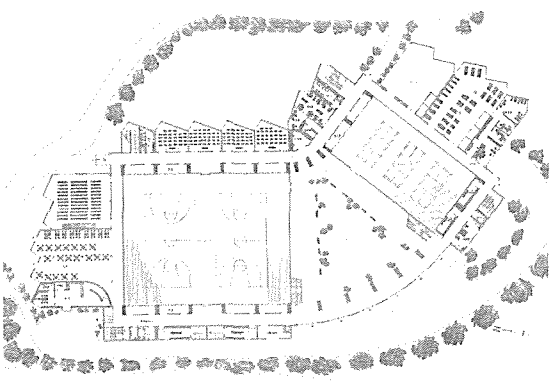
断面図



1F平面図

東京工業大学スポーツ工学科第８類

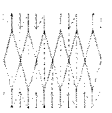
池田文乃　Ayano IKEDA



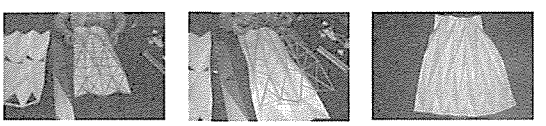
1F平面図



大スパン部分展開図

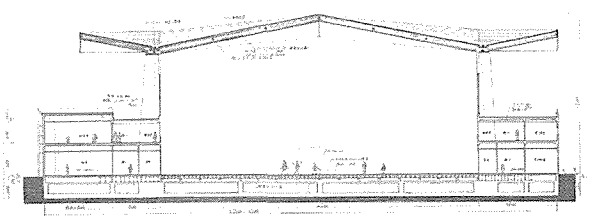


扇部分展開図



折った型紙に部材を載せて骨組みを作る　骨組みを型紙からはずす　扇部分折った後

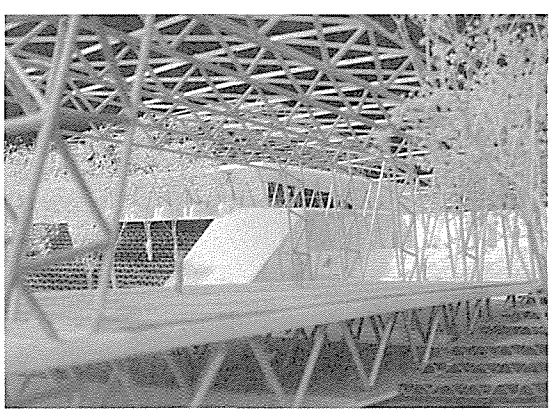
屋根架構形成ダイアグラム



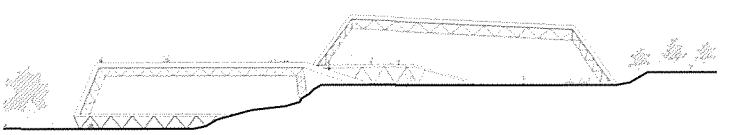
A-A'断面図

おびの動線

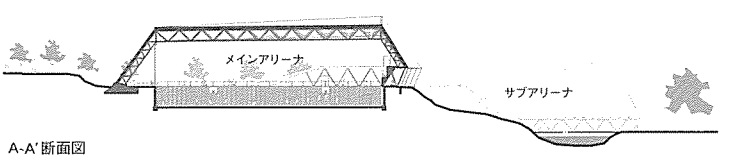
森中康彰　Yasuaki MORINAKA



模型写真



南立面図



A-A'断面図

緑道ガーデン

内山　周囲の木々に様々な接点を持ちながら、様々なアクティビティに出会えるような緑道となる大空間を目指しました。中央にメインのアーチが架かっていて、それと交わるようにサブのアーチが架かっています。

奥山　敷地との関係はよさそうだね。場所やレベルの設定がいい。

安田　屋根のレベル変化が、柱梁の太さや形状を変化させていくシステムが面白い。

山口　空中を走ってくる梁がなかなか不思議。

東京工業大学スポーツ工学科第８類

池田　スポーツ工学とスポーツの融合した建物を考えました。開口を持つ凹凸屋根を作るために鉄板のフレーム構造にしました。

岡部　折板の美しさを見せたいんだったらそれを支える柱の構造とか下の部分の部屋の割り振りとかを徹底的に考えていくべきです。

坂本　折板形状にフレームを入れることは違うシステムになっていると意識すべきです。

山口　スチールのパネルを切り刻んでそれに補強を入れる方が面としての表現がでますね。

おびの動線

森中　建築自体が動線化するために床や屋根、壁を一つながりにしたおびで、大小の空間を仕切っていくことを考えました。構造はアリーナ等の大空間ではおびに沿うように平面トラスを這わせ、うすい空間では内部全体にトラスを並べて構造とおびの関係を作りました。

岡部　帯を強調するなら構造を見せないほうがいい。ただのトラスの大空間になってしまう。

山口　建築の表現はいいが、構造的なアイディアがもう少しほしかった。

建築設計製図　第四／第1課題
Third-year Studio Work: Autumn Semester

「こどもの城」
"Children's Castle"

担当：
千葉 学［非常勤講師、東京大学助教授］
Manabu CHIBA (Guest Professor, The University of Tokyo)

坂本一成［教授］、奥山信一［助教授］、塚本由晴［助教授］
Kazunari SAKAMOTO (Professor), Shin-ichi OKUYAMA (Associate Professor), Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor)

中井邦夫［助手］、足立 真［助手］、大内祥子［D2, TA］、
本橋良介［D1, TA］、根本理恵［M2, TA］
Kunio NAKAI (Assistant Professor), Makoto ADACHI (Assistant Professor), Shoko OUCHI (D2, Teaching Assistant), Ryosuke MOTOHASHI (D1, Teaching Assistant), Rie NEMOTO (M2, Teaching Assistant)

ゲストクリティーク：
金箱温春［非常勤講師、金箱構造設計事務所］
Yoshiharu KANEBAKO (Guest Professor, Kanebako Structural Engineers)

以下は、2006年11月27日に行われた講評会の模様を、学生編集委員の石川翔平[M1]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

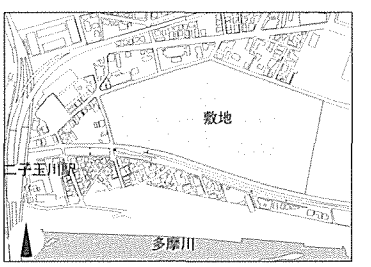
[課題内容]
子供たちが、学校や家庭を離れてのびのびと、自由に絵を描いたり工作したり、あるいは外も中もかまわず、ただただ走り回って遊べるような、課外活動のための施設を計画して下さい。

対象とする子供は、幼稚園から小学校高学年くらいまでの年齢です。幼稚園児や小学校低学年くらいまでは、お母さんやお父さんと一緒に来ることが多いでしょうから、ここは子供たちの遊び場であると同時に、親にとっては、子供を抱える親同士の大切な情報交換の場になるかも知れません。小学校高学年くらいになると、放課後あるいは週末に、ここを勉強部屋として使いにくることもあるでしょう。時には、ここで演奏会をやったり、バレーボール大会をやったりと、様々なイベントも展開されそうです。だから、ここは子供のための場でありながら、子供を核にした、広い意味での地域交流施設です。

子供にとって、どんな空間が楽しいのか。親と子供が一緒にいるための空間として、どんな場所がいいのか。年齢の違う子供たちが共存する空間として、どんな関係が築かれるといいのか。実際にそこでどんな遊びが展開されるのか、たくさん想像力を働かせて考えてみて下さい。その空間のためには、多分家具とか遊具のレベルまで考えを及ぼさないといけません。当然、外部空間も含めてです。つまり提案は、建築のみならず、ランドスケープデザインから家具、あるいは遊具のデザインまで含めて行って下さい。

[敷地条件]
現在の二子玉川タイムズパークの敷地
建蔽率、容積率、高さ制限、斜線制限などは、特に考慮しない。

[総評]
今東京では、これだけたくさんの巨大プロジェクトが実現した後もなお、まだまだ開発の計画があるといいます。そのような計画に対し、皆さんはどれだけ批評的でいられるのか。あるいは逆に、巨大な開発を是とするような、豊かな都市への構想力を持ちうるのか。子供の遊び場などという、プログラムを明確に提示できないような計画に対し、どのように空間を構想しうるのか。限られた敷地条件の中で繰り広げられるフォルマリスティックなゲームに対し、どれだけ距離を置くことができるのか。そんな思いをもってこの課題を出しました。
どの提案も、自分が作る建築に対し、極めて正直に取り組んでいるという印象を持ちましたが、その一方で、何か思いもよらぬ仮説からシナリオを作り、自らの建築を正当化さえしてしまうといった独自の都市像が強く感じられるような提案は、極端に少なかったように思います。
是非とも今後、そんな逞しい構想力を磨いて欲しいと思います。



敷地図

The assignment was to design a recreation center with landscape for school children and their parents at the Tamagawa riverside. Students were asked to imagine children's play behavior, while keeping in mind the relationship between child and parent. Based on these ideas, new playground schemes with furniture and play equipment were submitted.



千葉 学　Manabu CHIBA
1960年　東京都生まれ
1985年　東京大学工学部建築学科卒業
1987年　東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了
1987～93年　日本設計
1993年　ファクター エヌ アソシエイツ共同主宰
1993～96年　東京大学工学部建築学科キャンパス計画室助手
1998年～　東京大学大学院工学系研究科建築学専攻助手
2001年　千葉学建築計画事務所設立
現在、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻准教授
主な作品：黒の家、勝浦の別荘、MESH、八ヶ岳の別荘、
日本盲導犬総合センター、STUDIO GOTENYAMA、PLATFORM

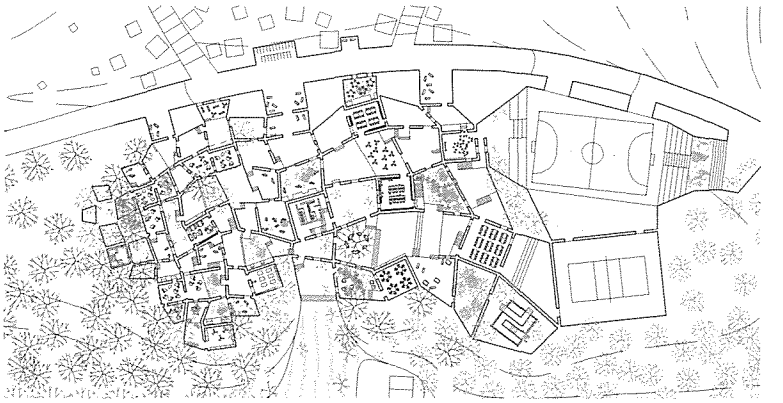

講評会風景

Futako kid's "Burrow"

亀井 聡　Satoshi KAMEI



模型写真(俯瞰)



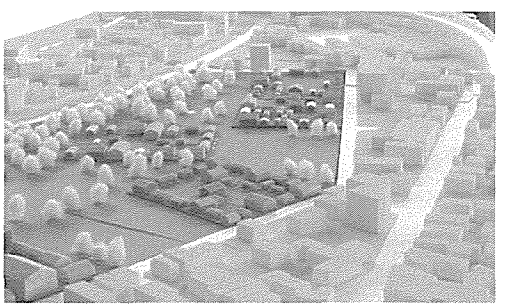
平面図



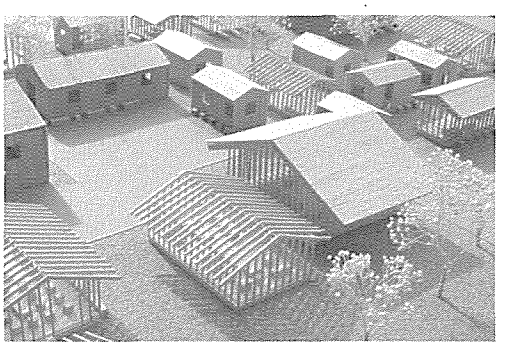
模型写真(断面)

寄合

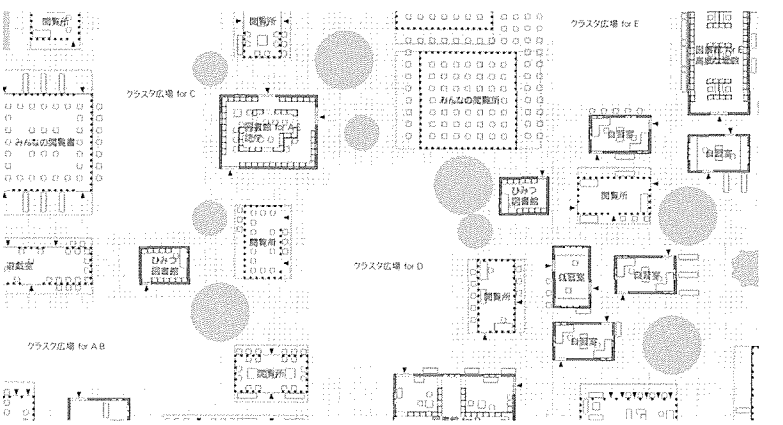
小笹 泉　Izumi KOZASA



模型写真(敷地全体)



模型写真(俯瞰)



平面図



断面パース

Futako kid's "Burrow"

亀井　子供のスケール感覚は大人と違い連続的であり、そのことが遊び感覚につながっていると思いました。そこで家具、遊具、建物、ランドスケープのスケールが連続していくように、駅側から徐々に発散していくランダムなグリッドを設定し、そこに地面を掘りこんだ空間を作りました。ところどころに敷地内に全体を見渡せ、ランドマークにもなるような高い建物を作りました。

千葉　配置計画がいいね。住宅地的な密度が反映されていながらも、一方でまったく別の世界ができているのがすごくいい。

塚本　もうちょっと屋上とか内部で活動のネットワークの種類の違いがあっていいんだけど、そういうのが図面から全然読めない。

寄合

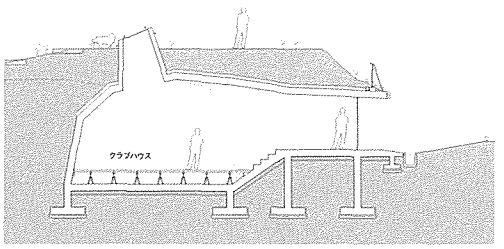
小笹　街が潜在的に持っている遊びの可能性を考えて、周りの街の構成を意識して同じスケールの街区を作り、そこに分棟形式で建物を配置しているので、敷地全体が施設化すると考えています。それぞれの建物については、透過性の高いかご状と屋根状のもの、それと閉じられた箱状の3種類を作りました。

金箱　まるで居住区にぐっと建物が密集してる農村の風景だね。

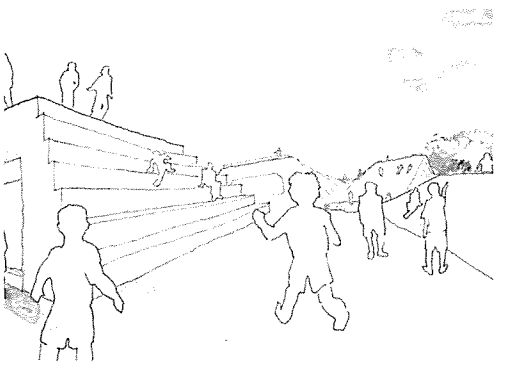
塚本　しかし建物の配列のせいか、あまりライフを感じない。砂漠に作った映画のセットように感じる。そういう3つの種類の建物の分け方は、一緒にあることでお互いに相乗効果をもたらすような配列があると思う。

BANK and CAVE

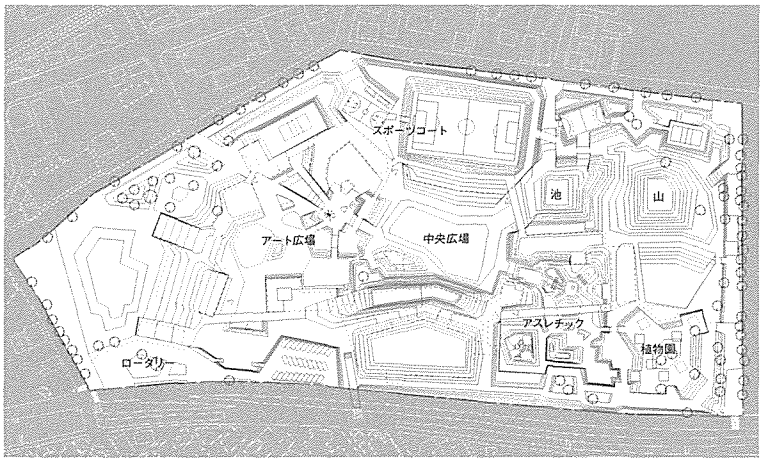
菅谷祐輔　Yusuke SUGAYA



矩計断面図



パース



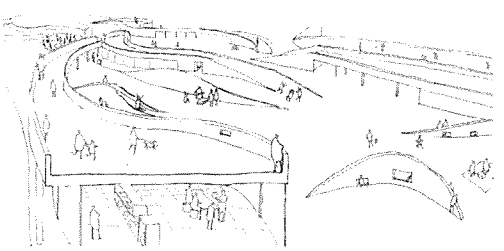
平面図



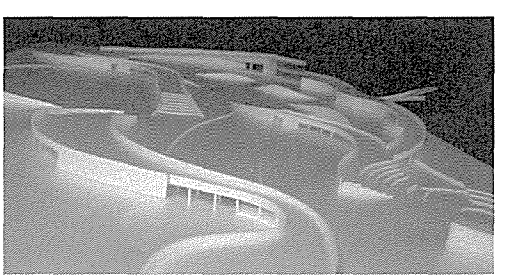
断面図

かべのむこうとそのまたむこうと

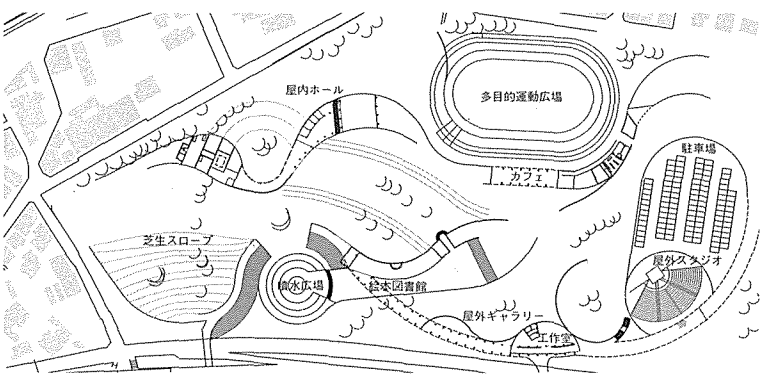
高井利洋　Toshihiro TAKAI



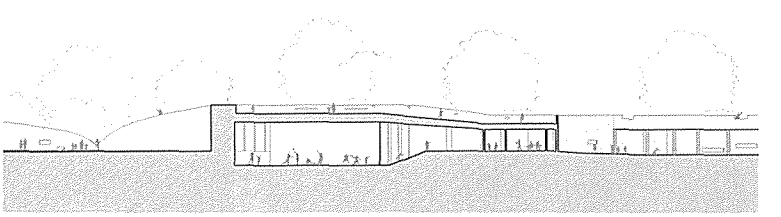
断面パース



模型写真



平面図



断面図

BANK and CAVE

菅谷　自然物のようであり人工物でもあるという不思議な魅力のある空間が子供達の遊び場にいいと思いました。そこでそれぞれの活動場所の境界に敷地周辺の土手を引き込むことで、古代遺跡のような遊び場を作りました。施設の機能は土手の中に内蔵して洞穴のようにしました。

塚本　遺跡と言ってっているけど、なにか喚起させるものや、ヒエラルキーなどはあるのか。

菅谷　それぞれの境界面のランドスケープを考えた結果なのでヒエラルキーなどはありません。

坂本　一つ一つの部分はうまく行っているようにみえるけど、全体を決めているルールみたいなものが見当たらない。それが出てくると次につながると思います。

かべのむこうとそのまたむこうと

高井　敷地内にプログラムを散在させて、それらを壁でつなげたり方向付けることで、異なった活動が連続して体験できる空間を作りました。

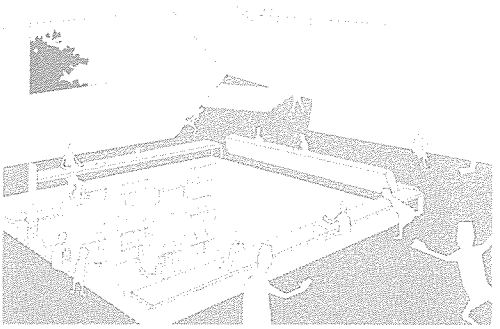
塚本　なんとなく魅力を感じるね。屋根上の壁状の手すりが効いてるのかな。

高井　手すりの高さは1200程度で、子供の視線を遮る高さです。手すりの連続する屋根を歩くことで、突如前に景色が広がったり、壁の穴から急に横に視界が抜けたりすることを意識しています。

千葉　壁が隆起したり寄り添ったりすることでいろんな場所を作ろうしてるんだけど、方法が限定されすぎてる気がするね。

やねうらダンジョン

森中康彰　Yasuaki MORINAKA



内観パース



模型写真



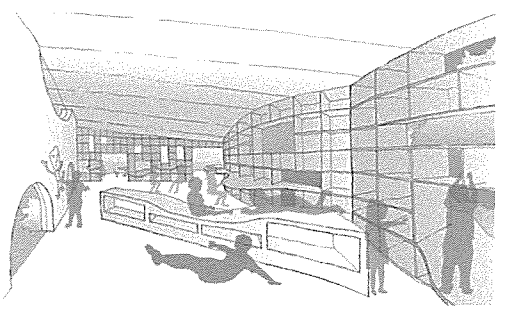
平面図



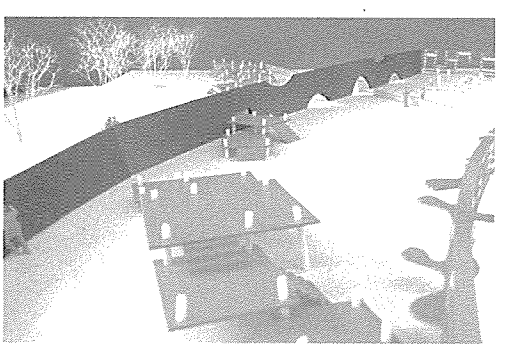
断面図

ながい家具のおおきな家

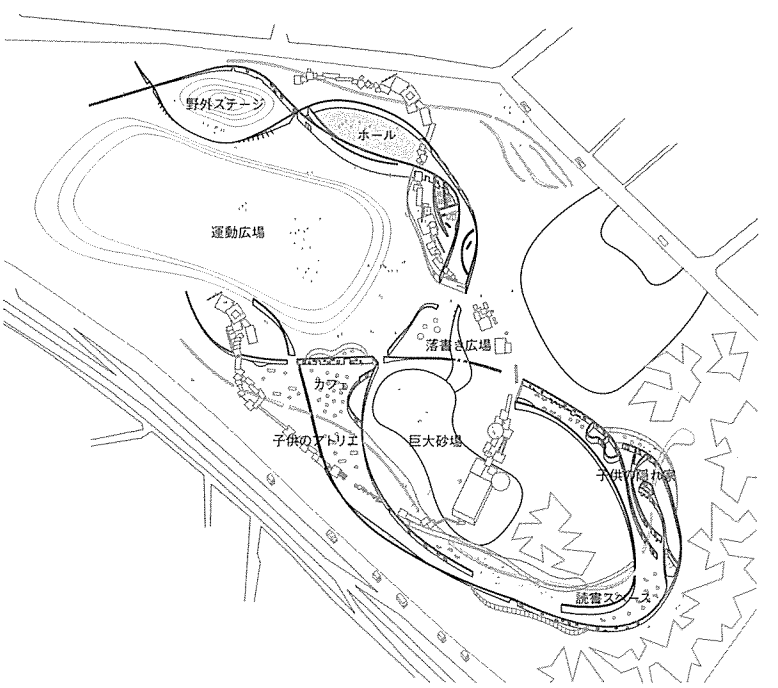
内山裕太　Yuta UCHIYAMA



内観パース



模型写真



平面アクソメ

やねうらダンジョン

森中　子供の遊び場として、都市の余白である屋根裏に注目しました。建物の上層を子供、下を大人の施設とし、さらに周りの地面を造成することで、屋根裏からのみ行ける丘のような場所を作っています。屋根裏の不定形な空間を連続させた洞窟のような内部空間と、屋根が集まってできるランドスケープとが同時に得られることが面白いと思いました。

千葉　地形を造成したのが作品にいい影響を与えている。屋根の窓をもっと工夫できるとよかったと思う。

奥山　屋根裏に上がる瞬間の良さをもっと考えるとよかった。

ながい家具のおおきな家

内山　長い家具で敷地全体を大きく覆った子供の城を考えました。家具は4種類で、黒板、本棚と机・イスのセット、スラブが重なったアスレチック、作って展示ができる家具があります。異なった家具で囲まれた場所は、空間と活動を一対一に対応させずに、どんどん子供の活動を変化させていくと思います。

塚本　模型を見ると屋根の印象がすごく強いんだけど、屋根のイメージはどうなんですか。家具と一緒に屋根を考えるとずっとおもしろくなったと思う。

千葉　具体的な遊具を建築の問題に置き換えていこうっていうアプローチはすごくよかった。ただ、この良さが出る配置の仕方があっただろうと思う。

建築設計製図　第四／第２課題
Third-year Studio Work: Autumn Semester

「ハイパー・スクール／学校を越えた学校」
"Hyper School"

担当：
古谷誠章［非常勤講師、早稲田大学教授］
Nobuaki FURUYA (Guest Professor, Waseda University)

坂本一成［教授］、塚本由晴［助教授］、奥山信一［助教授］
Kazunari SAKAMOTO (Professor), Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor), Shin-ichi OKUYAMA (Associate Professor)

中井邦夫［助手］、足立 真［助手］、
大内祥子［D2, TA］、本橋良介［D1, TA］、根本理恵［M2, TA］
Kunio NAKAI (Associate Professor), Makoto ADACHI (Associate Professor), Shoko OUCHI (D2, Teaching Assistant), Ryosuke MOTOHASHI (D1, Teaching Assistant), Rie NEMOTO (M2, Teaching Assistant)

以下は、2007年2月2日に行われた講評会の模様を、学生編集委員の服部暁文[M1]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

[課題内容]

この課題は早稲田大学で1994年以来、僕が一貫して出題し続けているテーマを、今回の課題に合わせてモディファイしたものです。当初この課題はコーリン・ロウの『コラージュ・シティ』の一文を引いて「記憶の劇場／予言の劇場」と題して出題されていました。都市は予言の劇場であると同時に記憶の劇場でもあるという主旨です。ここで僕が捉えようとした「都市（ないしは建築）自体が世代を超えた記憶装置となり得る」という概念は、その後、人が人を、社会が人を、人が社会を、互いに啓発し合う場としての「学校」という概念と重ねあわされて、この「ハイパー・スクール」のコンセプトに行きついたのです。ここでは、皆さんがかつて学んだ出身小学校のある場所を選んで、その学校敷地を含む、より広い範囲の地区を対象地として、以下の問題点について各自深く考察して下さい。

01 「今から30年後の小学校はどのようになっているだろうか」
日本全国の人の住むすべてのエリアには、どこでも例外なく通うべき小学校がひとつあり、また互いに重なり合わないその小学校区によって全国が残さず塗り分けられています。このことは今後の社会の中でどのような意味を持つのでしょうか。
02 「世代の別に関係のない老若男女の図書館」
図書館の蔵書は言うまでもなく記憶の宝庫ですが、そこに集まる老若男女もまた、多様な個性と来歴と知識をもつ、無数の生きた記憶の宝庫だともいえます。人が本に出合うためだけでなく、人がそうした他の人に出会うための図書館は作れないでしょうか。
03 「ユニバーサル・デザインとは何か」
公共の建築物に求められるバリア・フリーの概念は、何らかの障害を持つ人々が自分の意思で自由にアクセス、利用できるために建築というハードウェアに内在する様々な障害を取り除こうとするものですが、しばしばそれは車椅子のためのスロープやトイレ、点字ブロックや手すりなどといった、画一化された対処法によって事足れりと考えられてしまいます。ここではその本質をさらに掘り下げて下さい。
04 「パフォーマンス・スペースとしての校庭を考える」
その人が仮に定住していようと、そこを一過的に通りすぎようと、都市はそこに立ち現れるすべての人にとって、劇場であると考えます。当然、学校の庭もまた、そこは都市に開かれた劇場でもあるのです。学校の庭は閉ざされた中にあって時に応じて開放されるのがいいのか、あるはすでに開かれた都市の中に庭があって、生徒がそこに出かけて行くのがいいのでしょうか。
05 「学校が建つことによって、都市を改造することは可能か」
学校が塀に閉ざされてあるならば、それは周囲の都市にとっては無いことに等しくなります。その都市との関係を絶った「真空」に子供たちが送り込まれていることが好ましいことでしょうか。深刻な事件が起こった今だからこそ考えなければならない、学校と都市の関係の問題を考察して下さい。

[総評]

古谷　前年に引き続き「ハイパースクール」を出題したので、何人かは昨年の成果を意識して、その水準をひとつのスタートラインと捉えてくれたのではないか。全体に明らかにレベルは上がっている。また課題に当たっての自分の出身地の見直し方も、より的確なものが多かった。その一方で、それを創造的な提案につなげるという観点からは、総じてどちらかというと真面目でおとなしい印象、もっと自由な発想、のびのびとした構想力があっていい。

そんな中では福岡の埋立地のアーバンデザインにまで立ち返って提案した山本案には元気があって、建築と都市の関係を考えるこの課題に対してのひとつの姿を示している。また駅舎を取り込み高台に位置する校舎までつづら折りのルートで繋げる斎藤案、既存の病院施設や教会を取り込んでひとまとまりの大きな都市の回廊空間を形成しようとする小笹案などにも、ある力強さが感じられた。今年は地方に立地したものが多かったが、その中では奄美大島の地形を活かし、さながら集落をそのまま延長させたかのような永野案に、デザインの穏やかさと骨太さが兼ね備わっていたのが印象的であった。

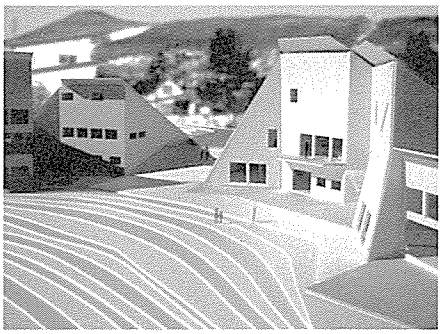
Since 1994, I have worked on the theme "Theatre of memory / Theatre of prediction", which is quotation from "Collage City" by Colin Rowe, indicating that a city (or architecture) could be both "theatre of memory" and "theatre of prediction". Here, I repropose the subject as "Hyper school", where people enlighten other people, society inspires people, and people in turn illuminate society. The assigment was to choose an area of the elementary school you studied, and enlarge it as your site considering the following sub-themes :
01: What will happen to elementary schools in 30 years?
02: Design a library for everyone. 03: What is "universal design"?
04: School ground as performance space.
05: Is it possible to renovate a city based on an elementary school?
You may start to think from any of these points. Propose an attractive "Hyper school", which goes beyond existing schools.



古谷誠章　Nobuaki FURUYA
1955年　東京都生まれ
1978年　早稲田大学理工学部建築学科卒業
1980年　同大学大学院修士課程修了後、穂積研究室助手
1983年　早稲田大学助手
1986年　近畿大学講師
1986～87年　文化庁芸術家在外研修員としてマリオ・ボッタ事務所に在籍
1990年　近畿大学工学部助教授
1994年　早稲田大学理工学部助教授、NASCA設立(共同：八木佐千子)
1997年～　早稲田大学教授
主な作品：アンパンマン・ミュージアム、詩とメルヘン絵本館、ZIG HOUSE / ZAG HOUSE、神流町中里合同庁舎、茅野市民会館

Moiwa-kita “epitome”

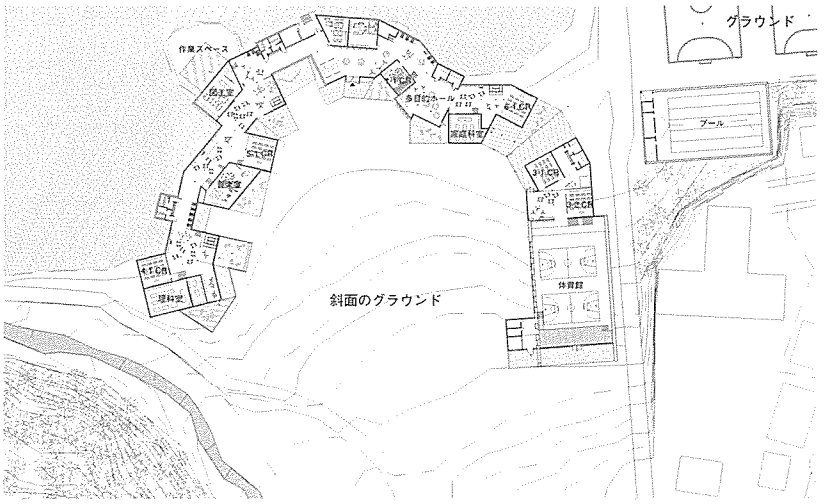
亀井 聡　Satoshi KAMEI



模型写真



模型写真



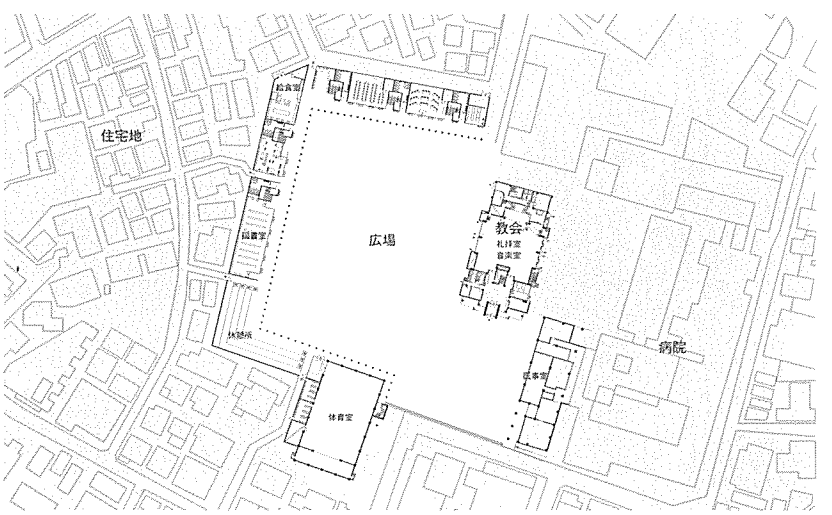
1階平面図



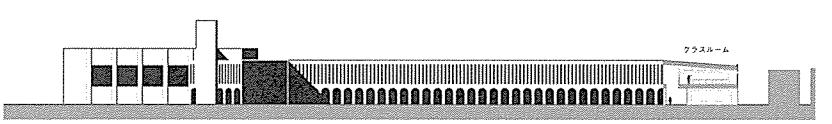
展開断面図

白の広場

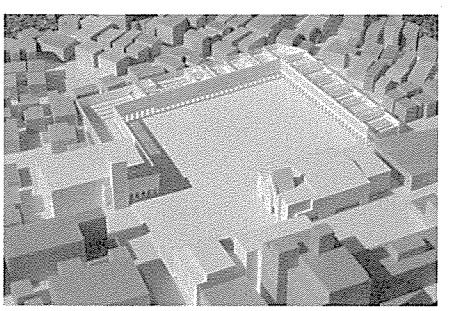
小笹 泉　Izumi KOZASA



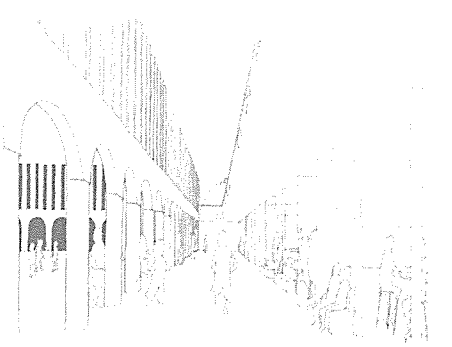
平面図



立面図



模型写真



内観パース

Moiwa-kita “epitome”

亀井　札幌から南に7km程の山の中にある学校です。三方を山に囲まれ、東側に川が流れています。子供が自然と親しむことで地元を知ることができる、地域の縮図のような学校にしています。山々に住宅が並ぶ風景を考慮して、平らなグラウンドを2つに分割し、片方を川に向かって降りていく斜面にしました。

塚本　どういう意味で地域の縮図なの？

亀井　山に続く周辺の坂道を参照した斜面のグラウンドが、ボリュームと川に囲まれていて、見た目が縮図になっています（一同笑）

古谷　今言っていたようなことがちゃんとデザインされているのはいいね。ただ、夜間や休日に人が集まるような、地域に開かれている場所があるとよかった。円弧の内側に続く縁側とか、デッキが広がっているとかね。斜面のグラウンドでは何が起こるのですか？。

亀井　冬にはスキーができたりします。

塚本　全体的に不連続に感じてしまう。建物をつたって斜面を登るとか、グラウンドの使い方をもっと想像すると変わってくるはず。

白の広場

小笹　東京の荻窪にある住宅地と駅からの商業地域が続く一画です。建物がひしめき合う場所で、学校、病院、教会に囲われるぽっかり抜けた広場をつくりました。回廊をつくって広場を囲み、周辺からなんとなく入ってこれるようになっています。

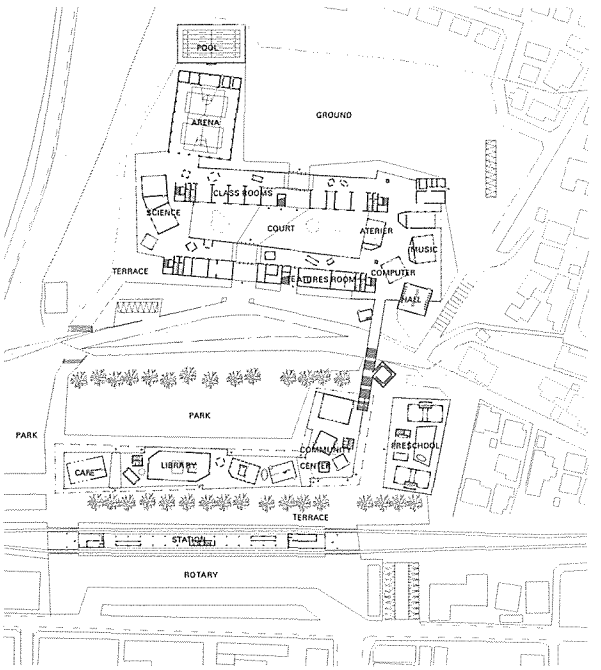
塚本　広場の床面はどうなっているの？

小笹　コンクリートブロックです。教会の音楽堂や病院の入口も同じ仕上げにしてます。

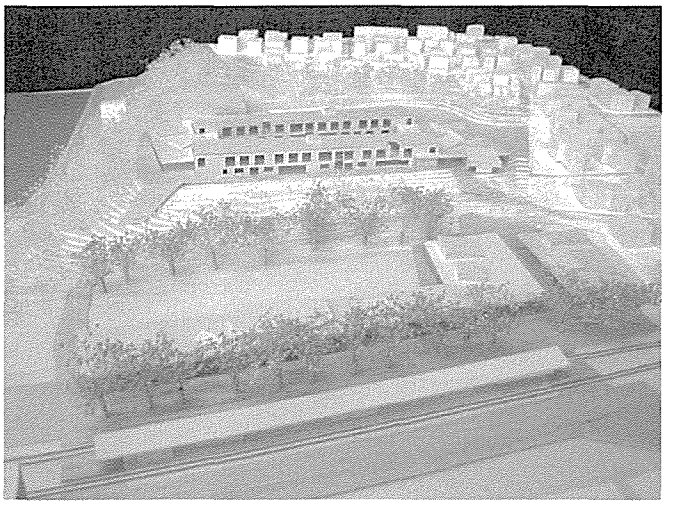
塚本　周辺から入り込めるというのがいい。

Connect

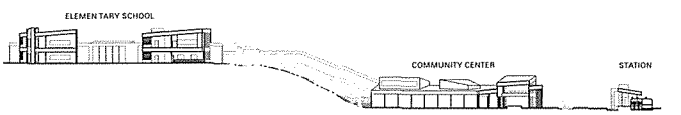
斉藤啓佑　Keisuke SAITO



1階平面図



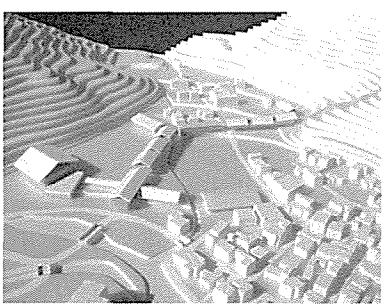
模型写真



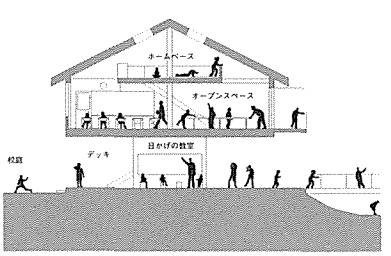
断面図

Shade of a school

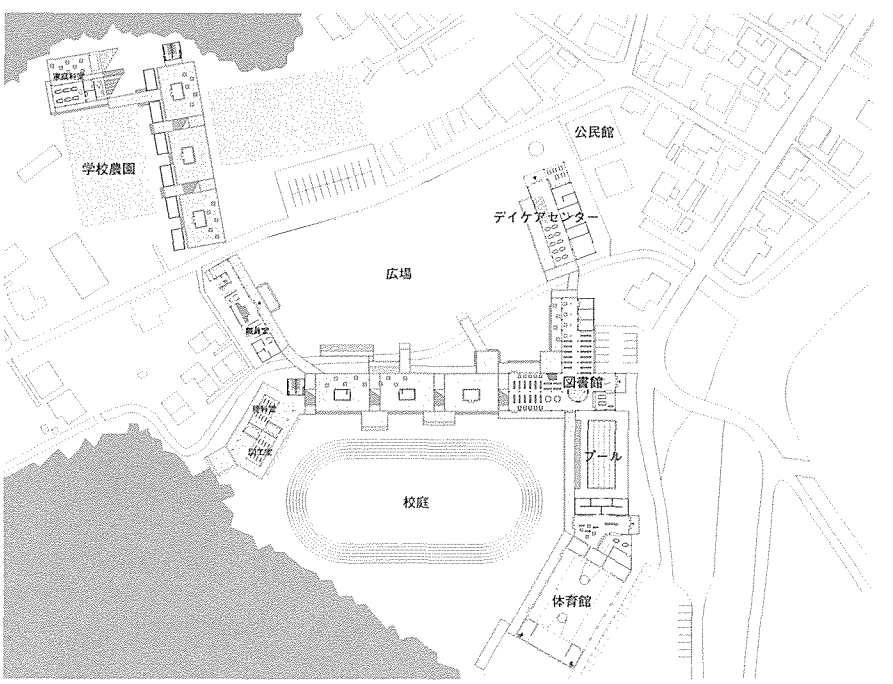
永野敏幸　Toshiyuki NAGANO



模型写真



断面図



1階平面図

古谷　路地を全部ひろっているね。ごみごみした周辺から入り込んでくると、バーンと開けた、日本のまちの中でもヨーロッパにあるような自律的な広場がつくれると示している。全面芝生にしたほうが面白かったかもね（笑）

塚本　例えば角のアーチを大きくしたり抑揚をつけることで、その下が街のリビングになったりする可能性もあったかもしれない。

坂本　図面にもっと時間をかけてほしかった、東京の中でこういう場所がありうるというのをはっきり示してくれたらもっとよかった。

Connect

斎藤　新潟市市街地から海の方へ10kmくらい離れた場所にある小学校です。公民館や図書館と一緒にして、地域の人が集まる場所にしました。隣接する駅による強い境界をなくすため、断面的にフラットにつないで、時間帯によって様々な人が来れるようにしています。

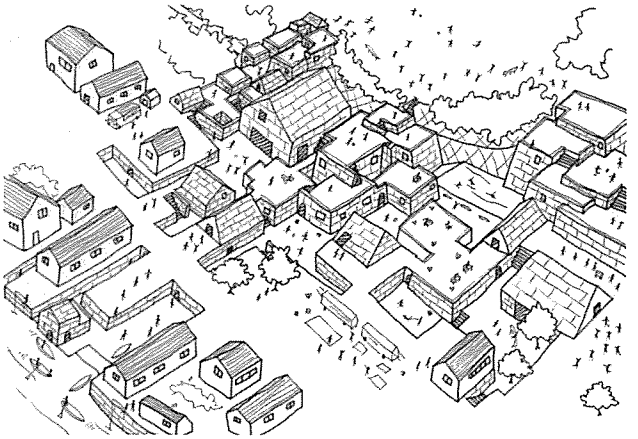
古谷　駅というのが乗降の為だけじゃない、地域の施設にスムーズにつながっているという提案ですね。商店街からのゆるやかな流れが段々と登っていく中に、個室が入り込んでいるという風に考えを発展させれば、もっと柔らかくなってよくなったかもしれないね。

Shade of a school

永野　奄美大島の奄美市郊外の住宅地です。古い集落などに囲まれていて、地域全体に守られているような学校を計画しました。周りから学校の活動が見えるように広々と建物を配置し、教室を高床式にすることで景色が広がるようにしています。下にできるスペースに子供が降りて遊んだり授業をしたりします。

コウド、カラボリ、ヤネ、シロヤマ

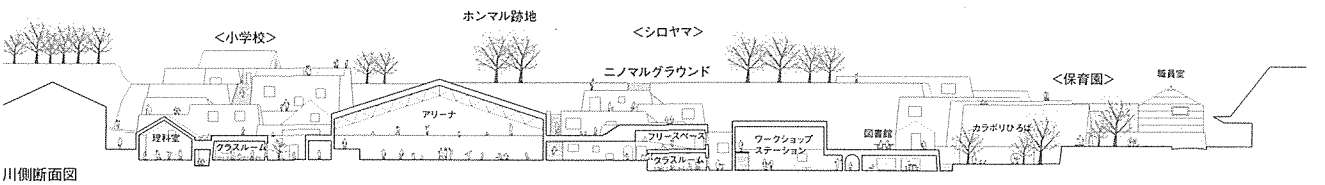
森中康彰　Yasuaki MORINAKA



俯瞰パース



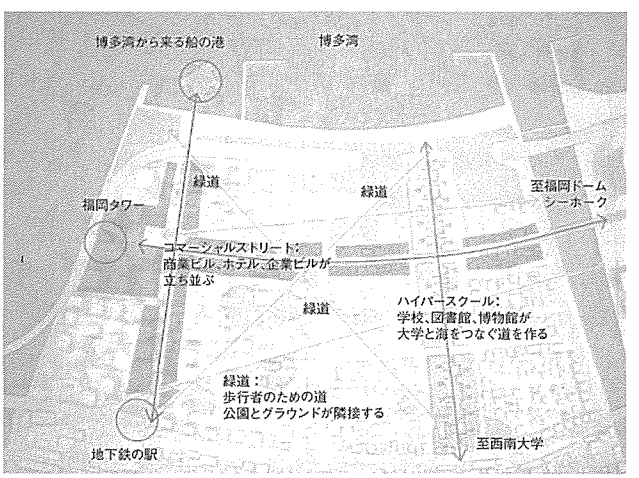
上階平面図



川側断面図

chain reaction

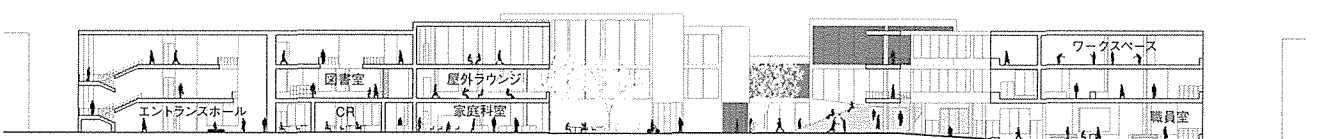
山本 茂　Shigeru YAMAMOTO



全体計画図



1階平面図



断面図

塚本　サイズとか分量とかがよくない気がする。

奥山　企画の段階でとまっている。建築の図面で魅力をだして欲しいなあ。

坂本　全体の関係を常に背負いながらやるといい。断片化してしまっている。

コウド、カラボリ、ヤネ、シロヤマ

森中　敷地は石川県小牧市です。城山という城の跡地です。既存の小学校が、城と川を分断するように建っているので、それらの間の経路になるような学校を建てることで、街の歴史を内蔵しているようにしたいと考えました。

古谷　体育館が大きいね。経路として斜面の一部のようにつくれたらよかったね。

塚本　やっぱり流れが見えないんだよな。

坂本　平面図から断片しか読み取れないんだな。

chain reaction

山本　福岡市から電車で10分、徒歩10分くらいのところにある埋立地です。街から活気をなくしている、強いゾーニングを考え直すことから始めました。まず、5つの学校と文化施設を集めて、縦横無尽に街区を貫通させています。緑地に商業施設や公共施設をボコボコだすことで、それらの関係をつくろうとしました。

奥山　構造のヒエラルキーが表現されているほうがいいね。均一化され過ぎてしまっている。

古谷　それぞれの学校の違いだとか、それぞれのアクティビティに合ったような固有の空間というのがあったほうがいい。

坂本　大味だけど、大味の構想は魅力的だね。

塚本　中庭のファサードとか、断面図とかを魅力的に描いてほしかったです。

大学院 建築意匠設計 第一
Postgraduate Studio Work: Spring Semester

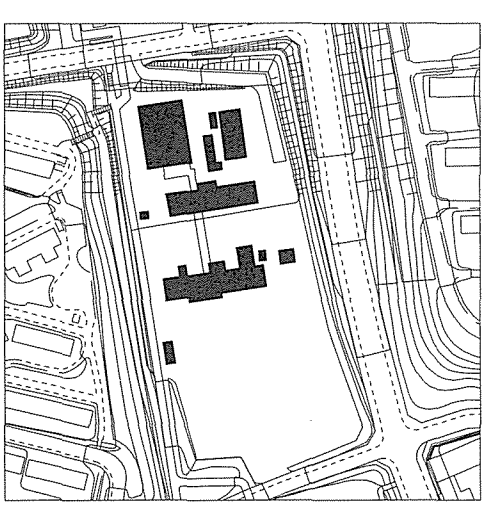
「廃校となった小学校の再生」
"Renovation of a Closed Elementary School"

担当：
湯澤正信［非常勤講師、関東学院大学教授］
Masanobu YUZAWA (Guest Professor, Kanto Gakuin University)
小泉雅生［非常勤講師、首都大学東京准教授］
Masao KOIZUMI (Guest Professor, Tokyo Metropolitan University)

坂本一成［教授］、八木幸二［教授］、
藤岡洋保［教授］、安田幸一［助教授］、
奥山信一［助教授］、塚本由晴［助教授］
Kazunari SAKAMOTO (Professor), Koji YAGI (Professor),
Hiroyasu FUJIOKA (Professor), Koichi YASUDA (Associate Professor),
Shinichi OKUYAMA (Associate Professor),
Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor)

以下は、授業の内容を学生編集委員の中村文香[M2]、吉田泰洋[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

［課題内容］
多摩ニュータウンにおける「都市計画・建築計画」の限界・失敗を踏まえ、廃校となった小学校を再生する。
敷地である旧東永山小学校は典型的な学校建築にみられる北側片廊下のハモニカ型プランであり、8mグリッドの均等ラーメン構造となっている。
この構造的特徴を建築的にどう展開できるのか。


敷地現状図

［講評］
湯澤　少子高齢化の中でうまく機能しなくなってきたニュータウンの廃校小学校をどう再生活用するかという課題は、実は難しいものであった。ニュータウンそのものがわれわれが常識として持っている計画技法を駆使して出来たものであり、周りには必要な公共施設は充足してしまっている。さらに、つくられた街の中には固有性がなかなか見つからない。それでも何人かが面白い案となっているのは、都市の持っている現実を感じ取ったからであろう。これは多分、机上でなくフィールドワークから見つけたものだと思う。計画的にアプリオリに出来たようなニュータウンに対しては、都市の持つ現実の強さとそれを感じ取る感性で対抗するしかないのではなかろうか。
小泉　昨年に続き、多摩ニュータウンを題材とした課題を出題した。建築的なアイディアを展開させるとともに、歩車分離・ゾーニングといった都市計画手法を検証したり、高齢者が増加している社会状況での街やコミュニティのあり方を問い直すなど、社会や都市に対する批評精神をもって課題に望むことが求められた。残念ながら、そのどちらかに終始してしまうものが多かった。特に既存建物の取り扱いに手を焼いたようだが、サスティナビリティが求められる時代において、ストック活用は重要なテーマとなるはずである。「建築」という形式によって新たな可能性を切り開くことができるのか、私自身も模索中であるが、学生諸君にもぜひ問題意識を継続してほしいと思う。

The assignment was to renovate a closed-down elementary school with particular consideration of past city planning mistakes made in Tama New Town. The site, Higashi-Nagayama elementary school, houses a typical school building with a corridor on the north side and a regular 8m rigid-frame structure. The latter is an important feature to be utilized.


湯澤正信　Masanobu YUZAWA
1949年　神奈川県出身
1972年　東京大学工学部建築学科卒業
1975年　同大学院修了
1975年～1979年　磯崎新アトリエ
1979年　湯澤建築設計研究所設立
現在　関東学院大学工学部教授　湯澤建築設計研究所主宰
主な作品：環境共生技術フロンティアセンター、
福島県立いわき光洋高等学校、小谷村立小谷小学校、
上野村ふれあい館、横浜市立十日市場小学校、
横須賀ヴェルニー公園カフェレストラン


小泉雅生　Masao KOIZUMI
1963年　山口県生まれ
1986年　東京大学工学部建築学科卒業、シーラカンス設立(共同主宰)
1988年　東京大学大学院修士課程修了
1998年　C+A(シーラカンス・アンド・アソシエイツ)に改組
2005年　小泉アトリエ設立
現在　首都大学東京准教授、小泉アトリエ主宰
主な作品：千葉市立打瀬小学校、空の中庭、プラモデル住宅、
吉備高原小学校、吉備高原幼稚園、ビッグハート出雲、
鴻巣市文化センター(クレア鴻巣)、戸田市立芦原小学校

ナガヤマヨリミチマーケット

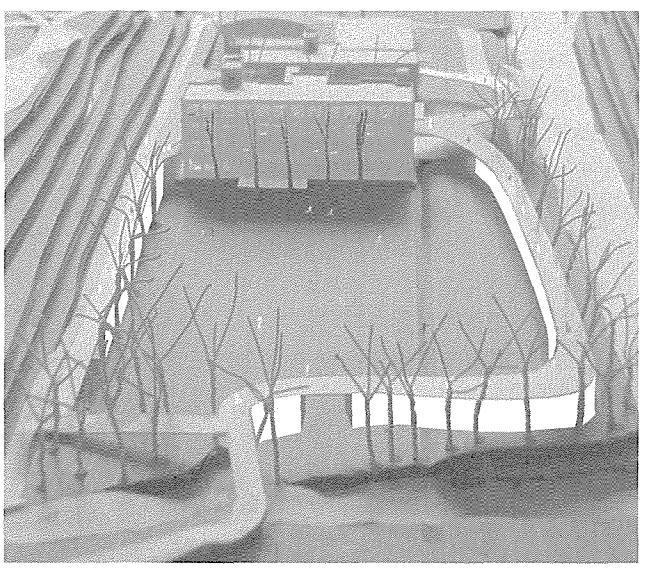
上原絢子
Junko UEHARA



歩行者と自動車が互いに安全に行動できるよう計画された、明確な歩車分離。しかし、そのことが逆に近隣住区を空虚なものにしてしまった。人は歩くことをやめ、便利な自動車を専ら使う。商店街・市場・お祭りの露店街など、車が通らないからこそ、生まれる魅力的な空間があるはずなのに。レベル差のある敷地を利用して人と自動車、地元人と来訪者、起伏のある敷地で分断されている住区をつなぐ結節点として計画することで、ニュータウンの活性化を促す。

ドライブスルー

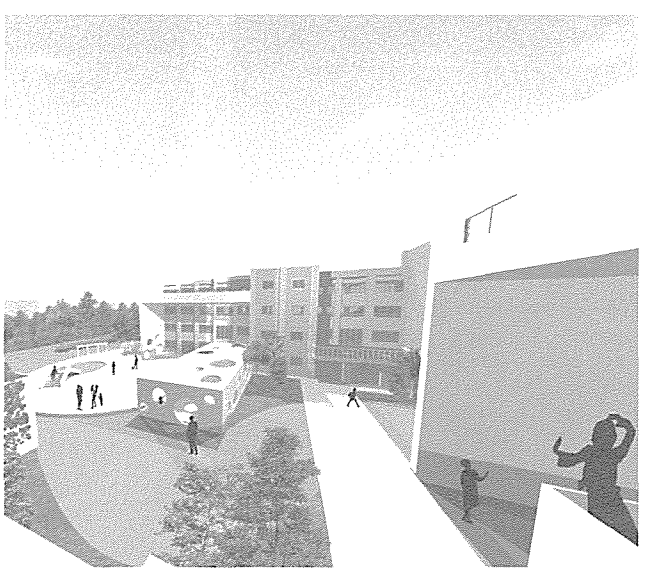
斉藤洋介
Yosuke SAITOU



小学校を開かれた場へと再生するために、歩行者専用の気持ちのよい緑道を敷地内に引き込み、校舎内に緑道ドライブスルーを計画する。「少し時間があるから学校まわっていこうかな」といった思考と行動が、出勤・通学・散歩など、緑道を常時利用するこの地域の生活にとけ込むように浸透してゆく。くるくる回る動線は、周辺環境のレベル差より校舎の二階レベルに配置した。その際にできるブリッジと地面の隙間に店舗・ホワイエ・レストラン・浴場を設け、緑道に新たなファサードを展開する。

東京マトリョシカ

吉田泰洋
Yasuhiro YOSHIDA



歩車分離による島状の生活空間と活動空間を持ったニュータウンに更正保護施設を作る。住民とともに共同活動をしながら一般生活に慣らしてゆくこのプログラムは、その住民との距離感がとても大切である。つかず離れず公の場から行為を共有する。それを小学校という場所で行う。現存する小学校の特別教室を門型フレームで拡張し、入れ子状にすることで新しい場所を作る。ある場所を拡張しながらも、遮断し、方向性を与えることで限られた場所のなかに距離感を生もうとしている。

東工大・同済大学（上海）ジョイントワークショップ2006「同済大学学生会館」

Titech-Tongji University (Shanghai) Joint Workshop 2006

王 伯佛／安田幸一
Wang Bowei, Koichi Yasuda

以下は、授業の内容を学生編集員の吉田泰洋[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります（敬称略）。

今年度の課題は「同済大学学生会館」である。中国の急速な発展に伴い、大学にはさまざまなスタイルの交流が生まれる場所が必要になっている。大学の内外両方の活性化を生むような新しい学生間の交流の場をつくることが主旨であった。

私達はまず上海近郊を散策し、古来からの庭園や屋台の並ぶ旧市街地を見てまわった。市の中心部にある上海城市規画展示館では、1/500で再現された上海の都市計画模型を見学し、上海市の新旧の地区の分布や同済大学の全体像を把握する大きな手がかりを得た。

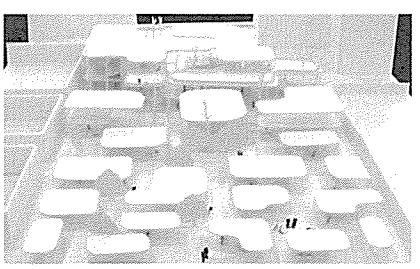
今年度は11月に同済大学にて2週間のワークショップを行い、翌年1月に東工大に同済大学の学生を招いてチームでの提案とその後の各自の発展を発表する2部構成で行われた。

11月の同済大学ではまず各自が敷地を選定し、個人で提案を行った上で敷地選定が同じものや方向性の近いものを考慮し、計9つのチームをつくった。スタディの合間に安田先生・王先生のエスキスを受けながらチームでの提案を明確にし、図面やプレゼン、模型などの作業を分担し進めた。最終発表はパワーポイントと縮尺1/200の模型を中心に行われた。さまざまな学生会館の提案がなされ、新しい問題点を明確にし、各自さらなる発展を目指した。

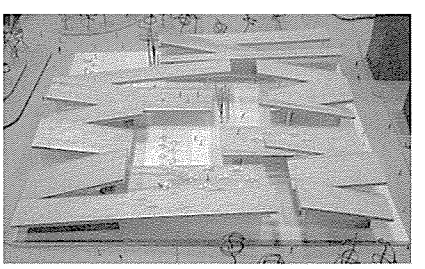
1月の東工大では各自がディベロップしてきたものを発表した。多くの提案がより個性的にさまざまな方向へと具体化していたことはとても印象的であった。

今回、短期間の滞在であったが同済大学の学生とチームを組むことでキャンパスの内外の状況や生活スタイル、文化の違いや歴史的背景を実感しながら課題に取り組むことができた。授業以外でも食事や生活を共に過ごす中で交流を深めることとなり、とてもよい経験であった。また、初めて東工大に同済大学の学生を招いての2部構成のワークショップを行い、さまざまな発見と経験を積むとともに、有意義な活動にすることができた。

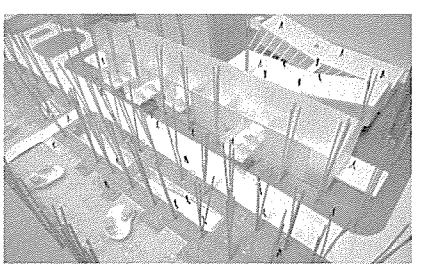
A Titech-Tongji University joint workshop was held from 4th to 18th November, 2006, in Shanghai, and from 14th to 23th January, 2007, in Tokyo, organized jointly by Professor Wong Bowei of Tongji University and Associate Professor Koichi Yasuda of Titech.
Twelve from Tongji University and sixteen postgraduate students from Titech worked on the design of a new student center for Tongji University, intended as a meeting point between city and university.



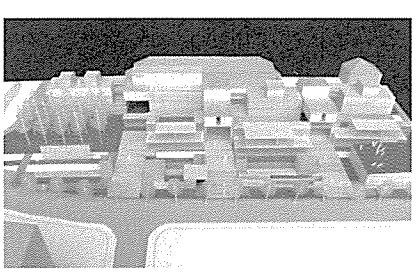
石川翔平×Leuthold Nicole Anne ×Lui Shaoting
「The Gate」



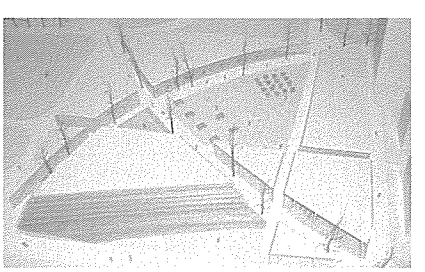
木下皓之×三桶士文×Xie Yuhu×Liu Quan
「TONJI ENTERTAINMENT SQUARE」



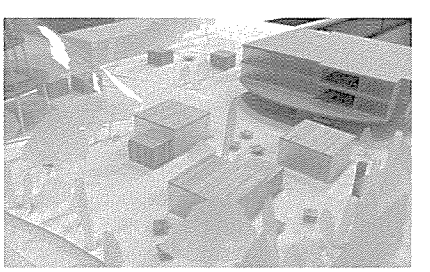
椛沢嘉孝×Ni Xin×Wan Dan
「CONTINUOUS STUDENT CENTER」



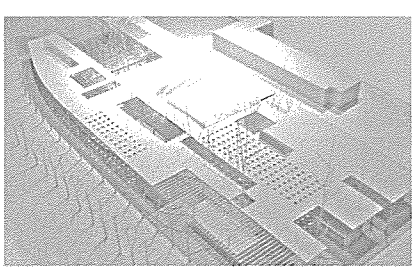
中村文香×丸山耕一×Dong Cong
「Position of housing in Tongji campus」



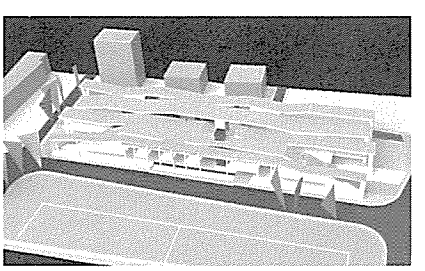
岩間直哉×Gao Jie×Li Yujun
「CENTER」



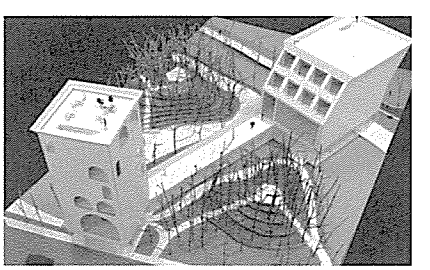
小林はるか×Krecl Sven Patrick×Yu Shuchen
「EXTENSION」



浅見泰則×金塚雄太×Tonny Rowe
「ACTIVITY GARDEN」



上原絢子×Brivan Din×Xiaolu Xie
「INTER-CENTER」



千田友己×吉田泰洋×Cui Min
「超国林 project -super garden-」

建築空間計画特論＋建築批評特論ワークショップ
「築地中央卸売市場」築地市場移転と2016年東京オリンピック

"Tsukiji Fishmarket" Transformation for Olympics 2016

アドナン・ハランバシック／塚本由晴
Adnan Harambasic, Yoshiharu Tsukamoto

2006年10月から12月にかけて、在ノルウェーの建築家であるアドナン・ハランバシック氏を迎えてワークショップが開催された。
現在の築地中央卸売市場（図1）は、老朽化から豊洲地区に移転が決定しており、跡地には東京都が2016年に開催を目指す東京オリンピックのためのメディアセンターの建設が計画されている。本ワークショップでは、築地市場移転と東京都による計画を前提として、現市場のリサーチと、跡地計画のプロポーザルを行い、プロジェクトブックの作成を行った。

以下は、授業の内容を学生編集員の千田友己[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります（敬称略）。

リサーチ：3つのキーワード

リサーチは"mapping","reinterpretation","precondition"をそれぞれのキーワードとした3グループに分かれて築地市場のフィールドワークを行なった。
mappingグループは築地市場の歴史や周辺環境、市場内の時間帯による使われ方の変化や、音、光、匂いなど多岐に渡る築地市場の状況の観察から築地市場の持つ活気や空間特質をレポートした。
reinterpretationグループは過去のオリンピック開催都市のケーススタディーと、実際に2016年開催時に必要になる施設調査や現計画案の分析を行なった。
preconditionグループは首都圏の市場の調査や敷地内外の機能配置の調査を行ない、敷地にかかる建築法規から、あり得るボリュームのスタディを行なった。

プロポーザル

以上の議論を踏まえ、参加者はリサーチ班とは別の7つのプロジェクト班に分かれ、共同で提案を行った。

まず敷地周辺をトレースして周囲とならすようにボリュームを配列する方向の提案がいくつか見られ、インフラである道路と細街路、運河のネットワークを敷地全体に取り込むグループ1案（図1）や、主要道路と運河のバックヤードを緑化して細分化したコミュニティを発生させるグループ4案（図2）、分割されたボリュームが滑らかに連続し、全体としてモニュメンタリティを持つグループ6案（図3）などがみられた。他方で、敷地全体に独自のルールを適応する案がみられ、建物の形態の操作をするグループ5案や、細街路と運河の形式にルールを持たせ、ボリュームを追従させるグループ3案などがみられた。

また独自のプログラムを付加するものでは、コンパクトオリンピックをテーマに敷地がオリンピック開催時の拠点となるようなグループ2案や、敷地内に巨大なスタジアムを計画し、オリンピック開催後も東京の主要施設となることを意図したグループ7案（図4）などがみられた。

今回のワークショップでは、リサーチ班とプロジェクト班を分けたり、オリンピック関連施設の配置を明らかにすることや、図と地の配色を反転させる「ノリマップ」（図5）などを統一した提出物とするなど、それぞれの提案が個人単位で比較可能な視点でのクリティックが行なわれた。また、全体としてはマスタープランの提案に留まる案が多かったものの、現在の築地市場の空間特性や、競りなどの活気ある空間の使われ方のリサーチから設計を始めることで、大規模な敷地計画を身体のスケールから設計する可能性を示す興味深い成果が得られた。

A workshop for postgraduate students was held with architect Adnan Harambasic and Yoshiharu Tsukamoto, Associate Professor at Titech, from October to December 2006. A research and development proposal for the huge site of Tsukiji fish market was prepared and a booklet issued to show the results.

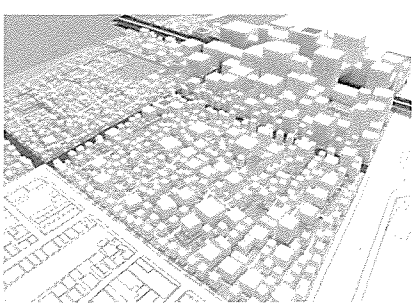


図1／グループ1案「Infra-tecture Degree」

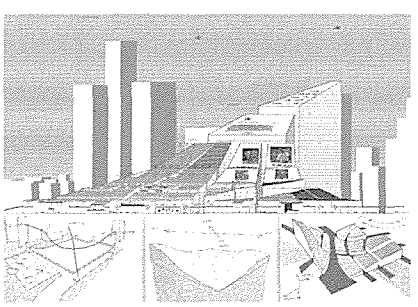


図3／グループ6案「The Valley」



図2／グループ4案「The backyard is green」

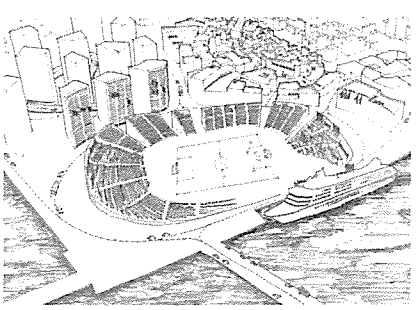


図4／グループ7案「Urban Stadium Tsukiji」

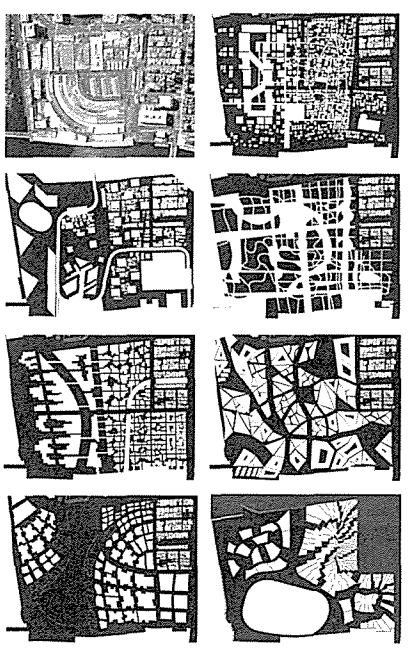
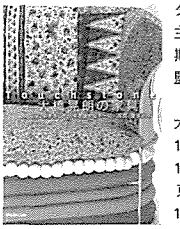


図5／敷地現況と各グループの"ノリマップ"

位置を定めること 「タッチストン 大橋晃朗の家具展」を通して

Situating a Position
Exhibition "Touchstone: Furniture Design by Teruaki Ohashi"

安森亮雄［助教］
Akio YASUMORI (Assistant Professor)



展覧会カタログ
(TOTO出版)

タッチストン　大橋晃朗の家具展
主催＝ギャラリー・間
期間＝2006年9月16日～11月18日
監修＝伊東豊雄、坂本一成、多木浩二

大橋晃朗／Teruaki OHASHI
1938年　愛知県生まれ
1962年　桑沢デザイン研究所卒業、
東京工業大学文部技官(篠原研究室)
1969年　東京造形大学助手
1972年　アトリエ設立
1984年　東京造形大学教授
1992年　逝去

2006年9月16日より2ヶ月間、家具デザイナー大橋晃朗の展覧会がギャラリー・間にて開催された。本展は大橋の逝去後初の個展であり、会場は実際に触れ座ることができるように配された家具と壁面に印刷された原寸図やドローイングにより構成され、大橋のデザインが展示空間全体で体験される場となった。筆者は展覧会にスタッフの一員として関わる機会を得、ここでは大橋の家具の特徴とともにそれらが現代の空間に示唆するものについて考えてみたい。

時間のある形式

大橋の家具デザインは箱物家具と呼ばれる収納家具に始まり、椅子に取り組むことで本格的に展開される。箱物家具は日本の伝統的な家具の延長にあり、建築の形態にも類似することから、大橋にとって親近感のあるものであった。しかし椅子は、身の回りにあるにもかかわらずどこかオリジンの曖昧なものであり、大橋はまず椅子を純粋な構成物として観察したと思われる。当初はシェーカー・チェアなどの歴史上の椅子の実測と複製を試みており、そうした結果、「台のようなイス／椅子ミリ」(1976年)がデザインされた。線状の木材で組まれたこの椅子には、椅子の輪郭のなかに「台」という、もう一つの構成が潜在している。椅子の原型としての「台」という概念にたどり着いた時、部材を組織する論理として、身体を持ち上げ支える構造として、また空間に置かれた存在として、大橋のなかで椅子がようやく腑に落ちるものになった。ここから大橋は古今東西の椅子と自由に対話し始める。ユーモラスな名前の6つのスチールパイプ椅子(1978年)、安価な合板を素材とした「ボード・ストゥール」(1981年)、鮮やかな色彩とチャーミングな形態をもつ「ドナルド・ダック」(1989年)に至るまで、大橋のデザインは飛躍し、それらすべてに「台」という構成が潜んでいる。

これらの椅子では、過去の椅子の形態と呼応しながら現在の素材が用いられており、ものの形式に人間の営みが蓄積され、現在と過去とがひとつに折り畳まれた時間の深さがある。一方で形式とは時間によって固定されるものであり、それゆえ新しいデザインを生み出す努力は、時間の継続を切断し、原型＝プロトタイプを更新することに注がれることも少なくない。大橋のデザインは、時間の蓄積を保ちながら形式を柔らかく操作し、ものの形式が時間の産物であることの豊かさを問いかけているように思えた。

家具の空間

大橋の試みは家具の概念や形態とともに空間的な側面を伴っている。まずは部材のスケールを見てみよう。大橋はキャビネット「パック」(1982年)で細いスチールパイプを用い始める。脚部は初期のパイプ椅子より一層細く交差した「違い違い」で組まれており、家具の全体は線分の集合へ分解され、部材が空中に浮かべられている。それはまるで家具が形をなす直前で一時停止されているようである。

また「ハンナン・チェア」(1985年)では、パイプの骨組みに布が張られ、身体を包む空間が現れる。座面は薄いクッションが積層され、かつて大橋は座布団を重ねて飛び跳ねた幼児期の記憶を語っている。大橋の椅子に座ると身体と椅子の重心を測りながらひとつの姿勢を探り当てるような感覚を覚えるが、彼は人の振る舞いを精密に観察し、曖昧な姿勢を受けとめようとしたのではないだろうか。

さらに建築の空間との関係を見てみよう。大橋はいくつかの住宅で造り付け家具を手がけている。「台のようなイス／椅子ミリ」が入る「代田の町家」(設計／坂本一成、1976年)では、ローボードとテーブルが主室を構成する水平材の一部となり、街路から連鎖する空間に家具の場所を刻んでいる。また「フロッグ・チェア」は「シルバーハット」(設計／伊東豊雄、1984年)のためにデザインされ、ベンチやキッチン台とともに、ボールトの下の非限定な空間に点在する家具の場所を印している。大橋は建築のなかに身体的なスケールの場所を見いだす類い希なるセンスをもっていた。これは、例えば近代のプラスチック成形家具が空間的なヴォリュームを有することは異なる独特な空間の感覚である。同時代に活躍した倉俣史朗と比較するとより鮮明であろう。倉俣は初期から透明素材で家具を作ったが、そこでは家具の存在は希薄になり、最終的には服やものの配列の状態が浮かび上がってくる。インテリアデザインも手がけた倉俣の家具が「空間生成的」であるとすれば、大橋の家具は「場所発見的」であると言えるだろう。こうした手の先から建築までのスケールに、家具によって私たちを空間に位置づける大橋の試みを見出すことができる。

位置を定めること

何度か会場に足を運びながら家具に触れ、飽きのこない感覚が何なのかを考えていた。それは「位置」が定められた心地良さと言えるのではないだろうか。位置とは、家具の形態やディテールが過去へつながる時間軸上の位置であり、部材の関係、椅子に腰掛ける姿勢、家具の大きさとプロポーションによる空間内の位置である。この多方向につながれた位置の感覚が、私たちに豊かな感情を抱かせるのではないだろうか。位置を定める、すなわち「定位」とは生物学では動物の帰巣本能を意味し、英語でそれを意味する「オリエンテーション」は、教会の祭壇が東（オリエント）に向けられることに由来する。つまり環境のなかで生物や事物に方位を与え、世界の中で適切な位置を定めることである。建築や家具をはじめ現代の空間では、絶え間ない形式の更新と環境的なサービスが多様に提供されている。そうしたなかで大橋の家具は、時間と空間の深さを伴う文化的な世界の広がりを垣間見させ、現代の空間を包含するもうひとつの全体性を示唆してくれたように思う。

萬来舎写真展と70周年記念講堂再見

Commemoration of 70th Anniversary Lecture Hall through "Banraisha" Photo Exhibition

吉田紗織［修士3年］
Saori YOSHIDA (M3)

2006年11月13日より2週間、建築家谷口吉郎と彫刻家イサム・ノグチの協同作品である萬来舎（慶應義塾大学）の写真約40点を中心とした写真展（東京展）が70周年記念講堂にて行われた。

展示計画と設営

70周年記念講堂は、1955年に建てられた本学に現存する谷口吉郎の唯一の建築作品である。築50年以上経た現在では、式典、部活動の練習や発表の場として利用されている。今回の展示では、講堂の廊下とロビーを展示スペースとする方向で検討した。展示スペースが分散することから、1・2階の廊下を萬来舎の写真展示スペースに充て、ロビーに図面や模型を中心とした萬来舎コーナーと70周年記念講堂の解説コーナーを設けた。講堂の躯体や壁面への負担を最小限に食い止め、多くの展示面と照明を確保するために、廊下とロビーの数箇所にピクチャーレールを設置し、照明は天井面に露出した配管に這わせ取り付けた。

展示計画の見所として、講堂解説コーナーでは百年記念館に保管されていたトレーシングペーパーに鉛筆で描かれた講堂の断面図やパースなどの図面（写真複製）を展示した。パースからは当初の計画段階での南側ファサードが現状のようにジグザグしておらず平滑になっていたこと、断面図からは梁の一部に鉄骨が使われていることが新たに確認された。

谷口吉郎と70周年記念講堂

会期中に行われた藤岡洋保教授によるギャラリートークでは、講堂の内外を一巡しながら解説をしていただいた。それによると、「清らかな意匠」を目指していた谷口吉郎の建築には、建物上部を張り出したり縦長の窓を使うことで軽快感を出したり、環境工学の視点から開口部をつくるといった特徴が見られるとのことであった。

このような視点から70周年記念講堂を改めて眺めてみると、確かに南側のファサードは二枚の庇を薄く出し、建物の二階をオーバーハングさせることで、建物自体は斜面に埋もれつつも重心は高く、軽やかに見える。また、講堂内部南側の格子のパターンは、自然光を乱反射させて取り入れつつ、安い材料で豊かな空間を演出しているようにもみえる。全体のヴォリュームは、高台の端に緩やかな下り勾配に沿って建つことで正面を低く抑えるよう調整されている。かつて講堂の背後に見えた富士山は現在では見えなくなってしまったが、本館前のデッキなど、変わりゆくキャンパスの中で、講堂は今も端正な表情を見せている。

展覧会を終えて

本展覧会は企画から展示まで1ヶ月という短期間であったため展示に関する情報の伝達が心配であったが、来場者数延べ600人と予想をはるかに超えるものとなった。今回の展示計画に関わることで、身近でありながら利用する機会の少なかった講堂のデザインを図面や模型と照らし合わせながら改めてじっくり見る貴重な機会となった。

講堂には、展覧会で設けた70周年記念講堂コーナーが今でも残してある。この展示が今後、学内外の少しでも多くの人に再見のきっかけとなれば良いと思うと同時に、ギャラリーとしても利用する機会が得られれば幸いである。

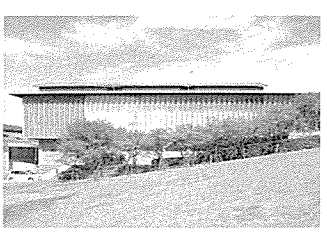
The Banraisha Photo Exhibition has held in November 2006 the 70th Anniversary Lecture Hall built by Yoshiro TANIGUCHI (1958).

For the exhibition, picture rails and lights were installed and a number of drawings were found to present.

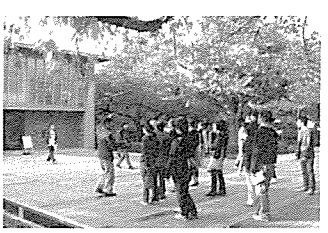
Some of the drawings and models are still on exhibit, awaiting the establishment of a permanent exhibition space.



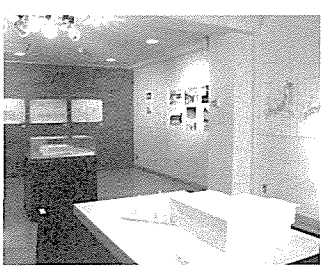
展覧会ポスター

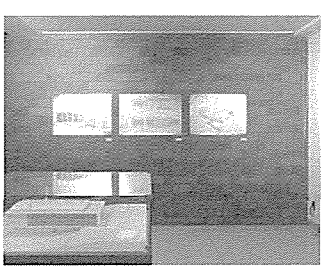

現在の70周年記念講堂


1階廊下の展示


ギャラリートークの様子


設営の様子


ロビーの展示（手前の萬来舎の模型）


70周年記念講堂スペース

世界の建築教育　インド都市建築大学に留学して

My Experience at School of Planning and Architecture, New Delhi

立川玲香［修士2年］
Reika TATEKAWA (M2)

なぜインドか

これは常に一番に聞かれる。私は、何かが過剰である状態や空間が好きで、中でも人が沢山いることは都市を絶対的におもしろくすると感じている。インドは旅行で訪れて衝撃を受けたこと、今後中国を抜いて世界一の人口になることから、何か得るものがあるはずだと考え、2005年夏から一年間、インド政府給付奨学金を受けて首都デリーの都市建築大学（SPA）修士課程に留学した。

建築デザインが、ない

インドの建築修士コースには建築デザインが存在しない。私は当初ハウジングを申請していたのだが、それは主にスラムや低所得者向けの住宅供給を計算に基づいて行う計画系であり、非常にシビアで固有の問題を扱っていた。インドは数学に強いことで有名だが、ここでは計画系＝計算学科と言われ、プレゼンテーションはエクセルの表と数字で埋まり、計画の評価は数値に支配されている。一方デザイン系には、学部で建築家のディプロマを取った者がより大きな設計範囲を扱うという位置づけで、アーバンデザイン／ランドスケープ／保存の3つがあり、単に建物をデザインしたいなら修士ではなく建築事務所で働く。私が選んだアーバンデザインコースは、社会学や環境学、不動産開発、インフラ計画などの全授業が必修として時間割が組まれ、それらの課題とデザインスタジオを同時に進めていくというかなりの詰め込み型であった。

牛が、いる

今、インドは現代化の渦中にいる。「現代化＝西洋化」の図式は、授業で扱うケーススタディに欧米の事例が多いことや、街中に勢いよく増えるショッピングモールやカフェからも見て取れる。政府は、交通の妨げになり糞をまき散らすデリーの牛に賞金を掛けて締め出そうとし、授業のゴミ回収計画でも、効率的な回収ルートやゴミ捨て場のサイズ、必要トラック数は計算するが、そこに牛は登場しない。実際は、生ゴミの大部分はトラックが来る前に彼らの胃袋に消え、スラム住民はその糞を固めて燃料として活用している。それならば、牛が道路にはみ出さない誘導的なゴミ（食糧）捨て場の配置や食べやすいゴミ捨ての形をデザインした方がよっぽど実際的だ。

ゴミ箱が、ない

「先進国＝きれい」と信じてやまないインド人だが、決して自分では掃除をしない。例えば学校の寮は、個室以外は毎朝掃除カーストのおばさん達がピカピカに掃除してくれるので、部屋で出たゴミはドアの外に掃き出しておくか、ゴミが出るたびに部屋の外に投げればよい。教室でも、模型のくずは全て床に捨て、授業の合間に運ばせるチャイのカップも飲み終えたその場に放置する。だから学校中にカップが置いてある。都市レベルでも同じで、バスの切符や食べ物のパックなど、不要になったその瞬間に自分の手から離す。しかし、一人あたりのゴミ排出量が増え、素焼きカップや木の葉の皿がプラスティックに変わった今、それらは土に還らない上に掃除も行き届かず街中にゴミが散乱している。それでも自分では掃除せず、しびれを切らすと人を呼びつけ掃除させる。

インド・モダンへ

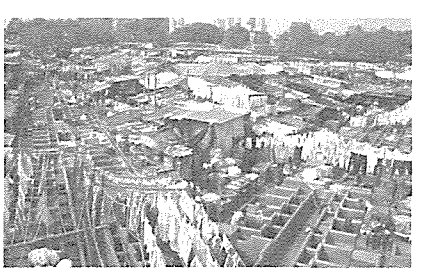
このようにインドでは、様々な「行為」が個人から切り離されていて、その分個人の所有物が少なくなる。掃除をしないから部屋からゴミ箱や掃除機が消え、洗濯をしないから洗濯機やアイロンが消え、お茶を運んでもらうからポットもカップもいらない。それは一見、物質的な貧富の差として映り、コマーシャリズムはそこを巧みに操ってモダンライフを売っているのだが、むしろ、分業意識の違いによる合理的なやり方だと考えた方がおもしろい。

これを徹底していけば、室内は電化製品が一切ない簡潔コンパクトな空間になり、代わりにそれらを一括して引き受ける巨大なドービーガート（洗濯場）やアイロン場、ダイニングキッチン、無数の移動型／固定型インフォーマルの物売りといった要素がうまくマネージメントされて公共空間として現れてくる、ダイナミックで他律的なインディアン・モダンの都市モデルが生まれる可能性が十二分にある気がする。

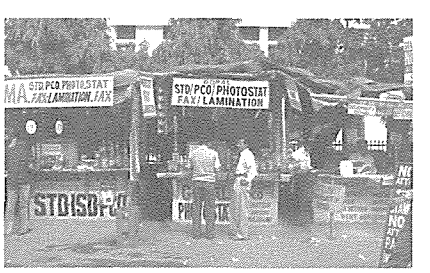
I studied in the School of Planning and Architecture, New Delhi. Because there was no architectural design master course, I studied urban design, so it was a good opportunity to understand the Indian city and society.

India has various social differences and a division of labor awareness by caste. For example, neitherdormitory nor school nor city has a trash box because there is no custom of individual cleaning. Similaly, many aspects of personal life are separated, such as huge washing areas, an ironing shop, and food stands that appear in the city.

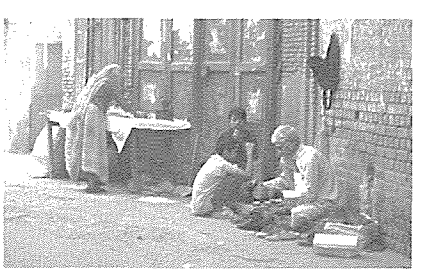
Such things may characterize modern Indian cities, but one can also grasp that "modernization=westernization" is spreading at high-speed when you see continually increasing malls and cafes.



都市の洗濯場ドービーガート（ムンバイ）



オフィス脇のインフォーマル・スタンド（ニューデリー）



住宅脇のアイロン屋とシューズ・リペアー（オールドデリー）

世界の建築教育 中東工科大学に留学して

My Experience at Middle East Technicical University (METU)

沖村徹也［修士２年］
Tetsuya OKIMURA (M2)

「ヨーロッパでない」トルコを選ぶ

トルコとインドという組合せという編集の意図は「ヨーロッパでない」ことだと思う。だから自分がトルコを選んだ理由から書くのが素直だと思う。専門の何かを学びにいくことと日本を離れる時間をつくることという留学の理由があるならば自分も後者だ。日本は島国らしく東アジアのなかでも確立した伝統的な精神的・物質的な文化をもち、一方でトルコはヨーロッパに接していて西アジアの伝統的な文化をもっているが、双方ともにそれぞれ異なった遣り方で欧米化している側面をもっている。実は世界には似た状況をもつ地域がたくさんあるが、いまの日本のそうした状況を正確に考えるためには、そのなかからアジアの極東にある日本にたいして極西という図式的にわかりやすいトルコがよいと考えた。

私たちは既存のものから無意識のうちに教育された感性で、外来ものや主流ものをアレンジして現代的にものをつくり出していることに、日本にいると気づきにくい。しかし例えばトルコのなかの欧米化の形跡をみてとることは日本のなかのそれをみる参考になる。自分をつくっている文化や社会の精神を歴史の延長として把握することは重要だが、結局のところ、主流なものや日本的なものを意識せずに、いま自分が感じてよいと思うことを信じて制作したものさえも、日本に存在するいまの文化に回収されていくのだと確信するようになった。それならばと、いまの時代として自分の力で感じて納得できることをモノの形として、人にわかりやすく正確にとどめることを第一に考えながら設計課題などに取り組んでいた（fig-1）。

トルコの作家オルハン・パムク氏は代表著作「わたしの名は紅」の日本語訳版の冒頭につけた日本の読者にあてたメッセージのなかでこう書いている。

「この小説は、…西洋文明の外にあるが、しかしその力の影響下にある世界で、西洋以外のどこかで生きている創造的芸術家たちの写実主義と芸術…の苦悩の物語として読まれるべきものです。」

アンカラの風景

9月の夏の明るすぎる太陽の下、飛行機が到着したイスタンブールから大学のあるアンカラに向かう列車に揺られて、ほとんど荒野、岩山、空だけの先の見えない風景を7時間ものあいだ眺め続けた(fig-2)。“からっぽの大地”と“自分の座席にあふれたモノの多さや内容”とのアンバランスさが、文化的な留学をするはずの自分を強烈に不安にさせた。

アンカラのまちは起伏のあるからっぽの大地のなかにできた都市で中心部を少し離れると所々に剥き出しの大地がのぞいている。街の建物群は60年代以降の世界的な大量消費時代を憶わせる工法とデザインの中層アパートが支配的で剥き出しの大地も目立つので、都市化する前の姿が目に浮かぶようである。街の中心部から離れて1956年に創立された大学のキャンパスも同様である。実は構内には緑が富の象徴のように豊富にあるのだが夏のあいだは散水ポンプが日中ずっと稼動しておりその維持しがたさが伝わってくる。同時に大学のキャンパスにいると脳裏にあるからっぽの大地がちらつき、こうでなかったかも知れないキャンパスを想像させる力が働くことを心地よく思う。

METUの建築教育

不安をよそに設計製図の雰囲気と進め方は東工大のそれに似ている。広い製図室のなかに一人ずつ与えられた製図机をグループごとに並べて、リサーチ・エスキス・プレゼンテーションをおよそ3ヶ月半かけて行なう。エスキスでは図面やスケッチや模型が表現するものを優先し、個人が表現に託したイメージや言葉についての議論はあとまわしか省略されて進められる。自分が参加した課題はともに明快なコンテクストへの対応が求められ、それに対してコンセプトを的確に表現してそれが多くの人に共有された学生が評価されたように思う。

設計や読書や考えごとなど好きなことに好きなだけ時間とお金を使うことができたこの一年は幸せな時間だったように思う。日本を離れるという目的でこれから留学先を決める人にとって「ヨーロッパでない」ということが想像力のひとつになれば幸いだとおもう。

I chose Turkey instead of a more European country, since Japan and Turkey have similar situations. They have their own traditional culture, but in the other hand they are Americanizing or Westernizing in their own ways. To better understand the situation of my country, I decided to go to Turkey.

In METU I tackled design subjects, pursuing my feelings based on historical knowledge, instead of majority or Japanese tastes, to make design decisions.

By the way, naked landscapes in Turkey gave me special a experience, but the education in METU is similar to that in TIT.

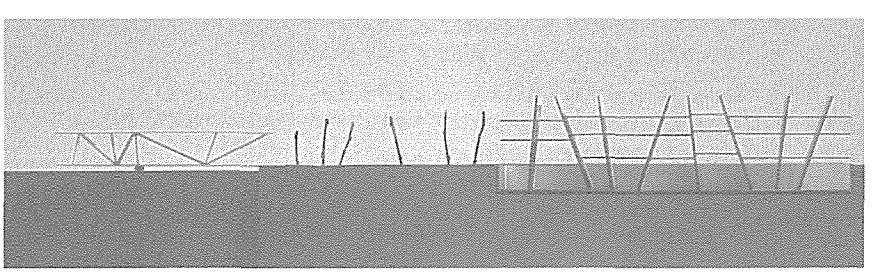


fig-1／コンセプト模型

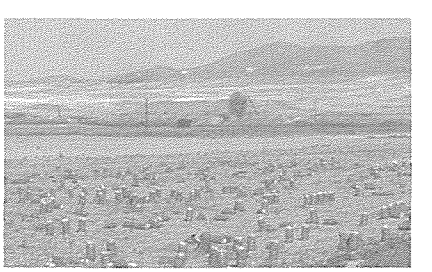


fig-2／車窓からの風景

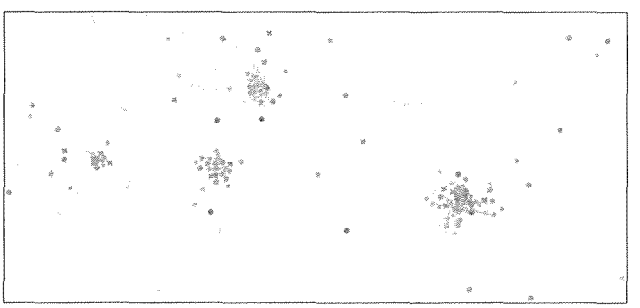
投稿作品紹介
Contributions

ここではコンペの応募案など、設計製図の授業以外で制作された学生の作品を募り、紹介しております。なお、投稿者の所属は本誌の発行日現在のものです。

タネ×タバコ
Smokers' style competition 2006　アイデア部門　佳作

岩間直哉［修士2年］、金塚雄太［修士2年］
Naoya IWAMA (M2), Yuta KANEZUKA (M2)

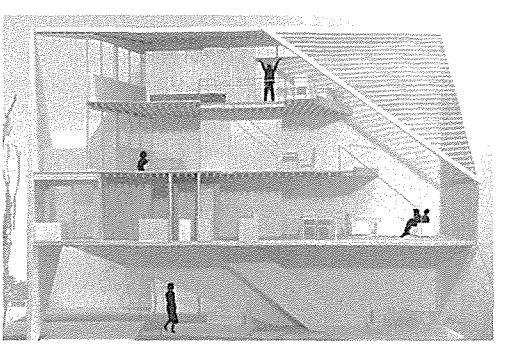
もし、タバコの中にタネが入っていたら、と想像してみよう。吸い殻として捨てられていくタバコの終わりが喫煙スペースを変える始まりとなる。喫煙者は様々な軌跡を描きながら、自らの喫煙行為と同時に一つの種を植えていく。喫煙者がそこにいた、という痕跡がタネとして残り、やがて花を咲かせるだろう。お互いが顔を合わせる距離感を持つ花畑は、喫煙者のみでなく非喫煙者にとっても価値のある、双方が共存できるスペースとなるだろう。喫煙者がまいた小さなタネによって小さな緑が都市を彩り始める。



たてあなにたかゆか
smart+comfort 2006
省エネルギー住宅設計コンペティション　優秀賞

吉田泰洋［修士2年］
Yasuhiro YOSHIDA (M2)

高密住宅地の細長い敷地において、斜めに切り掛かれた開口は、プライバシーを確保しつつ内部空間に抑揚を与え、ルーバーによって上空から太陽のエネルギーを抑制し内部に季節によるさまざまな表情を見せる。また一層持ち上げられることで、下流と上流の空気をつなげ通風を確保するだけでなく、風通しの良い大きな外部リビングとして生活に新たな場面を与える。高密住宅地において要素を付加しがちな中で、よりシンプルで明快な建築像を提案することで、住民とライフスタイル、そしてエコシステムが補完しあうような関係を目指した。

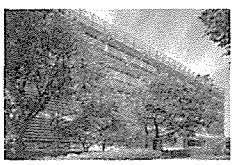


ニュース
News

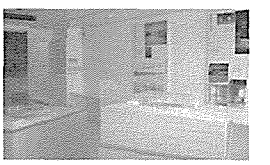
緑が丘1号館レトロフィット
Midorigaoka #1 Building Retrofit

建築学専攻（安田、竹内、湯淺各研究室）が計画・設計に関わった緑が丘1号館（建築・土木棟）の改修工事が、2006年3月に完了した。建物の外観は、耐震と光・熱環境制御を統合したブレース・ルーバーで一新された。またトイレやリフレッシュルーム、展示コーナーなどの設計には、建築デザインコース各研究室の大学院生も参加し、小さいながらも様々な空間がつくられている。現在展示コーナーでは、前号でも紹介した清家清作品の模型やパネルが展示され、設計教育の場として活用されている（詳細は新建築2006年7月号などで紹介）。

The renovation of Midorigaoka #1 Building was completed in March 2006 under the supervision of the Department of Architecture and Building Engineering (Yasuda Lab., Takeuchi Lab. and Yuasa Lab.). The building is now covered with a louver-brace screen as a combined element of earthquake-resistant structure and environmental control. Inside the building, the new restrooms, "refresh" rooms and the exhibition room were designed by each laboratory of the Design Course.



緑が丘1号館南側外観



展示コーナー（清家清作品のパネルと模型を展示中）

東京工業大学 卒業設計・修士制作展2006
Undergraduate Diploma and
Master's Design Project Exhibition 2006

「東京工業大学 卒業設計・修士制作展2006」が2006年6月24日から7月8日まで、百年記念館1階ホールで行われた。展示は大判のドローイングや模型により迫力あるものとなり、入場者数は記帳者だけでも938人を集め、またkaも30号とバックナンバーとを合わせて約100部を販売することができた。来場者の中には東工大の他学科の学生だけではなく、他大学の教員や一般の方たちも少なからず含まれ、この展覧会が多くの人々の関心を集める毎年の恒例行事として認知されてきていることをうかがわせた。



会場の様子

The exhibition of works selected from among last year's diplomas was held from June 24th through July 8th, 2006, in the Centennial Hall at Titech. It attracted more than 938 visitors. It seems that the event has become more popular and is increasingly well attended.

レンゾ・ピアノ事務所（RPBW）での学生インターンシップ
The Student internship
at Renzo Piano Building Workshop (RPBW)

レンゾ・ピアノのパートナーになっている石田俊二さん（清家研究室OB）の尽力により、インターンシップが可能となり、修士課程の梶澤嘉孝君が2月からジェノア事務所で6ヶ月間の研修中である。ピアノ財団の奨学金により、世界のトップクラスの大学から院生を受け入れていて、東工大からは隔年で1名、ジェノアまたはパリ事務所に派遣出来ることになった。研修報告は次号に掲載する予定。

A student internship at RPBW has been started through the efforts of Mr. Shunji Ishida a graduate of Seike lab. and a partner of RPBW. One graduate students from Tokyo Tech can train for six months at RPBW in Genoa or in Paris with a Piano Foundation scholarship. Details of the program will be reported in the next issue.

Information

TIT建築設計教育研究会会則

［第1条］ 名称
本会はTIT建築設計教育研究会と称する。
［第2条］ 目的
本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援するとともに、学生と会員、会員相互の交流を促進し、設計技術向上の相互啓発を行うことを目的とする。
［第3条］ 事業内容
本会は次の事業を行う。
①国内外の建築家・特別講師等の招聘、②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存、③展示会・講演会等のイベントの開催、④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行、⑤その他、本会の目的にかなう事業
［第4条］ 会員
本会は本会の目的に賛同する会員によって構成される。会員は東京工業大学の卒業生を中心とした個人または、上記の個人の関与する法人とし、その会費を基金として本会を運営する。
［第5条］ 会費
本会の会員の会費は1口10万円とし、0.5口（5万円）よりとする。期間は1年間以上6年間までとする。（期間削除＝第8回総会にて承認）個人会員は1口1万円とし、1口よりとする。（個人会員の設置＝第8回総会にて承認）
［第6条］ 役員
本会は次の役員を置く。
運営委員9名（運営委員長1名及び監査役1名を含む）
［第7条］ 総会
会員（法人の場合はその代表）等による総会は年に1回以上開催するものとする。
［第8条］ 会計
本会の会計年度は1月1日に始まり、12月31日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。
~~［第9条］存続期間~~
~~本会の存続期間は平成2年10月1日より平成8年9月30日までとする。~~（この項削除＝第5回総会にて承認）
［第10条］ 会則
本会則は平成2年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決裁を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。
（以上）

（細則）
TIT建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。
［第1条］ 役員
本会の役員の構成は下記による。
運営委員9名（学外運営委員6名、学内運営委員3名）
運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。
東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授その他2名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により6名を選任する。
運営委員長（会の代表者）1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。
［第2条］ 総会
総会は会員（法人の場合はその代表）及び東京工業大学建築学科教官（教授・助教授）出席による集会とする。
役員による事業報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決裁を行う。
（以上）

2006年度大岡山建築賞

2006年度大岡山建築賞受賞者は以下の通りに決定し、7月に開催予定の第17回総会にて授賞式が行われる。

●大岡山建築賞　該当者なし

●大岡山建築賞銀賞

五十嵐麻美「道に入り込む所作」（卒業設計）
小滝健司「斜面にちらばる小さな地面」（卒業設計）
佐々木啓「corner ≒ city」（卒業設計）
宮下淳平「いえの島」（卒業設計）
Tamsin Green「VISUALISING THE DEATH NARRATIVE OF TOKYO」（修士論文／制作）
文野義久「ハイブ・ステーション　多面隣接乗換システムによる新宿駅再編計画」（修士論文／制作）
三木達郎「空所とヴォリュームが連鎖する都市建築」（修士論文／制作）

2007年度役員（07.5.20現在）

［顧問］ 林昌二（S28卒）（株）日建設計名誉顧問、戸尾任宏（S29卒）（株）建築研究所アーキヴィジョン代表取締役、山下和正（S34卒）（有）山下和正建築研究所代表取締役所長［運営委員長］三栖邦博（S38卒）（株）日建設計会長［副委員長］仙田満（S39卒）環境デザイン研究所会長［監査役］日置滋（S48卒）清水建設（株）建築事業本部設計本部副本部長［運営委員］岡部富雄（S39卒）（株）構造計画研究所取締役、服部紀和（S39卒）（株）竹中工務店専務取締役、坂本一成（S41卒）東京工業大学大学院教授、八木幸二（S44卒）東京工業大学大学院教授、藤岡洋保（S48卒）東京工業大学大学院教授

2007年度法人会員（07.5.20現在）

［社名／本会への代表］ IAO竹田設計／竹田秀道、アトリエテン／高田典夫、アール・アイ・エー／宮原義昭、葛西潔建築設計事務所／葛西潔、鹿島建設／長幸男、金箱構造設計事務所／金箱温春、環境計画研究所／竹内義雄、環境デザイン研究所／仙田満、久米設計／伊平則夫、建築研究所アーキヴィジョン／戸尾任宏、建築資料研究社・日建学院／井澤真悟、構造計画研究所／澤田敏実、清田育男計画設計工房／清田育男、竹中工務店／服部紀和、日建設計／三栖邦博、日本設計／高橋徹、藤井建設／藤井正喜、山田守建築事務所／宮原浩輔、レーモンド設計事務所／森山興眞、渡辺建築事務所／渡辺益男

2007年度個人会員（07.5.20現在）

［氏名（卒年）］ 黒田正巳（S13）、高田清（S16）、堯天義久（S19）、栗原勝（S22）、中島隆（S26）、佐久田昌昭（S27）、中村晃（S28）、林昌二（S28）、半澤重信（S28）、田中正美（S29）、戸尾任宏（S29）、吉井一夫（S29）、高木賢（S30）、城間勇吉（S31）、渋田実（S32）、中神弘（S32）、松下謹三（S32）、青柳司（S33）、太田雅三（S33）、佃隆介（S33）、増田一真（S33）、富野壽（S34）、村口昌之（S34）、山下和正（S34）、北村吉一（S35）、野村邦夫（S35）、藤江澄夫（S35）、松野公一（S35）、佐々木雄二（S36）、伊達美徳（S36）、鈴木歌治郎（S37）、武岡茂生（S37）、三栖邦博（S38）、有田桂吉（S39）、岩岡文彦（S39）、岡部富雄（S39）、片野毅（S39）、仙田満（S39）、只野康夫（S39）、服部紀和（S39）、平川長（S39）、満田恒男（S39）、森山興眞（S39）、味生威（S40）、野崎英彦（S40）、森下清子（S40）、岩沢二郎（S41）、坂本一成（S41）、鈴木清友（S41）、大嶋顕世（S42）、小西敏正（S42）、瀬尾和大（S42）、瀧口克己（S42）、光岡宏（S42）、矢口彰（S42）、奥村光男（S43）、西村博道（S43）、花島晃（S43）、細入誠一（S43）、村田靖夫（S43）、和田章（S43）、藍澤宏（S44）、小玉祐一郎（S44）、佐藤俊作（S44）、清水弘道（S44）、杉山文正（S44）、田中享二（S44）、牧圭介（S44）、八木幸二（S44）、山口洋一郎（S44）、青木義次（S45）、岡本慶一（S45）、岡本聖司（S45）、鳥羽広明（S46）、梅干野晃（S46）、山口潤二（S46）、大野隆造（S47）、猪子順（S47）、篠野志郎（S47）、杉原繁樹（S47）、西尾秀平（S47）、小河利行（S48）、苅谷武郎（S48）、武田光史（S48）、日置滋（S48）、藤井修二（S48）、藤岡洋保（S48）、保坂一夫（S48）、森行臣（S48）、尹原基（S48）、有里公徳（S49）、高田典夫（S49）、時松孝次（S49）、豊田雪夫（S49）、三橋伸夫（S49）、渡辺徹（S49）、上山博夫（S50）、河野晴彦（S50）、小林謙一（S50）、清水寧（S50）、土屋隆（S50）、高橋寛（S51）、田中一晴（S51）、宮木宗和（S51）、松永浩一（S51）、木谷靖孫（S52）、鈴木敏彦（S52）、前田康憲（S52）、猪村彰（S52M）、熊谷昌彦（S53M）、浦春彦（S53）、白川裕信（S53）、宮本文人（S53）、山口浩司（S53）、岡河貢（S54）、鈴木敏彦（S54）、多田誠（S54）、常木康弘（S54）、武田賢治（S54）、武田直行（S54）、前田哲男（S54）、吉田親史（S54）、小室清高（S55）、三上貴正（S55）、伊東龍一（S56）、乾靖（S56）、仲野順一（S56）、宮本昌明（S56）、安田幸一（S56）、高橋晶子（S57M）、津金猛（S57M）、小林一雄（S57）、酒井星志（S57）、竹内徹（S57）、西田達生（S57）、平島信一（S57）、山口勝巳（S57）、安部武雄（S58D）、坂田弘安（S58）、横山裕（S58）、藤井晴行（現職）、新井貴（S59）、小澤丈夫（S59）、帽田秀樹（S59）、中村安志（S60M）、大佛俊泰（S60）、小田宏正（S60）、加茂紀和子（S60）、所司護（S60）、湯淺和博（S60）、若松均（S60）、中村芳樹（S61M）、奥山信一（S61）、曽我部昌史（S61）、竹内昌義（S61）、山田泰範（S61）、鈴木達也（S62）、塚本由晴（S62）、鈴木重則（S63）、五十嵐規矩夫（H1）、石川真治（H1）、今井賢治（H1）、斉藤千尋（H1）、鹿野秀馬（H2）、山崎鯛介（H2）、岩岡竜夫（H2D）、荒井庸行（H3）、片庭修（H3）、中井邦夫（H3）、木島千嘉（H3M）、渡邊哲也（H3M）、櫻井康雄（H4）、鞆野淳司（H4）、陸鐘驍（H4）、菅原正則（H5M）、足立真（H5）、保住秀樹（H5）、藤岡務（H6M）、鍵直樹（H6）、是永美樹（H6）、那須聖（H6）、井澤真悟（H7）、木下芳郎（H7）、村田淳（H7）、井上寿（H8D）、七田裕（H8M）、宗高菜々子（H8）、安森亮雄（H8）、笠井誉仁（H9）、西村康志郎（H9）、吉田佳代（H9）、清水加陽子（H10）、菅原麻衣子（H10）、荒井拓州（H11）、熊谷知彦（H11）、鈴木比呂子（H12）、飯塚裕介（H12）、車熙運（D2）、平林政道（H13）、松島潤平（H15）　以上199名

編集後記

昨年7月15日に本学名誉教授・篠原一男先生が他界されました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。
本号では巻頭記事として篠原先生と親交のあった多木浩二さんにインタビューに登場いただき、
篠原先生の建築作品とその背景について貴重なお話をしていただきました。
また本学名誉教授の平井聖先生には篠原先生との思い出を記していただきました。

表紙写真＝「谷川さんの住宅」1974年（設計：篠原一男）
写真：多木浩二

編集委員：坂本一成／奥山信一／中井邦夫／安森亮雄［以上幹事］／
五十嵐規矩夫／藤井晴行／横山裕／是永美樹／飯塚裕介／山崎鯛介
学生編集委員：大内祥子／本橋良介／浅見泰則／石川翔平／
岩間直哉／木下皓之／千田友己／中村文香／服部暁文／吉田泰洋
取材・編集協力：大学院修士課程1年有志
デザイン：山口デザイン事務所　山口信博／大野あかり
翻訳：デイヴィッド・スチュアート
発行：TIT建築設計教育研究会［2007年6月発行］
事務局：東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻　藤岡洋保研究室
定価：本体1,000円＋税

Editorial Committee: Kazunari SAKAMOTO / Shin-ichi OKUYAMA /
Kunio NAKAI / Akio YASUMORI (above steward) / Kikuo IKARASHI /
Haruyuki FUJII / Yutaka YOKOYAMA / Miki KORENAGA /
Yusuke MESHITSUKA / Taisuke YAMAZAKI
Student Editorial Committee: Shoko OUCHI / Ryosuke MOTOHASHI /
Yasunori ASAMI / Shohei ISHIKAWA /Naoya IWAMA / Koji KINOSHITA /
Yuki CHIDA / Ayaka NAKAMURA / Akinori HATTORI / Yasuhiro YOSHIDA
Reporters: M-1 students
Design: Nobuhiko YAMAGUCHI, Akari OHNO (Yamaguchi Design Office)
Cover: Tanikawa Residence 1974 (Kazuo SHINOHARA)
Cover Photograph: Koji TAKI
Translation: David B. STEWART
Publisher: TIT society of architectural design education (June 2007)
(secretariat: Hiroyasu FUJIOKA Lab. Dept. of Architecture,
Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology)
Price: 1,000 yen